

調査研究報告

第 8 号

目 次

北武藏における初期横穴式石室導入期の様相	増田 逸朗	1
埼玉將軍山古墳出土の鞍形埴輪	岡本 健一	13
吉見町山の根古墳の年代について	利根川 章彦	23
埼玉古墳群関連文献目録Ⅰ	宮 昌之	33
「体験型企画展」開催の試み	田中 裕子	47
行田市埼玉の年中行事 —1975年前後のこと八日から晦日払いまで—	大友 務	61

平成 7 年 3 月

埼玉県立さきたま資料館

はじめに

埼玉古墳群は、日本最大の円墳である丸墓山古墳をはじめ、大型前方後円墳8基が群在することで、東国最大規模の古墳群として広く知られております。

特に、当古墳群最古の稻荷山古墳からは、日本の古代史学会を震撼させた金錯銘鉄剣をはじめ、数多くの遺物が出土しており、これらの出土品は、昭和58年に国宝指定を受け、現在、さきたま資料館で常時展示公開しております。

また、県北地域を中心に調査し、収集した民俗資料が「北武藏の農具」として重要な有形民俗文化財に指定されており、その一部も常時展示しております。

一方、今年度の企画展示にあっては、「彩の国・さきたま収穫祭」と題し、参加者の方々には、様々な収穫作業を体験し学習していただきました。

さらに、当館では、「さきたま風土記の丘」の施設として設置されて以来、継続して埼玉古墳群の復原整備に伴う発掘調査を実施してきました。今年度は、將軍山古墳の復原整備のため周堀調査を進めてまいりましたが、その結果、周堤帯に取り付く「造出し」の検出など、多くの成果を得ることができ、埼玉古墳群の変遷過程の解明にも一矢を投じることができました。

これらの事業を実施するに当たりましては、学芸員の日頃の調査・研究が必須であり、この如何が事業の内容を左右するものであります。私どもは、今後とも調査・研究に一層努力し、その結果を踏まえて資料の公開や事業の実施に当たりたいと存じます。そして、この成果が、埼玉の古墳時代や民俗文化の研究に寄与する事だけではなく、学校教育や県民の多様化された生涯学習の一助となれば望外の幸です。

終りに、当館の運営に対しまして日頃から格別の御指導、御協力いただきました関係各位に対しまして、厚くお礼を申し上げるとともに、一層の御支援、御鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げる次第であります。

平成7年2月28日

埼玉県立さきたま資料館
館長 横川好富

北武蔵における初期横穴式石室導入期の様相

増田逸朗

1 問題の所在

横穴式石室は、追葬可能な構造を備え多埋葬を目的とし、一般的には古墳時代後期の埋葬主体部として登場してくる。この石室構造から、家父長の死を契機に古墳が構築され、その世帯ないし家族の埋葬施設とされており、家族墓的墓制と理解されている。そして古墳時代後期は、この男系的血縁関係の醸成による有力家父長的家族の出現をもって、歴史的に評価されている（註1）。

また横穴式石室は、以前の豊穴構造の粘土槨や木棺直葬と異なり、部屋的な広い空間を有し、ここに器、それも食料を供えたものさえ見られ、明らかに他界觀の変化が読み取れる。器の埋葬施設内への副葬は、古くから大陸や朝鮮半島で見られた現象であり、ここからの影響であることは論をまたない。これからすれば、横穴式石室は、その集団の男系的血縁組成の成熟に加え、新たな他界觀を昇華した者が採用したことになる。

殊、集団の成熟度は、列島では一様とは考えられず、また、横穴式石室採用以前に渡来系の人々が数多く存在し、これにかかる遺物も各地で知られている。これよりすれば、地域における横穴式石室の採用は一律ではないはずである。これに反し、一様に出現する地や特定集団に見られた場合は、擬制的同族関係を含め、より政治的証しとして理解しなければならないだろう。

さて、系譜に関する資料としては、記紀の皇統譜は勿論のこと、少なからず氏族の系譜についての記録もある。しかし、ここで扱う北武蔵に深く関連するものとしては、何と言っても稻荷山古墳の金錯銘鉄剣をおいて他に見当らない（註2）。

周知のように辛亥銘鉄剣は、オオヒコからオワケの臣に繋る八代の男系譜をうたいあげており、さらに、それが雄略大王の時期（辛亥年）とし、5世紀後半の男系世襲の存在を物語っている。

しかし、この系譜については幾つかの疑問も提示されている。まず一代のオオヒコから五代のタサキワケまでは尊称があり、六代がハテヒ、七代がカサヒヨでこれが見当たらない。これをもってオワケの臣の系譜を、彼をもって三代までを確実視して、以前を他氏族との共有系譜とする意見も有力である。この系譜に関し、埼玉古墳群周辺の古墳をみた場合、稻荷山古墳以前の古墳は確認されていない。しいて挙げれば、B種ヨコハケ埴輪をもつ、全長69mのとやま古墳（註3）以外にくく、これとて稻荷山古墳と同時期か、せいぜい一世代古く考えられる程度である。一方、埼玉政権成立の基盤を、比企地域まで拡大し理解するのも魅力的考え方である。これによれば、三代前の首長墓を追うことは可能である。しかし、この地に4～5世紀代の前方後円墳が存在するとはいえ、八代約200年間の首長墓系譜を比定することは、現状では不可能である。

かつて述べたように、私は、オワケの臣が阿部氏系統にかかる人物として認めたにしても、彼自身が主体部の位置や構造から、稻荷山古墳の礫槨の被葬者とする立場は採っていない（註4）。

いずれにしても、辛亥銘鉄剣の八代にわたる系譜の一部は、5世紀後半における首長層の男系血縁組成による世襲を意味するものであり、この評価は変わらない。

さて、前述するように、男系的血縁関係の醸成による男系出自の認識の強化が、氏姓制度成立へと進展させ、すでにその萌芽が銘文中には見られたわけであるが、やがて広く男系血縁意識の高揚が進み、結果、家族認識の変質をきたし、その葬制として家族墓（横穴式石室）の出現を見るという図式が成り立ちそうである。

ここで重要なことは、武藏国造の累代の墓とされる首長墓と、有力家父長的家族の群集墳とで、この現象が同時に進行したかということである。どうもそうではないらしいが、現在の学界では明解な答えは用意されていないのが現状である。

埼玉古墳群における横穴式石室の出現は、現在のところ將軍山古墳（註5）からである。

將軍山古墳は、整備にかかる調査で墳丘長90mで二重周堀をなし、中堤西側に造出しが確認されている。主体部は右片袖の横穴式石室で、副葬品には蛇行状鉄器や銅鏡、石製皿、馬具等の豊富な遺物があることで、つとに知られている。最近では、この副葬品の中に馬胃が確認され、半島との関係が取りざたされている。本墳の築造時期は、後円部西側に取り付く造出し付近から須恵器聰3点が見られ、これがMT85～TK43に比定され、6世紀第3四半期の年代が与えられている。この年代は、副葬品の馬胃や蛇行状鉄器を含め大きく矛盾することなく、大方の容認を得ている。

他に、横穴式石室を主体部とするものに、墳丘長79mで二重周堀を有する、中の山古墳（註6）が挙げられる。この古墳は、須恵質の埴輪形壺を廻らし、埴輪消滅期の様相を呈し、6世紀末～7世紀初頭の年代が与えられている。そして、古墳名を古く「かろうとやま」と呼んだことからも横穴式石室の存在が予測される。

さて、問題となるのは、埼玉古墳群の首長系譜とされる、全長109mの鉄砲山古墳（註7）である。この古墳は、整備にかかる調査で、稻荷山古墳や二子山古墳（註8）と同様の多条凸帯の円筒埴輪が出土しており、その年代を6世紀中葉としている。後に述べることになるが、この時期には群馬県の前方後円墳や埼玉県でも児玉郡の古墳では既に横穴式石室を採用している。

鉄砲山古墳の主体部に調査が及んでいない今日、横穴式石室の有無について論及できないが、現地表の後円東括れ部にはその形跡はない。一方、この古墳に隣接し、これに近い時期とされる瓦塚古墳（註9）では、横穴式石室が開口する墳丘東側がかなり削平されていたにも拘らず、石材の痕跡は見当たらない。これよりすれば、鉄砲山古墳の主体部は竪穴系の埋葬施設で、今だ横穴式石室を採用していないとの推論も成立しうる。

埼玉古墳群の成立の契機を稻荷山古墳に求め、礫榔の被葬者をオワケの臣とし、彼を阿部氏系統の一族として理解する大方の意見からすれば、この累代の墓とされる古墳群の被葬者は、東国でも極めて畿内との繋りが強かったとしなければならない。既に6世紀前半の中央政権下では、横穴式石室が一般的であったにも拘らず、埼玉古墳群の首長は何故この埋葬施設の採用が遅れたのであろうか、疑問は残る。

このように埼玉古墳群は、辛亥銘鉄劍の被葬者論に止まらず、古墳の群構成および主体部論等、日本古代史に関わる数多くの問題を内抱しており、ここに至れば、ひとり埼玉県のみの次元ではない。こと、文化行政に携わる人達の責任は大きく重い。以下、横穴式石室導入期の北武藏（児玉・大里・比企・北埼玉郡域）各地の様相に触れ、これら問題の糸口を探ってみたい。

2 北武藏の様相

【児玉郡】（第1図） 本郡域の古墳は、埼玉県古墳詳細分布調査報告書によるとその数1,380基で、比企郡域に並んで古墳の数が多いが、前方後円墳の出現を見るのは6世紀以降のことである。

一方、集落に関しては、S字状口縁台付甕の分布域に属し、群馬県との関係が知られ、これは後の鬼高峰期にも同様なことが言える。さらに、世帯の自立を暗示させるカマドが、北関東でいちはやく採用された地域とされ、東国の霸者上毛野政権と深い関わりを持つ地方である。

導入以前の主体部 生野山14号墳（註10）は径18.0mの円墳。主体部は墳丘中央に位置し、東西に主軸をとる竪穴式石室で、長軸が2.4m、短軸東が0.75m、西が0.6mで東側がやや幅広い。この測定値からすれば東頭位と考えられる。副葬品にはU字型鍬先が見られ、墳丘からはB種ヨコハケ埴輪と、TK208に比定される須恵器樽型聟が出土している。

長沖27号墳（註11）は径16.0mの円墳。主体部は墳丘中央に位置し、粘土層上に礫を敷き棺床面とし、転石と緑泥片岩で竪穴式石室としている。石室の規模は、長軸2.2m、幅0.45mである。

初期横穴式石室 長沖28号墳（註12）は径16.5mの円墳。前記の27号に隣接し、ほぼ同一規模を示すことや、両墳から出土した埴輪の形態変遷等から、6世紀前半に継続して構築された古墳と考えられる。横穴式石室は転石使用の無袖型で、全長は不明である。玄室は長さ2.99m、幅0.99mでここを墳丘の中央に置くのを特徴とする。この両者を見る限り、埋葬主体部を墳丘中央に、さらに、頭位を同様に収めるようとする思考が看取できる。このことは、横穴式石室導入に際し、前代の葬制に強く規制されていた現れであろう。

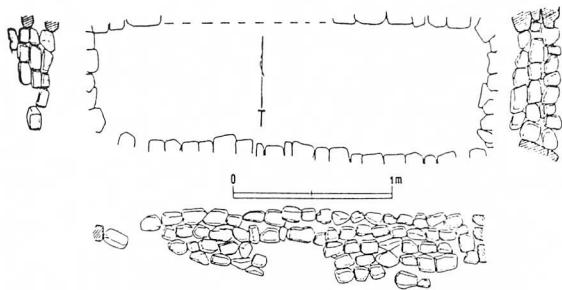
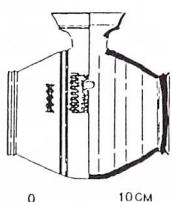
なお、長沖古墳群は、前方後円墳6基を含み、157基からなる武藏国最大級の古墳群である。

北塚原7号墳（註13）は径15.5mの円墳。主体部は無袖型の偏長なプランを示し、全長5.35m、奥壁幅0.78m、羨道幅0.67mを測る。奥壁左側には、MT15の須恵器高坏と聟が供献された様子で出土している。

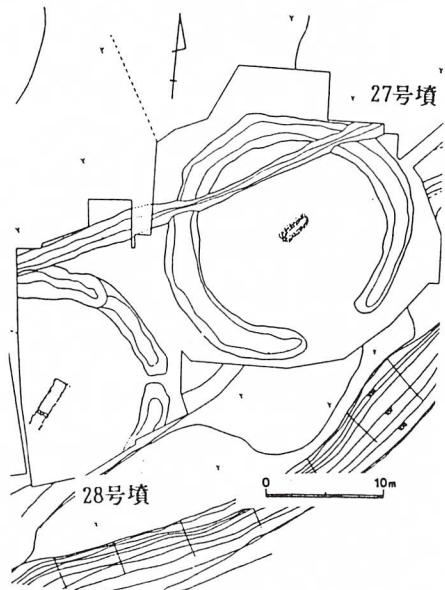
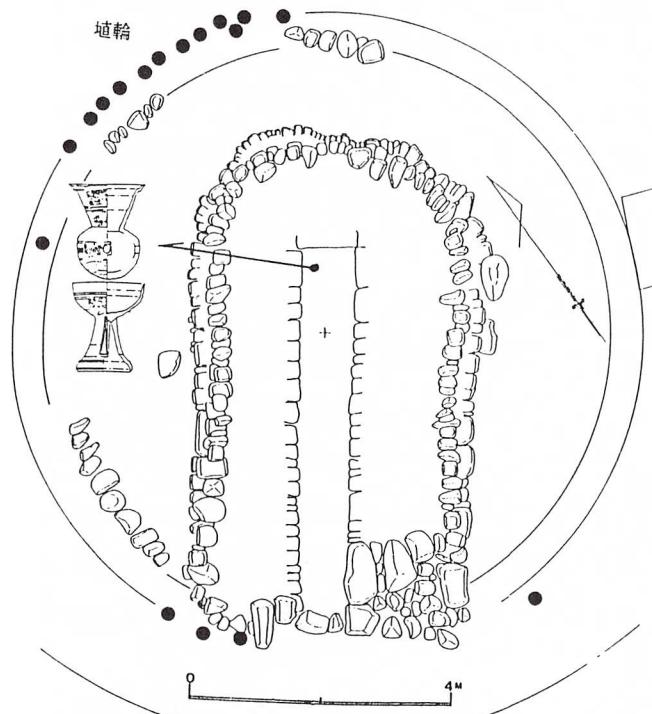
北塚原6号墳（註14）は7号墳に隣接する径11.0mの円墳。全長4.8mの右片袖型横穴式石室である。玄室長2.3m、奥壁幅0.97mに対し、玄門幅が0.5mと極端に狭い構造である。これら2基の古墳とも、奥壁ではなく、遺体埋葬部としての玄室の中心、ないし、遺体頭部に相当する場所を墳丘中心に置くのを特徴としている。

なお、北塚原古墳群は、青柳古墳群（総数240基）の一支群をなし、21基から構成されている。その内容は、前方後円墳で墳丘長37mの北塚原9号墳と、径11.0～19.0mの円墳からなる。石室は、偏長な無袖型と2基の右片袖型があり、全ての古墳に埴輪が伴う。本支群は、北塚原2号墳（註15）の棺床面下に、5世紀後半から出現する鬼高I期の坏が見られることと、7号墳の須恵器等から、武藏国における初期横穴式石室導入期の様相を示す古墳群といえる。

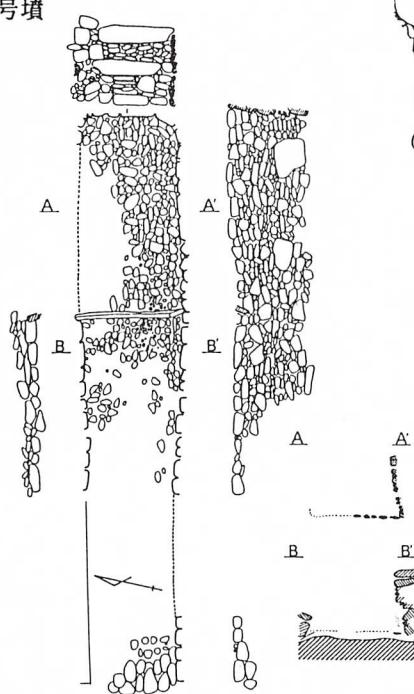
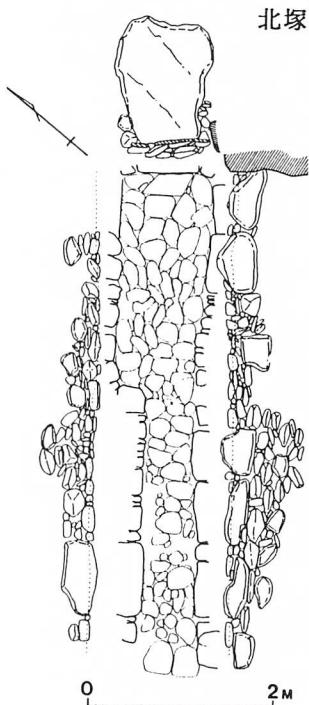
十二ヶ谷戸15号墳（註16）は墳丘径16.5mの、該期では大型に属する円墳。主体部は右片袖状の「L字型」石室と考えられる。墳丘に見合って石室規模も大型で、全長7.7m、奥壁幅2.0m、玄門幅が1.5m、羨門幅0.85mを測る。奥壁は通常大型の石材を2～3段使用するが、側壁と同様な河原石の乱石積である。石室の主軸方向はN-41°-Eを示すが、玄室はこれに直行する。いずれに



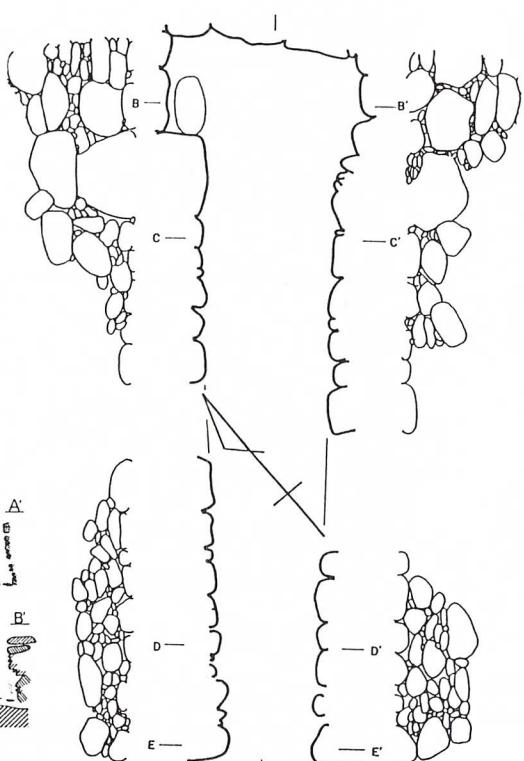
生野山14号墳



長沖27号・28号墳



北塚原6号墳



広木大町15号墳

十二ヶ谷戸15号墳

第1図 児玉郡域の埋葬施設

しろ、本石室の構築原理には、埋葬遺体の方位を東西方向に近づけたいとする、強い意思が働いていたようである。

広木大町15号墳（註17）は中規模の円墳。主体部は無袖型の偏長なプランを示し、全長5.95m、埋葬部長2.09m、奥壁幅0.96mを測る。主軸方向はN-77°-Eで、ほぼ東西方向とり、西に開口する横穴式石室である。埴輪等の特徴から6世紀前葉に構築され、本古墳群で最も古い石室形態を示すものとされている。

[大里郡]（第2図）導入以前の主体部 小前田古墳群第1号石棺（註18）は片岩系からなる箱式石棺。主軸はN-75°-E、規模は内法で長さ1.68m、中央幅0.34mで東側がやや幅広い。これよりすれば、東頭位の埋葬形態といえる。頭位については、同古墳群第5号石棺で人骨が検出され、これが証明されている。

第5号石棺（註19）は主軸はN-67°-E。内法も長さ1.86m、幅0.3mと1号石棺に近似し、東側から頭骨と歯が検出されている。周辺には、他に3基の同様な箱式石棺と1基の埴輪棺が調査されている。埴輪棺の円筒は、凸帯が高く、ナナメハケの特徴を示し、6世紀初頭に近い年代が考えられる。これより、周辺の石棺群も同様な時期として大過ないものと思われる。

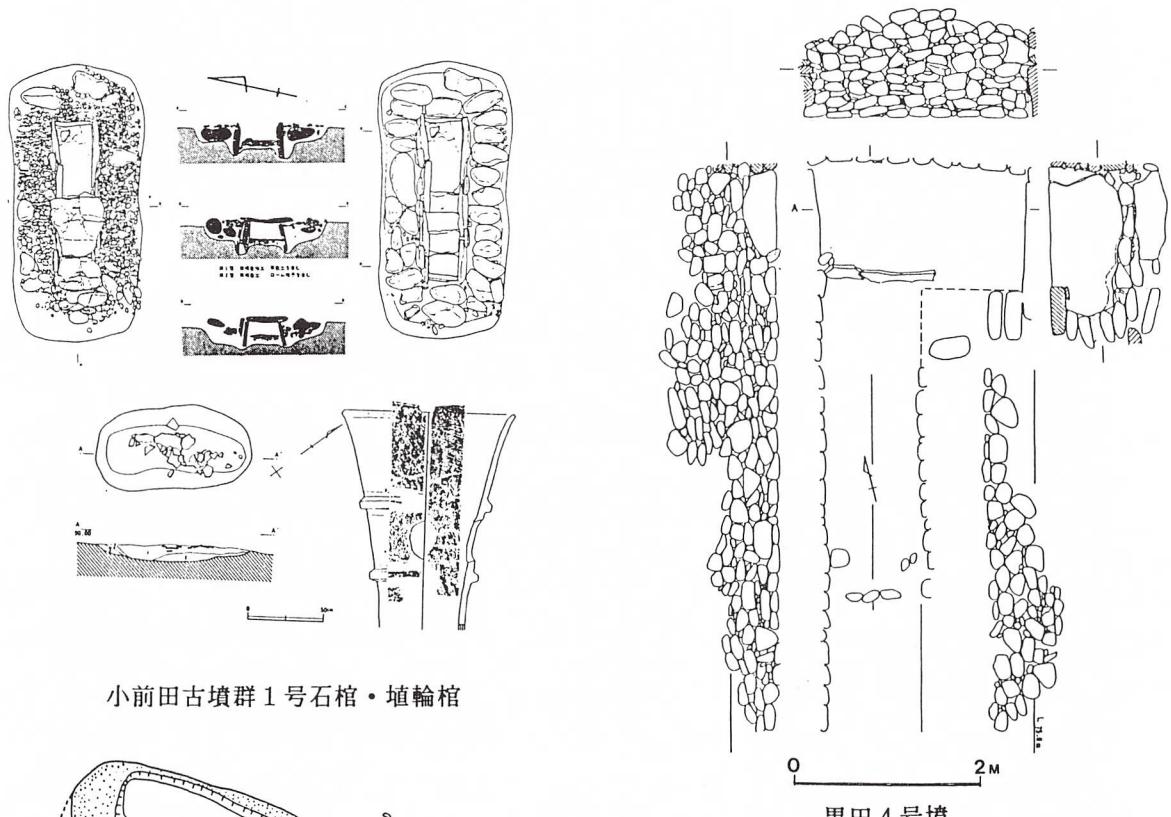
初期横穴式石室 小前田9号墳（註20）は径17.0mの円墳。主体部は無袖型の偏長なプランを示し、主軸はN-49°-Eで、やや西に開口部を振る。石室は現存長5.8m、樋石前方右側の棺床礫とレベルを同じくして、須恵器MT15を模倣した土師器聰4点が検出されている。なお、小前田古墳群は、かつて90基の存在が確認できた大古墳群で、前方後円墳も知られている。大部分は小円墳であり胴張石室も見られ、その盛行期は6世紀中葉から7世紀中葉にかけてと見られる。

黒田4号墳（註21）は径18.0mの円墳。石室は左片袖の偏長な形態を示し、現存長5.6m、玄室は偏長な羨道が樋石で仕切られ、長辺2.2m、右側壁1.2m、左側壁1.1mと東側がやや広い。石積は、奥壁が側壁と同様な乱石積みで構築され、玄室東側に通常の奥壁の大型腰石を二段に積んでいることから、東頭位を考慮に入れた石積み方法と解釈できる。本墳は、副葬品が比較的豊富で、碧玉製管玉、切子玉、ガラス玉、棘笠被鑿箭式鉄鎌、雲珠、鉢具、帶金具、兵庫鎖（鎧鞆）、連結轡が見られ、鉄鎌の型式や馬具等からMT15～TK10頃に比定されている。

[比企郡]（第2図）導入以前の主体部 諏訪山1号墳（註22）は径20.0mの円墳。主体部には粘土櫛が2基存在し、2号櫛の主軸はN-60°-Wで、全長3.44m、幅0.9mを測り、遺物の出土状態から東頭位と見られる。1号櫛からは鉄剣、鉄鎌、ガラス玉が、2号櫛からは直刀、鉄鎌、橢円形鏡板付轡、辻金具、鉢具、鈴付腕飾にTK47期の須恵器が棺外から出土している。

初期横穴式石室 諏訪山4号墳（註23）は規模不明であるが、6世紀後半の円墳と見られる。石室は凝灰質砂岩の切石の無袖型で、全長4.7m、玄室長3.5m、奥壁幅1.75m、羨道幅1.25mを測り、主軸はN-60°-Eで、東頭位を示す。

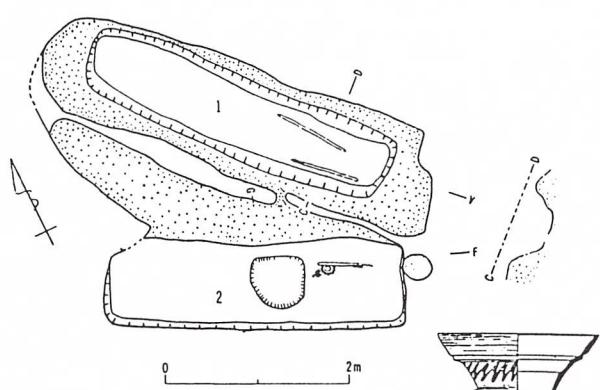
長塚古墳（註24）は全長33.0m、後円部径24.0m、前方部幅12.0mの前方後円墳。主体部は凝灰質砂岩の切石を使用し、後円部に右片袖型横穴式石室を、前方部に竪穴式石室が見られる。横穴式石室は全長5.7m、玄室長4.0m、玄室幅1.5m、羨道幅0.9mを測る。竪穴式石室は長さ2.3m、幅1.0mである。底部調整の円筒埴輪の存在や墳形等から、6世紀後半でも中葉に近い時



小前田古墳群 1号石棺・埴輪棺

0 2M

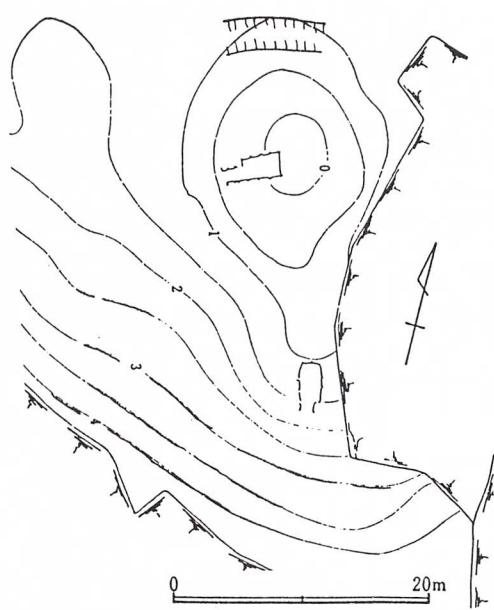
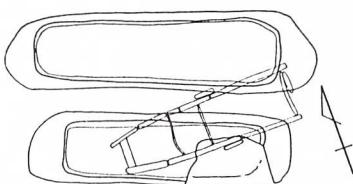
黒田 4号墳



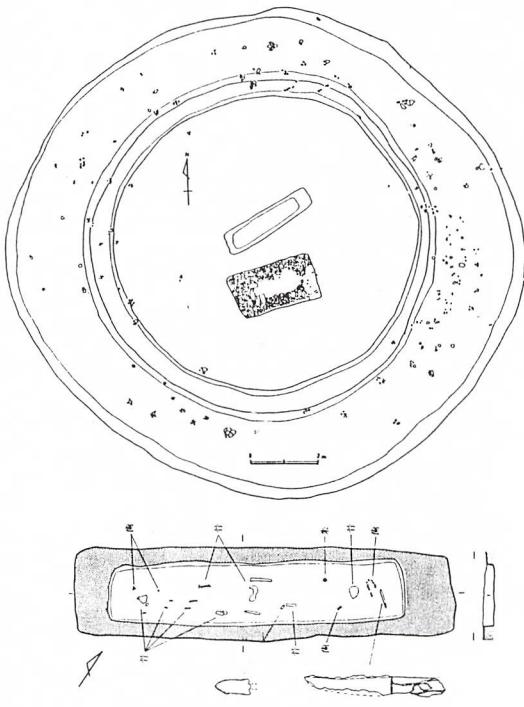
諏訪山 1号墳

10m

大日塚古墳



野原古墳



酒巻 10号墳

第2図 大里・比企・北埼玉郡域の埋葬施設

期と推定される。

野原古墳（註25）は全長約40.0mの前方後円墳。墳形は長塚古墳と同様に前方部が未発達で、前方部と後円部に2基の横穴式石室を持つ。当古墳は、踊る埴輪を出土したことで著名である。

後円部の石室はN-62°-Eで、全長4.6m、奥壁幅2.0m、玄室長3.0m、羨門幅1.1mを測る右片袖型石室。これに対し、前方部は南に開口する左片袖型で、玄室長3.1mを測り、胴張りが見られる。両者とも凝灰質砂岩の切石を使用している。前方部の石室の胴張りから、この石室の築造時期は6世紀末とできようが、後円部の石室はこれより古い形態である。この時期に、前方後円墳の第一義的主体部が、通常と異なり西に開口する事実は注目に値する。

[北埼玉郡] (第2図) 導入以前の主体部 酒巻10号墳（註26）は径9.0mの小型円墳。中央に2基の埋葬施設を持つ。竪穴式石室は主軸をN-72°-Eとし、東西2.7m、南北1.4mの掘方に小河原石を敷き詰め、石室はやや大型の河原石を側石とし、内法は長さ1.5m、幅0.3m程である。一方の粘土櫛？は、中央部に位置し、長さ2.34m、幅0.43mを測る。ここからは鹿角装刀子、鉄鎌、朱が見られ、埴輪等から6世紀前半の年代が与えられている。

大日塚古墳（註27）は径22.0mの円墳。墳丘中央に3基の埋葬施設を持つ。第1次埋葬時は箱式石棺で、主軸はほぼ東西方向をとり、内法は長さ1.8m、幅0.38m、東幅0.55mを測り、東頭位を示している。本主体部の直上に主軸方位N-70°-Wの2基の粘土櫛が、並列して検出されている。規模は内法長さ2.05m、西幅0.5m、東幅0.57mで、一方が内法長さ2.55m、西幅0.55m、東幅0.64mで、両者とも東側が幅広い。ここからは、鹿角装刀子、直刀、鉄鎌が見られた。古墳の時期は、周堀から検出された少量のヨコハケ埴輪と、鹿角装刀子等の副葬品から、6世紀初頭とすることができる。

初期横穴式石室 将軍山古墳は全長90.0mの大型前方後円墳。後円部の右片袖型、前方部に木棺直葬の二つの施設を持つ。石室は段築上南面に開口し、奥壁はほぼ後円中心部に置く。規模は玄室長3.2m、幅2.0m、玄門幅1.0mで、羨道は不明であるが、段築面に構築されており、さほど長いものとは考えられない。時代を示す遺物としては、石室内の副葬品があるが、後円部造出しから発見された須恵器駆4点が、MT85-TK43に比定されることから、本墳の構築は6世紀第3四半期とされる。加えて、石室内からもTK209の須恵器から、かなりの追葬幅が考えられ、これを配慮すれば、時期差のある豊富な副葬品の矛盾もここに解決される。

3 考 察

以上、北武藏の横穴式石室導入以前の埋葬施設と、各地における初現期の横穴式石室の様相について、主に形態と方位及び時期に重点を置いて概略を述べてみた。しかし、この地域がかつて東山道に属していた歴史性に鑑み、本論に関わる上毛野の状況を加え、以下論及していきたい。

*導入期以前の様相 主体部の種類には竪穴式石室、箱式石棺、粘土櫛、木棺直葬、埴輪棺、木炭櫛があるが、後3者については確認例が少ない。

竪穴式石室は、生野山14号墳に代表されるような、10~20cm程の河原石の乱石積で、長辺2m前後の単体埋葬程度の規模を示し、所謂片岩割石による超大なものではない。石材については、ここが地理的には秩父山系に近く、河原石は勿論のこと必要とあらば、緑泥片岩の割石さえ採集可能

な条件は備えている。同様なものとしては長辺5.2m、短辺2.4mの石室を持つ生野山将軍塚古墳（註28）があり、幅が広く特異な形態を示す。ここからは、格子目タタキの円筒埴輪がみられ、石室形態を含め、たぶんに半島的要素を窺うことのできる古墳である。一方、酒巻10号墳のように、石室と土坑の間を小河原石で充填する技法も見られる。

箱式石棺は、組合式のものが前述の生野山将軍塚古墳の墳麓や、大日塚古墳の第1次主体部等がある。石室と同様土坑の間を河原石で充填するのが、小前田古墳群1号石棺である。

粘土櫛は、諏訪山1号墳や大日塚古墳、酒巻10号墳等に見られるが、諏訪山1号墳を除いて、白色粘土の量が少ないので一般的である。なお、前山2号墳（註29）においては、粘土櫛に偏平な河原石を棺床面に敷き詰めるという特異な形態のものも存在する。

複数の埋葬施設の組み合せには、①竪穴式石室+箱式石棺、②箱式石棺+粘土櫛、③粘土櫛+木棺直葬が確認できるが、第一義的主体部の形態を特定するまでの資料は揃っていない。しかし、埋葬位置やこれらに掛かる労働量を厚葬思想の現れとすれば、竪穴式石室→粘土櫛・箱式石棺→木棺直葬の順で扱われたであろうことは推測に難くない。

主体部の位置は、円丘中心に遺体頭部を置くのではなく、埋葬施設中央をここに設置するようである。生野山14号墳や長沖27号墳が好例である。また、複数の埋葬を想定していたかは疑問であるが、大日塚古墳等は最初の箱式石棺を中心とし、そして後の粘土櫛2基がこれを中心に左右に振り分けられている。酒巻10号墳のものも同様に円丘中心から左右に位置している。これらの埋葬施設の在り方すれば、墳丘中心部に対する意識が、主体部構築に際して極めて強く働いていたものとみられる。

主体部の方位は、ほぼ東西を示すものが大部分である。加えて、その頭位は、埋葬施設の短辺の幅より東位を想定できるものが多い。これを確実視するものに酒巻10号墳や小前田古墳群5号石棺がある。副葬品や頭骨・歯から東頭位を証明できる資料である。これら埋葬施設の墳丘中央設置や東頭位志向は、導入期の横穴式石室の在り方に大きな影響を与えることになる。

ここで扱ってきた導入期以前の古墳には、やや時代幅がある。生野山14号墳は周堀からTK208の樽型聴とB種ヨコハケ埴輪が、諏訪山1号墳の1号櫛外からTK47の須恵器と2号櫛の副葬品に扁平鏡板付二連式銜轡が、大日塚古墳はB種ヨコハケ埴輪が、小前田古墳群1号石棺に隣接する埴輪棺からはナナメハケ円筒が確認されている。また、大日塚古墳と同市内の酒巻10号墳は鹿角装刀子を副葬している。

これらの年代決定に当っては、須恵器と火山灰FAについて以前に論考したことがある（註30）。ここで概述すると、FAの降下はTK47の後半段階に見られ、この時にはB種のヨコハケ埴輪は見られず、ナナメハケ埴輪が確認される。実年代に関する資料、稻荷山古墳については、第3の主体部を想定しており、オワケの臣を礫櫛の被葬者と考えない立場から、辛亥年をTK23の範疇でとらえている。よって火山灰FAの降下の時期のTK47の後半段階を、おおよそ500年を想定し、後に触れるMT15の段階を、6世紀第1四半期にかかるものと想定している。

以上よりすれば、ここで扱った竪穴系主体部の時期は、5世紀第3四半期から6世紀第1四半期とすることができる。

*出現期横穴式石室の構造と特徴 当地の初期横穴式石室の平面形態には無袖型、右片袖型、左片袖型が見られるが、今のところ両袖型が確認されていない。左右片袖型の中には、奥壁に沿って小玄室を設ける所謂「L」字型石室がある。なお、両袖型が出現するのは、石室に胴張りが現れるT K43の時期を待つようである。無袖型石室は北塚原7号墳に代表される。全長5.35m、奥壁幅0.78m、羨道幅0.67mの極めて偏長な形態を示す。この偏長なものは児玉、大里郡域に初期横穴式石室として広く分布し、隣接する群馬県側にも見られる。構築方法は、奥壁を一枚岩か2段積みとし、側壁は河原石の乱石積技法を用いるのが常である。北塚原7号墳の場合、奥壁より3.2mの所に樋石を抜いた痕跡があり、ここまでが玄室としての空間とも考えられる。玄室高は、奥壁の高さから1.0m前後とみられ、天井高の低い特徴を示す。棺床面には後に現れるバランスではなく偏平な比較的大ぶりの河原石を敷き詰め、前二子古墳（註31）のような切石ではないが形態が似ている。しかし、所謂畿内型の石室（註32）とは構造的にまったく異なり、その系譜をそこに追うことはできない。右片袖型に北塚原6号墳がある。側壁は河原石の乱石積で、棺床面も7号墳に共通している。ここで注目したいことは、玄室の大きさが前述する生野山14号墳とほぼ同一規模であることと、玄門幅が0.50mと極めて狭いことである。この石室は、玄室内で木棺を組み立てて納棺しない限り、追葬不可能な構造である。平面形態こそ横穴的であるが、羨道の機能を十分果たしたか疑問な石室である。「L」字型としては、黒田4号墳がある。奥壁を側壁同様に積み、玄室右側壁を通常の奥壁のような積み方を施し、玄門入り口は樋石で区切っている。後に触れるが、頭位を意識した石室構築方法である。

さて、偏長な無袖型石室を含め、初期横穴式石室の特徴を列記してきたが、この形態的機能はどこにその目的が在るのであろうか。結論を急げば、その意とするところは、玄室を墳丘の中央に設置するためのものと考えられる。ちなみに、北塚原6号墳は頭位置が、また北塚原7号墳は樋石から想定される玄室中央に墳丘の中心が位置する。このことは「L」字型石室の十二ヶ谷戸15号墳、黒田4号墳でも同様な結果を示している。これからすると、新たな埋葬施設導入にあって、前述する5世紀の中央埋葬思考を忠実に踏襲しているようである。なお、初期横穴式石室として最大規模の全長16.37m、羨道長12.0mを測る群馬県の王山古墳（註33）は正にこの例である。

方位に関する資料としては、長沖27号墳、同28号墳がある。長沖27号墳は小前田古墳群1号石棺に類似し、長沖28号墳は偏長な横穴式石室で前者に隣接する。27号の土坑の大きさは28号の玄室と同規模で、かつ石室方位がほぼ一致する。通常の横穴式石室は南に開口するのが一般的である、前代の墓制である堅穴式石室に規定された横穴式石室とすることができます。西に開口（N-77°-E）するものとして広木大町15号墳がある。樋石を参考にすれば玄室長2.09mで奥壁隅が通常と異なり、矩形をとらず丸味を帯び、これが生野山14号墳の堅穴式石室に近似する。横穴式石室としては使用石材も小振りで、この点も前者と共通している。

これらとともに、羨道を南北にしながら、玄室が東西方位に設置するのが「L」字型石室であり、十二ヶ谷戸15号墳、黒田4号墳や群馬県の権現山2号墳（註34）である。同県の「T」字型石室である上陽村24号墳（註35）も、同じ発想のもとに採用された横穴式石室といえる。

年代を知る手掛かりとしては、北塚原7号墳がある。MT15の須恵器2点が完形で出土し、高坏

は在地産的胎土であるが、軽は極めて焼成もよく造りがシャープである。前述のように該期の年代は6世紀第1四半期とすることができる。北塚原2号墳の土師器坏は内面に暗文がみられ、5世紀後半から出現する外来系のものであるが、器高がやや低くなつておりTK47の末からMT15の時期に伴出するものと考えてよい。よつて、児玉地域は早ければ、6世紀初頭には横穴式石室が出現していた可能性が十分ある。

*土器副葬形態と他界觀（図3） 横穴式石室には大量の須恵器が供献されるのが一般的である。なるほど、畿内的石室とされる築瀬二子塚古墳（註36）では確かにこれが見られる。しかし、これ以外の初期横穴式石室にあっては必ずしも多くはなく、むしろ稀である。これにヒントを与えてくれるのが、北塚原2号墳と小前田9号墳である。北塚原2号墳の玄室棺床直下から、正位で前述の土師器坏が出土している。小前田9号墳からは、羨道床に埋められるように、MT15の須恵器を模倣した土師器軽4点が検出されている。死者の冥界での供物を捧げるのであれば、北塚原7号墳のように高坏や軽を玄室に据え置き供えるわけである。北塚原2号墳の段階では、石室構築時の儀礼用として、小前田9号墳では、須恵器を石室内に副葬することは知っていたが、これを模倣したとはいえ、供物を盛る行為は表現されていない。北塚原7号墳にいたりここに初めて、玄室内空間が意味する、本来の横穴式石室の機能と他界觀を理解できたものと推定される。これら3者の変移は土器の年代が示すように、初期的な短期間に起つた現象であろうが、その属する集団が旧墓制にいかに拘らざるを得なかつたかの問題であり、これに政治的関係が加われば、より複雑な導入現象が現れるはずである。前方後円墳を含め、比企や北埼玉郡域が導入が遅れるのは、この辺に原因がありそうである。

*初期横穴式石室導入の意味 土器副葬形態から横穴式石室への須恵器の大量供献は、冥界における死者の生活に供するものであり、ここに供物を盛り付け、石室空間内の生活を想定する死生觀は、新たな他界觀として導入される。しかし、この際、児玉・大里郡域と比企・北埼玉郡域ではその導入期に四半世紀以上の差があり、後者には遅く出現する。前方後円墳は、比企では初現が長塚古墳で、北埼玉では將軍山古墳であり、後者は6世紀第3四半期のことである。

児玉・大里郡域は、5世紀代には前方後円墳はみられず、これに変わり大型円墳が構築されたことで知られている。比企・北埼玉郡域は4世紀代の諏訪山古墳（註37）に始まり5世紀には、雷電山古墳（註38）、野本將軍塚古墳（註39）、稻荷山古墳の3基は該期武藏の最大規模を誇り、いわゆる政権中枢を担う地域といえる。そして、ここは旧く吉ヶ谷文化圏の中心を成し、古墳時代には先ず前方後方墳が、続いて遅く前方後円墳が出現し、地域政権が早くから確立する地である。集団の紐帶的機能を果たし、その記念物としての古墳造営にあっては、その儀礼を最も厳格に執り行わなくてはならない。血統・出自が重視される社会にあって、その伝統的葬法やこれにかかる厳謹な儀礼が遂行されることは、これに参加した配下集団の敬意の念を増幅し、次期首長としての立場を保証するものである。これによれば、当然ここで執り行なわれる埋葬儀礼は伝統を厳守した保守的なものにならざるをえない。將軍山古墳（前方後円墳）の横穴式石室の年代と北塚原7号墳（円墳）との導入期差の歴史的要因はここに存在するものと考えられる。ちなみに、6世紀初頭とされる東国初出の、畿内型石室を持つ築瀬二子塚古墳は、東山道沿の要衝に突如として現れ、次代に繼

承しない、極めて政治性の色濃い前方後円墳とされている。

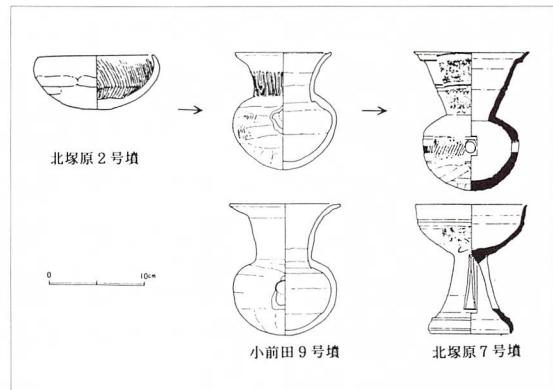
これらに関わる事象として、課題の一つである横穴式石室導入期の將軍山古墳に触れてみたい。

前述したように、將軍山古墳は中堤帯造出し、多条凸帯埴輪、その規模から稻荷山古墳以来の本古墳群の宗主の墓として理解できる。しかし、平面形態はともかく、主軸に関しては稻荷山、二子山、鉄砲山古墳と異なりやや西に振っている。このことは、宗主の墓でありながら、この段階で横穴式石室を採用し、石室の南開口を保つため、伝統的主軸を西に振らざるを得なかったものと考える。しかし、宗主の階層差を保つため、セカンダリークラスの他の古墳程までは、その主軸を振り切れなかったものと考える。中段に石室を開口させるのも後円部中央に奥壁を設置するためであり、加えて、伝統的豎穴の埋葬位置である墳丘上位に置くための葬法とも言える。

いずれにしろ、將軍山古墳の石室の位置と墳丘の方位は、首長（宗主）伝来の伝統的保守的葬法と新来の葬法との融合形態である。この時点では、いかに旧葬法を遵守しこれを執行するかが、埼玉政権の首長には求められ、このことが配下の集団の支持を得る要因になったものと推察される。

*無袖（短冊）型石室の出現と系譜 偏長短冊型石室は、東山道の岐阜、伊那谷、群馬、北武藏に分布する特異な形態で、畿内には存在しない。この構造は簡単で帽石、玄門柱など設置せずせいぜい玄室を区切る樋石程度である。その出自を生野山14号墳の豎穴式石室と初期横穴式石室の玄室とを比較し考えたが、石室構造に飛躍が大きく、現在確認されている資料からは系譜は追えない。偏長な玄室形態としては、豎穴系横口式石室として九州に勝浦12号墳等（註40）があるが、基本的には豎穴系であり玄室形態の類似のみでこの系譜は追えない。しかし、生野山將軍塚古墳の石室は、やや幅広い特異なものであり、この古墳の半島的要素を加味すれば、必ずしもこの古墳からの系譜という意味ではなく、九州や畿内と同様な次元で当短冊型石室が出現しても不思議ではない。ちなみに、5世紀後半の雄略朝以降、毛野政権を含め半島との関係は頻繁であったはずであり、カマドや土器、古墳の副葬品からもこのことは明らかである。横穴式石室導入期以前の遺構、遺物から見た両地域の深い関係から、当然北武藏北部もこれに加わった可能性は十分ある。半島の石室形態を導入するに当たり、彼等にとって重要なことは、先に述べた伝統的在地墓制との融合であり、この中央埋葬思想を厳守したため偏長短冊型石室を生み出すことになったものと推察される。

*派生する問題 比企・北埼玉郡域の古墳が保有する伝統的保守的な要因を、首長墓の変遷から述べてきた。さて、地域史的視点に立脚し、北武藏の首長墓の変遷を振り返れば、稻荷山古墳以前の5世紀の比企には、武藏における最大首長墓が少くとも2基存在し、その一つの野本將軍塚古墳においては、南北主軸という意味で埼玉古墳群と一致する。さらに、雷電山古墳にあっては、埼玉古墳群から有視界の距離に立地する。比企における5世紀後半以前の首長墓の存在と、さらに將軍山古墳の二つの主体部の在り方は、比企地域の長塚、秋葉塚、野原古墳と共に通した葬制を有してお



第3図 石室内出土土器の変遷

り、かつ、横穴式石室の導入期もほぼ一致し、ここに両地域の深い関係が窺える。これらの諸事象から、稻荷山古墳以前の北武藏の首長墓の変遷と系譜は、比企地域とすることができる、6世紀以降の墓制の在り方にも極めて多くの共通性が看取される。これらを重視すれば、稻荷山古墳が突如として出現したとする認識も氷解し、礫榔の被葬者論も一変する。本論から導き出された両地域の共通性を再確認することは、比企地域を加味した埼玉政権成立論に及ぶものと考えられる。

しかし、現状では未解決の課題も多く存在する。論旨に沿い今後取り組んでいきたい。加えて、児玉町秋山諏訪山古墳（註41）については、筆者自身、埴輪を持たない該期前方後円墳の理解が未消化である。児玉郡域の前方後円墳における横穴式石室採用時期の評価についても、改めて稿を草したい。

- 註1 岩崎卓也『古墳の時代』 教育社 1990
- 註2 斎藤忠他『埼玉稲荷山古墳』 埼玉県教育委員会 1980
- 註3 塩野博他『とやま古墳』 埼玉県教育委員会 1967
- 註4 増田逸朗「埼玉政権の法量的分析」『埼玉考古学論集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 註5～註9 『鉄砲山古墳』他 埼玉古墳群発掘調査報告書 第2集～第8集 1985～1992
岡本健一「埼玉將軍山古墳の横穴式石室について」『調査研究報告第7号』埼玉県立さきたま資料館 1994
- 註10 菅谷浩之他『児玉町・美里町生野山古墳群発掘調査概要』『第6回遺跡発掘報告会発表要旨』 1973
- 註11・12 菅谷浩之他『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書 第1集 1980
- 註13～15 増田逸朗「北塚原古墳群発掘調査概要」『第4回遺跡発掘報告会発表要旨』 1971
- 註16 菅谷浩之他『青柳古墳群発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告 第19集 1973
- 註17 小渕良樹他『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査会報告 第40集 1980
- 註18～20 灑瀬芳之『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第68集 1987
- 註21 塩野博他『黒田古墳群』 黒田古墳群発掘調査会 1975
- 註22・23 金井塚良一他『諏訪山古墳群』 考古学資料刊行会 1970
- 註24 金井塚良一他『三千塚古墳群発掘調査－中間報告－』 三千塚古墳群調査会 1962
- 註25 亀井正道「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『ミュージアム』310号 1978
- 註26 斎藤国夫他『酒巻古墳群』 行田市文化財調査報告書 第18集 1987
- 註27 斎藤国夫『大日種子板石塔婆および古墳の調査』 行田市文化財調査報告書 第4集 1978
- 註28 柳田敏司「埼玉県児玉郡生野山將軍塚古墳発掘調査概報」『上代文化』第34輯 1964
- 註29 小久保徹他『東谷・前山2号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集 1978
- 註30 註4と同じ
- 註31 右島和夫「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』 第12集 1983
- 註32 土生田純之『日本横穴式石室の系譜』 学生社 1991
- 註33 中村富夫「王山古墳」「群馬総社古墳群」 観光資源保護財団 1977
- 註34 横沢克明「権現山2号古墳」群馬県史『資料編3』 1981
- 註35 松島栄治他「広瀬団地古墳群発掘調査報告」 前橋市文化財報告書 第1集 1970
- 註36 尾崎喜左雄 「築瀬二子塚」群馬県史『資料編3』 1981
- 註37 金井塚良一「比企地方の前方後円墳」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第1号 1979
- 註38 増田逸朗他『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室 1986
- 註39 註37と同じ
- 註40 柳沢一男「豎穴系横口式石室再考－初期横穴式室の系譜－」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982
- 註41 坂本和俊他『秋山古墳群』 児玉町史資料調査報告 古代 第2集 1990

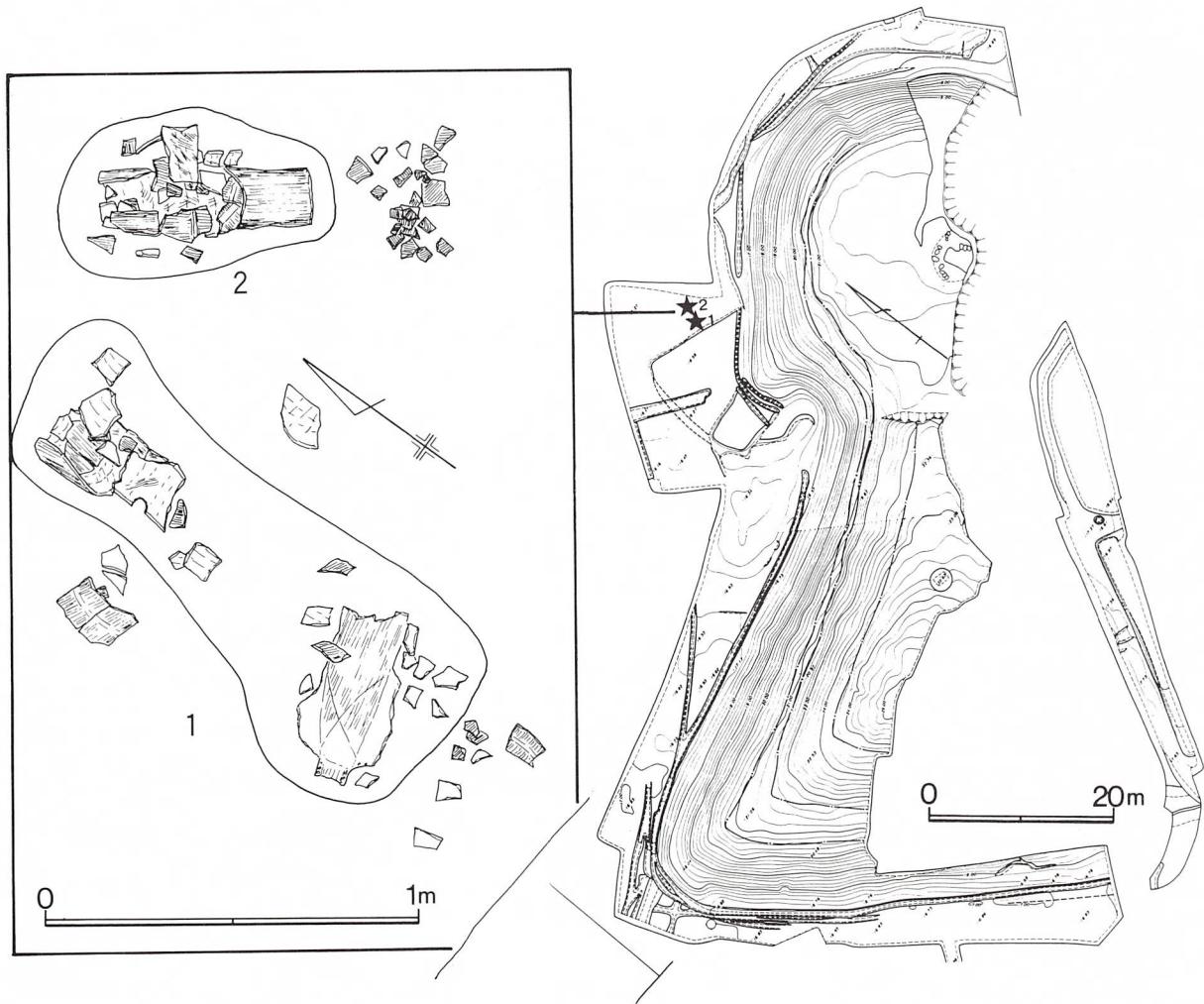
埼玉將軍山古墳出土の鞍形埴輪

岡 本 健 一

1 はじめに

明治27年に発掘され、多くの遺物が出土したことで知られていた埼玉將軍山古墳を復原整備するため、県立さきたま資料館では、国保補助事業費を受けて平成3年度より発掘調査を行っている。発掘調査の成果や出土遺物については、平成4年度企画展『さきたま將軍山古墳と銅鏡』で、また横穴式石室については『調査研究報告』第7号拙著で一部を発表している。

平成5年度の調査では、造り出し付近の周堀から鞍形埴輪が、ほぼ完形に近い状態で出土した。將軍山古墳では他に、盾や馬、人物などの埴輪が出土しているが、いずれも小片で全体を復原することは現状では困難である。その点でこの鞍形埴輪は將軍山古墳の埴輪祭祀についての重要な資料である。



第1図 将軍山古墳鞍形埴輪の出土状況

古墳時代の弓矢の収容具として、鞍と胡籠が知られている。前者は、「鎌を上に向けて矢を納め背負って使用する」もので、後者は「矢羽を上にして矢を納め腰に下げて使用する」ものである（註1）。奈良時代以降は胡籠の方が一般的となり、鞍は儀仗用として残っていくにすぎない（註2）。形象埴輪では、鞍は鞍形埴輪として埴輪祭祀の中心的な役割をもつほど、多く作られているのに対して、胡籠を単独に表現したものはなく、人物埴輪の腰に貼付されているにすぎない。それは器形が平面的で樹立に際して面的効果をあげるという理由だけでなく（註3）、鞍自体に「神秘性乃至呪術性ある武器」という観念があると考えられていたからである（註4）。

鞍形埴輪は、古墳に形象埴輪が樹立され始めると早い段階で、4世紀後半には畿内の古墳ではすでに登場している。墳頂の主体部を包囲するように方形区画に立てられ、死靈を悪邪から守る役割をもっていた。その後鞍形埴輪は盾形埴輪とともに、器財埴輪の中心的な器種として連綿とつくれていく。人物埴輪が登場して以降、6世紀の前半くらいから鞍形埴輪もその器形を大きく転換して、いわゆる「奴廐形」鞍形埴輪があらわれ、関東地方全域で盛行する。従来は関東特有の埴輪と考えられていたが、最近では畿内でも出土例があり、その起源は畿内にあるとする意見が強くなっている。本稿では、これまであまり注目されなかった、この「奴廐形」鞍形埴輪について埼玉県内出土のものを中心に形態分類を行い、將軍山古墳の鞍形埴輪の諸問題について論じていきたい。

2 將軍山古墳出土の鞍形埴輪

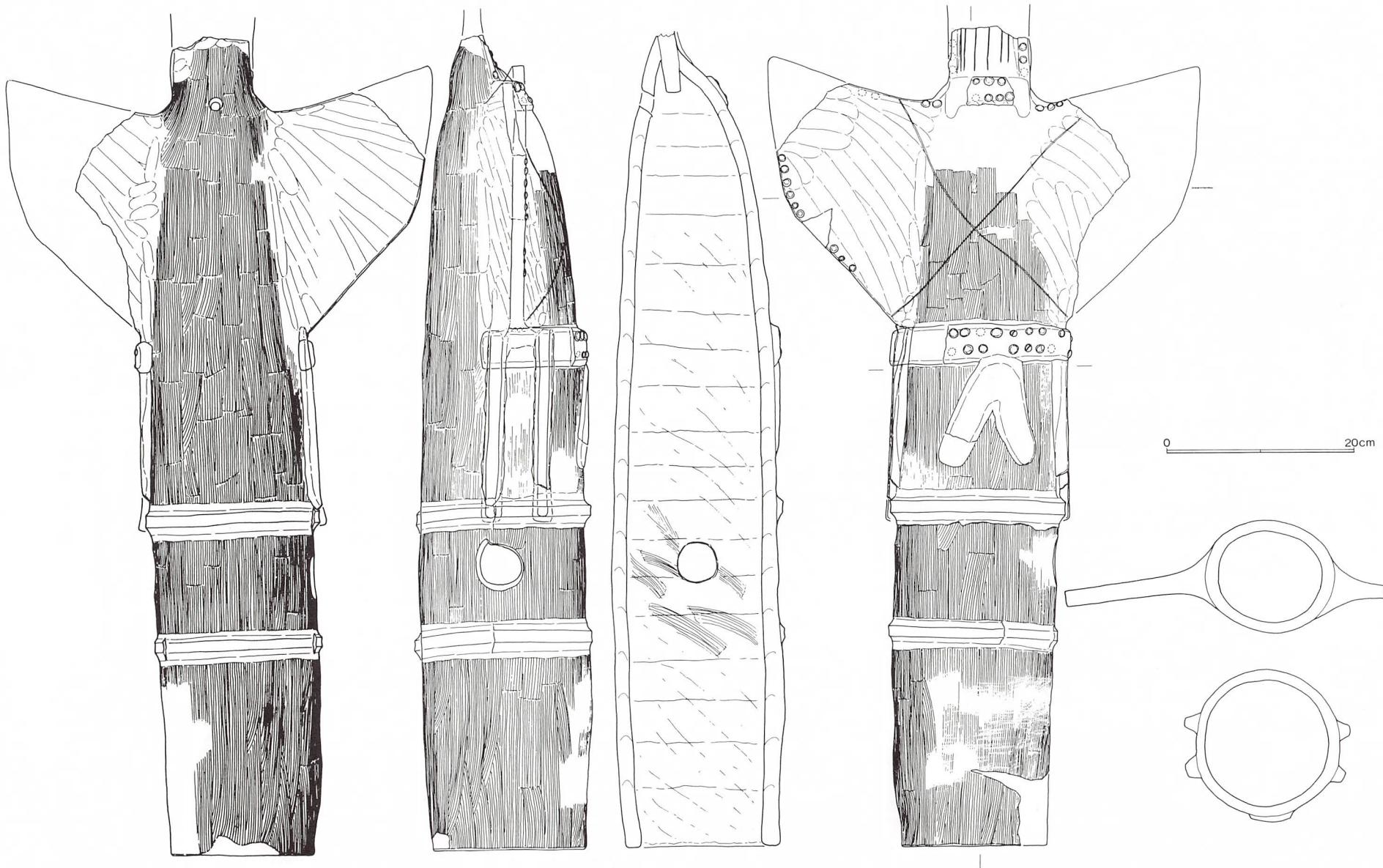
ここで紹介するのは、ほぼ完形に復原された鞍1、基部及び矢筒下部のみの鞍2、そして鎌部のみの鞍3～7である。この他にも鰭にあたる部分が数点出土し、また鞍とは確認できない形象埴輪の台部の破片も出土していると考えられるから、実際はさらに多くの鞍形埴輪があったものと推定される。

【出土位置】 図示した鞍はいずれも造り出しの北側周堀から出土している（第1図）。最も残りのよかつた鞍1と鞍2は造り出しの裾から隣接して出土した。鰭部の破片は造り出しの北側以外にも、くびれ部周堀から多数、前方部墳丘上からも若干出土している。墳丘は流失が激しいため埴輪の樹立状況についてはほとんど情報が得られなかったが、鞍形埴輪については、その出土頻度からみて、造り出しに並べられていたと考えるのが妥当であろう。一方、盾形埴輪は造り出しの北側周堀からはほとんど出土せず、くびれ部や前方部西側の周堀や墳丘上からも多く出土しているので、鞍形埴輪とは樹立位置を異にしていた可能性がある。

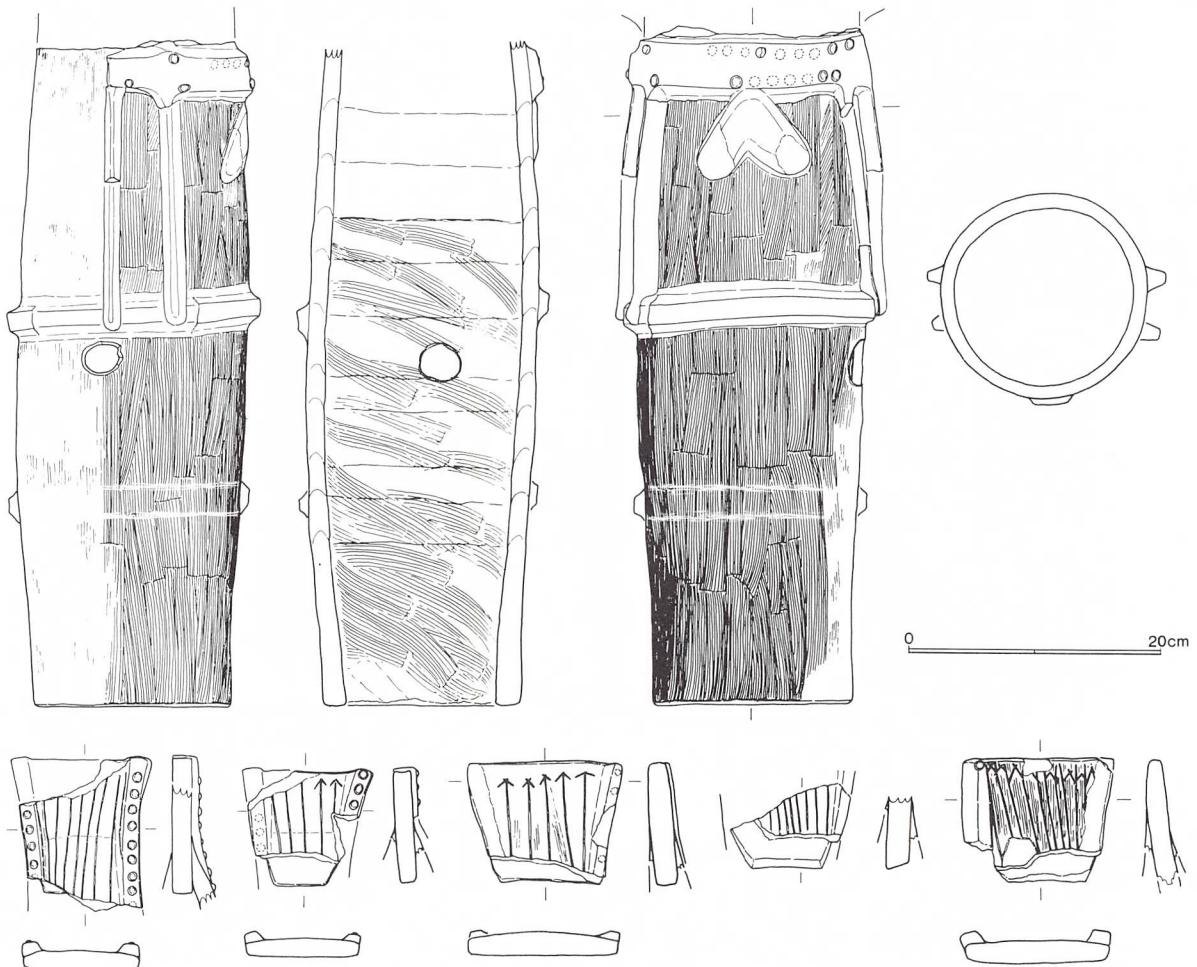
【形態の特徴】 鞍1（第2図）は現高89.4cm、底径15.8cmである。鎌部先端は欠失しており、後述する鎌部の破片と比較すれば、実際の高さは93～95cmくらいであったと推定される。鰭は左側の先端および右側の約半分が欠失しているが、反転復原すると鰭幅は約46cm前後であつただろう。その他、底部の約1/3、鉢止めした横帯や、凸帯などが一部欠失している以外はほぼ完形である。

基部は下から2段目の凸帯までで、ほぼまっすぐ立ち上がる。高さは約37cmである。2本の凸帯間には透孔が左右に穿たれている。

それより上部は矢筒部にあたる。鰭部の下端に接して2列の鉢止めを表現した、幅約4cmの横帯が側面まで巡る。その横帯の下には、背負い紐の結び目を表現したと思われる垂飾りが付く。しか



第2図 将軍山古墳出土 鞍形埴輪（1）



第3図 将軍山古墳出土鞍形埴輪（2）

し背負い紐自体は横帶よりも上部にあり、その機能が全く無視された表現となっている。矢筒の側面、鰭の下には縦に2本の凸帯が、2段目の凸帯まで平行に貼り付けられている。後述するように、多くの鞍形埴輪では、裾のように広がる部分であり、この埴輪の特徴がよく表れている。

鉢止め横帶の上部は矢筒部本体は、鎌部にむかって次第にすぼまっていく。断面はやや左右に長い楕円形である。ここに背負い紐が1本の線刻によって、×字形に単純に表現されている。鰭はやや上方に向かって広がる形態を示し、鰭の周囲全体に鉢止め表現がある。矢筒上端部には、やはり2列の鉢止めを施した横帶が貼りつけられている。この横帶は両端が欠けていたが、剥離の様子から匂形をしていたことがわかる。この横帶がある部分の裏面には小孔が穿たれており、焼成時の蒸気抜きの機能をもっているのであろう。

矢を表現した先端部は、長方形の粘土板を矢筒本体に差し込んで成形している。矢は6本単線で表しているが、鎌の先端部は欠けているため不明である。おそらくは矢印状になっていると考えられる。矢の両脇には、矢が脱落しないように鉢止めして施された縦凸帯が表現されている。

調整は基部、矢筒部の表面はタテハケ、鰭部は右下がりの指ナデを施し、内面は一部ナナメハケがみられるが、全体的には指ナデを施している。

鞍2（第3図）は現高54.0cm、底径16.0cmである。基部から矢筒の鰭下横帶まで残存しているが、その形態は鞍1と酷似する。底からこの横帶上端までの高さが、鞍1では57.0cmなので3cmほど低

くなっている。上部の欠失した部分は鞍1とほぼ同じ形態であったと考えてよいだろう。

鞍3～7（第3図）は鎌部のみで、いずれも矢は線刻で表現し、矢の両脇には鞍1と同じく縦凸帯がある。鎌先端部は鞍4、5は矢印だが、鞍7は2本の単線間に山形の線刻で鎌を表している。鞍3、6は不明。また鞍5、7はタケハケ調整を施した後に鎌を描いている。

以上、管見にのぼる限りでは、将軍山古墳の鞍形埴輪は、いずれも鞍1と大きくは変わらない形態をもつものであると推定する。

3 いわゆる「奴廻形」鞍形埴輪の変遷——県内出土品を中心として——

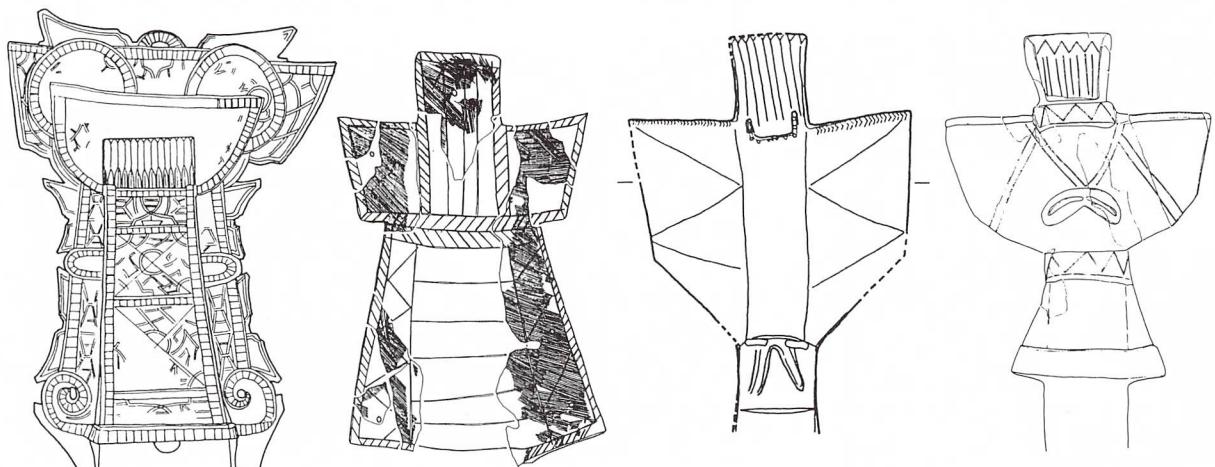
高橋克壽は鞍形埴輪を次のように大きく2類に分類している（註5）（第4図）。

1類 箱形の矢筒部の周囲に板状の造形（背板）を有し、背後に半円筒形の支えが取り付いている。矢筒部と背板には直弧文が多用される。

2類 基底部からそのまま続く半円筒形の矢筒部に、やじりを表した上部の板状の突出部、左右の鰐状の背板とが付き、奴廻形を呈するもの。

1類は器財埴輪の樹立が行われ始めてから、それほど間を置かずに登場し、以後中期古墳に至るまで器財埴輪の中心的な器種として、「聖域」を守る防御的な意味で使用されている。6世紀になると横穴式石室の導入に代表されるように、葬送儀礼の変化とともに埴輪の役割も変わっていった。その中で供献品としてつくられたのが2類であるとした。

会津大塚山古墳や福井鼓山古墳、三重石山古墳、滋賀雪野山古墳などの前期古墳から出土した鞍の実物は、背板の部分は残存が不良のため明らかではないが、直弧文を多用することや全体の大きさからみて、1類に相当する。前期古墳の時期の鞍形埴輪は、実物の鞍をかなり忠実に模倣しているようであり（註6）、2類の埴輪が1類に取って代わるということは、実際の鞍も2類相当のものに変化したことを意味すると考えられる。すなわち1類の特徴的な矢筒部上方に大きく広がる背板を省略すると、矢筒部側面に上下2枚づつの鰐が残るが、その形態はあたかも大阪府三日市遺跡で出土した鞍形埴輪と類似する（第4図）。これを基本形として、全体のバランスから上部の鰐を大き



1類 奈良県宮山古墳(1/24)

2類 大阪府三日市遺跡(1/12)

群馬塚廻り1号墳(1/12)

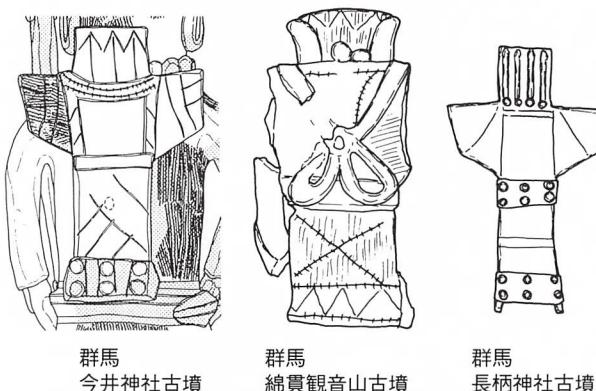
群馬神保下條2号墳(1/12)

第4図 鞍形埴輪

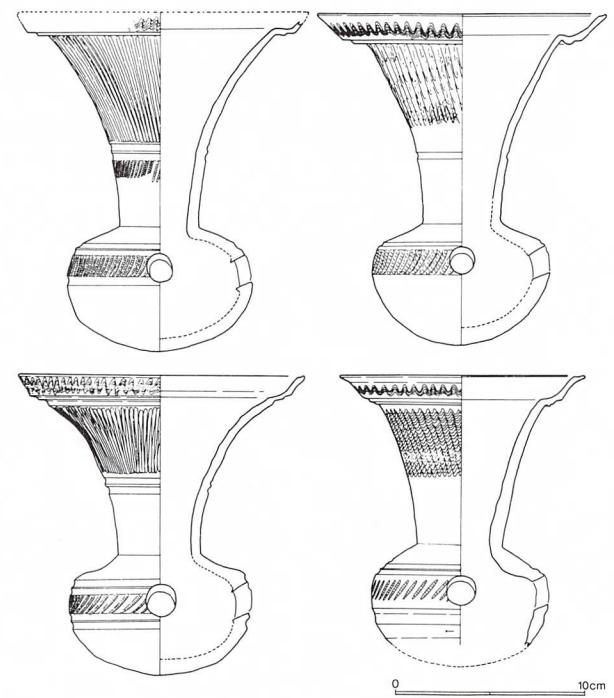
く翼状に広げたものが、典型的な奴尻形に変化するものと考えられる。この器形の変化は、古墳祭祀が直弧文に代弁されるマジカルなものから、世俗的なものに変化したことから発生したのと同時に、乗馬の風習や騎馬戦の登場など、戦闘方法の変化から武器の軽装化が生じ、鞍の背板の簡略化が行われた結果ではないかと考える。この鞍は畿内を中心に、全国的な広がりを見せた。九州では装飾古墳の壁画や、横穴墓の浮彫り、石人などにこの鞍が象られており、6世紀前半には成立していると考えられる（註7）。畿内でも上述の大坂府三日市遺跡や和歌山県箱谷2号墳、奈良県鳥塚古墳や岩室池遺跡などでも出土しているので、奴尻形鞍形埴輪も畿内で成立し、関東に伝わったものと考えられている。しかし、6世紀前半以降の畿内では、埴輪祭式が下火になっていく段階にあたり、全体的に作りは粗雑である。また関東の鞍形埴輪とは鰐の形態などに相違がみられる。従つて、いわゆる奴尻形鞍形埴輪の原型は畿内で登場したもの、それを定型化し発展させたのは関東の埴輪工人であった。すでに坂靖が関東の埴輪祭式の独自性を強調しているところである（註8）。関東のどの地域であるかは、今後の研究の課題ではあるが、写実的なものが多く残されている群馬県地域をその候補に上げておきたい。関東における独自の埴輪祭式の広がりを考察する上で、他の形象埴輪の様相とも関連して分析していかねばならない。

さて埼玉県内で出土している鞍形埴輪は、1類は皆無であり2類のみであることは、関東地域全体の様相と同じである。現在のところ古墳27基、埴輪窯3遺跡から出土しているのを確認しているが、鞍と確認できていない小片を含めると、さらに個体数は多くなるだろう。児玉郡、比企郡、大里郡、北埼玉郡など、県北部の全体に分布しており、大型の前方後円墳から小型の円墳までさまざまな古墳から出土している（第1表）。

型式学的な見地から考察すると、写実的なものから、簡略化されたものへの変化を指摘することができる。最も特徴的な属性は、鎌の表現方法で、粘土を貼りつけたものと、線刻のものと大きく2種類に分けられる。前者をA類、後者をB類と呼ぶとすると、簡略化という点ではA類→B類の変化が考えられる。A類では鎌先端部を忠実に柳葉形または片刃に作り付けたものがあり、B類が矢印であったり、山形であったり



第5図 人形埴輪が背負う鞍



第6図 将軍山古墳出土須恵器

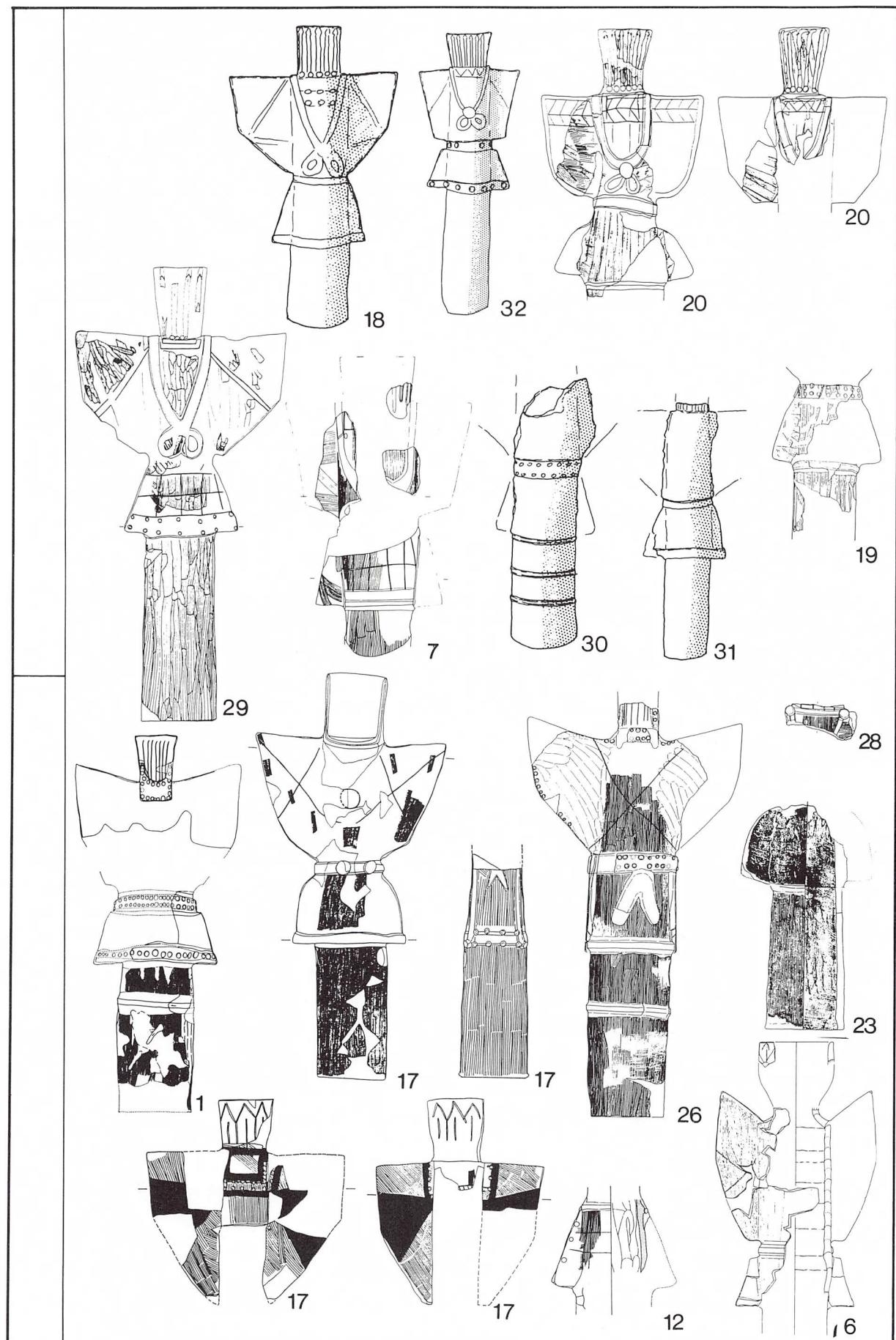
第1表 埼玉県内鞍形埴輪出土地名表

番号	古 墳・窯跡名	所 在 地	墳 形	規模m	埋葬主体部	型 式	備 考
1	生 出 塚 窯	鴻巣市東	—	—	—	I、II-1	
2	長 塚 古 墳	東松山市大谷	前方後円	36	横穴式石室	I	先端部のみ
3	桜 山 窯	東松山市桜山	—	—	—	II	先端部のみ
4	屋 田 5 号 墳	比企郡滑川町月輪	円	18.7	横穴式石室	I	先端部のみ
5	長 沖 8 号 墳	児玉郡児玉町長沖	前方後円	26.3	横穴式石室	I	裾付根のみ
6	一 本 松 古 墳	児玉郡美里町猪俣	円	—	—	II-2	
7	広 木 大 町 2 号 墳	児玉郡美里町広木	円	—	—	I-2	
8	広 木 大 町 4 号 墳	〃	円	—	横穴式石室	II	
9	広 木 大 町 5 号 墳	〃	円	—	—	II	
10	広 木 大 町 11 号 墳	〃	円	—	横穴式石室	I	
11	白 岩 銚 子 塚 古 墳	児玉郡神川町新里	前方後円	46	横穴式石室	—	鰐付根のみ
12	南 塚 原 2 4 号 墳	〃	円	—	横穴式石室	II-2	
13	十二ヶ谷戸15号墳	児玉郡神川町池田	円	16.5	横穴式石室	I	先端部のみ
14	城 戸 野 1 号 墳	児玉郡神川町新宿	円	11	横穴式石室	I	先端部のみ
15	城 戸 野 2 号 墳	〃	円	10	横穴式石室	I	先端部のみ
16	三ヶ尻林遺跡4号墳	熊谷市三ヶ尻林	円	18	横穴式石室	II-1	
17	割 山 窯	深谷市上野台割山	—	—	—	II	
18	円 山 2 号 墳	大里郡大里村箕輪	円	26	横穴式石室	I-1	
19	小 前 田 6 号 墳	大里郡寄居町桜沢	円	15	—	I-2	
20	小 前 田 10 号 墳	〃	円	25	横穴式石室	I-1、II	
21	黒 田 6 号 墳	大里郡花園町黒田	円	17	横穴式石室	—	鰐のみ
22	黒 田 10 号 墳	〃	円	14	横穴式石室	—	鰐のみ
23	黒 田 11 号 墳	〃	円	18	横穴式石室	I-1、II	鰐、裾のみ
24	箱 崎 4 号 墳	大里郡川本町畠山	円	18	—	I?	鰐か不明
25	瓦 塚 古 墳	行田市埼玉	前方後円	73	横穴式石室	II-1	
26	将 軍 山 古 墳	〃	前方後円	90	—	—	
27	奥 の 山 古 墳	〃	前方後円	66.5	—	—	
28	酒 卷 14 号 墳	行田市酒卷	円	42	横穴式石室	II-1	
29	酒 卷 15 号 墳	〃	前方後円	34.2	横穴式石室	I-2	
30	鶴 ケ 塚 古 墳	加須市町屋新田	円	30	—	I?	
31		大里郡川本町畠山	—	—	—	I-2	
32		伝児玉郡	—	—	—	I-1	東京国立博物館所蔵 埼玉県立博物館所蔵

するのと比べても、A類→B類の変化が推定できる。ただし小前田10号墳のように両類の埴輪が共存している場合もあり、注意を要する。

またA類には、矢筒の最上段、矢の差し込み口に丸い玉が貼付されているものが多い。これは鞍が革で作られているもののなかで、矢を出し入れして差し込み口が磨耗したり破れたりするのを防ぐため、鉄留めして補強したものであろう。これがB類では生出塚8号窯や將軍山古墳のもののように、別の部品を鉄で留めるような形になっているものが多い。

次に背負い紐の表現を観察する。粘土紐を貼りつけて背負い紐を表した埴輪を見ると、鰐の両肩から穏やかに下がってきた紐を、中央で大きく蝶結びにしているように見える。円山2号墳や小前田10号墳、埼玉県立博物館所蔵伝児玉郡出土品では、その蝶結びの上に丸い円盤が貼りつけてある。この手法は綿貫觀音山古墳の三人童女の埴輪等でもみられるが、結び目を表現したものである。同じく綿貫觀音山古墳の人物埴輪が背負っていた鞍を見ると明確である。將軍山古墳の背負い紐は線刻で×を描いただけの単純な表現であり、蝶結び部分は背負い紐とは全く分離して、鉄留め横帯の下にデフォルメされて表されている。これは背負い紐の表現を簡略化したものである。群馬県の例では、神保下条2号墳の鞍形埴輪は紐の部分は2本の線で表し、結び目のみは粘土を貼りつけているのも、將軍山古墳の鞍形埴輪の表現方法の1歩点前の簡略化形態といえよう。その他生出塚8号



第7図 埼玉県内出土の鞍形埴輪

窯や割山埴輪窯、東京国立博物館所蔵川本町畠山出土のものなどには、紐の表現はない。鎌を粘土を貼りつけて表したA類には、背負い紐をやはり粘土紐で表現したものが多い。県内出土品を見るかぎりでは、相関関係があるようである。酒巻14号墳出土のものは、鎌を線刻で紐を粘土貼りつけで表しており、中間的な現象といえる。

将軍山古墳の鞍形埴輪で、最も特異なのは裾鰐がなく、かわりに縦凸帯を2本ずつはりつけていることである。鞍形埴輪には裾鰐が付き、上部の鰐と裾鰐の境目、および裾鰐の最下端部に横帯を付けるのがとの形である。裾鰐がないのはその退化形式といえよう。同様な形態のものが、割山埴輪窯からも出土していて、縦凸帯が矢筒部周囲に均等に配分されて貼り付けられている点は相違するが、結び目の形などにも類似する点がある。

東京国立博物館所蔵の太田市長柄神社出土の武人埴輪が背負う鞍や、綿貫觀音山の人物埴輪の鞍、同じく群馬の今井神社古墳出土の人物埴輪が背負う鞍などをみると（第5図）、矢筒は箱状で鰐の下部は、やや広がりを見せるが箱状のままであり、鞍形埴輪にみられる裾鰐のような形態ではない。それは九州地方における、装飾古墳の壁画や横穴墓の浮彫り、石人の鞍などでも基本的には同形をしている。このことから、裾鰐は鞍形埴輪の外見を装飾的にみせるためのデフォルメで、前期から続いてきた鞍形埴輪の名残とも考えられようか。

以上の諸点からみて、埼玉県内出土の鞍形埴輪を第7図のように分類した。A-1式：鎌、背負い紐を貼りつけて表現。鎌下に鉢留め。鰐の革綴じの表現など写実的なもの。A-2式：A-1式より表現が粗雑になったもの。とくに背負い紐の表現が単純になる。B-1式：鎌を線刻で表現するもの。B-2式：B-1式よりもさらに簡略化した表現のもの。型式学的にみれば、A-1式→A-2式→B-1式→B-2式となるが、遺構から出土した他の遺物からみた年代観とは矛盾をきたす場合がある。

B-1式及びB-2式に相当する割山埴輪窯の出土品は、報告書では6世紀前半に比定して、一部6世紀後半まで下がる可能性を指摘している。上述した型式学的な変遷の流れから、写実性において最も退化した形態と考えられる。しかし群馬の塚廻り1号墳から出土した鞍形埴輪をみると（第4図）、鎌はB類で裾鰐もなく、表現は全体的に簡略化されているが、他の出土遺物からみて6世紀前半に比定されている。割山埴輪窯の出土品は鰐の形状などが、これに類似している。それは正面を平らに近く仕上げて、鰐を側面の中央よりも前方に付着させる方法も似ている。このように必ずしも簡略化された表現が新しいとは限らない可能性がある。いずれにしても、割山埴輪窯の出土品は、県内の他に鞍形埴輪とは形態的にも、成形の特徴も異なっている。表現の相違が年代によるものなのか、工人差によるものなのか、判断するのは難しい。

円山2号墳や伝児玉郡出土のものが最も写実的である。類似した形態のものが、群馬県で多く出土しており、採集品が多いためはっきりした年代は不明であるが、6世紀中葉には登場していたであろう。埼玉県では6世紀後半に盛行して、7世紀に入ると急速に埴輪作りが衰えていく。将軍山古墳は從来6世紀末から7世紀初頭ころの古墳と考えられてきたが、造り出し周堀から出土した須恵器の臘（第6図）の器形や、横穴式石室の形態が県内では早い段階のものであることなどから、6世紀後半には造られていたことが判明した。しかし、鞍形埴輪を型式学的な観点で見ると、6世紀

末くらいに下げる考え方もある。それはあたかも、これまで年代の根拠の一つとなっていた、石室内から出土した長脚2段高杯の年代と符号する。石室内への追葬儀礼と関連する事象と考えることも可能である。

4 ま と め

古墳時代前期から存在していた鞍は、古墳祭祀の觀念や鉄鎌の変化などによって、大きな背板をもつものから、上方の背板を省略した形の翼状の鰐をもつといわゆる「奴廻形」に変化した。6世紀前半には、畿内を中心に全国的な広がりを見せた。本稿では埼玉県内から出土した鞍形埴輪を中心にしてその分類と編年を行い、將軍山古墳の鞍形埴輪の位置づけを行った。埴輪のみの型式学的な分析と、その他の遺物の年代観にはややずれがあり、今後の課題として残った。それは工人による違いや、窯ごとの違いなども考慮に入れなければならないであろう。また関東における形象埴輪祭祀の充実にともなって、より一層写実的な表現をとる場合もある。その点からも本稿では、鞍形埴輪の各属性の変化の推移を考慮して論を展開させたつもりであるが、明確な結果は得られなかった。窯跡から出土した資料が少ないため、今後の調査に期待するところは大きい。

埼玉古墳群では稻荷山古墳や瓦塚古墳で多くの形象埴輪が出土している。稻荷山古墳ではトレンチ調査をおこなっただけだが、墳丘西側の中堤造り出し付近で出土したものは人物埴輪が多く、その他には家や盾、馬などの埴輪が少数含まれているにすぎない。瓦塚古墳は墳丘西側の周堀を広範囲にわたって発掘調査しており、人物埴輪をはじめ、家や盾、馬、水鳥などの形象埴輪が出土しているが、確実に鞍と判明しているものはない。將軍山古墳では鞍や盾、馬などの埴輪は比較的多いが、人物埴輪が現在のところ非常に少なく、復原できる個体はない。どの古墳も全体を調査したわけではないので確実なことは言えないが、埼玉古墳群における埴輪祭式では、人物埴輪の樹立が次第に衰退していく傾向があるのではなかろうか。6世紀後半では、鴻巣市生出塚遺跡の窯は最盛期を迎えており、この窯による生産が衰える時期と相前後する現象であろうと考える。この点でも將軍山古墳の鞍形埴輪は、6世紀後半よりも遅れる時期であると想定され、造り出し部から出土した須恵器の窓の年代観とは矛盾する結果となるのである。

【註】

- 1 高橋 克壽 「2 器財埴輪」『古墳時代の研究』9 古墳Ⅲ 墳輪、1992
- 2 末永 雅雄 『日本上代の武器』1914
- 3 勝部 明生 「鞍形埴輪小考」『横田健一先生古稀記念会 文化史論叢』上、1987
- 4 千家和比古 「Ⅲ 胡録について」『上総山王山古墳』、1980
- 5 高橋 克壽 「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71卷2号、1988
- 6 勝部 明生 前掲註3
- 7 埼玉稻荷山古墳では、鞍を背負う人物埴輪が出土している。しかし、この鞍には大きな鰐がつくことはなく、装飾もほとんどない。埼玉に奴廻形鞍が伝わる以前の、より実用的な鞍であったのであろう。
- 8 坂 靖 「埴輪文化の特質とその意義」『権原考古学研究所論集』第8、1988

吉見町山の根古墳の年代について

利根川 章 彦

1 はじめに

埼玉県立さきたま資料館では、平成元年度から平成5年度までの5か年間、埼玉県教育委員会が行った「埼玉県内古墳詳細分布調査」の実施機関として、学芸課が調査の実務に当たった。この間、筆者は平成4・5年度の2か年間、この調査事業の担当者の任にあり、最終年度に調査報告書刊行の大役を果たすこととなった。

小稿で取り扱う比企郡吉見町所在の山の根古墳は、平成元年度に墳形確認のための試掘・測量調査を実施した古墳であるため、筆者が直接調査に当たったのではないが、その調査の結果出土した土器によって、埼玉県域における古墳の出現について特筆に値する位置付けが可能な古墳であることが確実となった。この点については、調査報告書において若干触れておいたが（註1）、調査報告書刊行に与えられた期限や筆者の能力の限界などのため、私見を充分に述べる余裕がなかった。なお、年代については出土土器を根拠に「4世紀前葉頃」と位置付けてある。

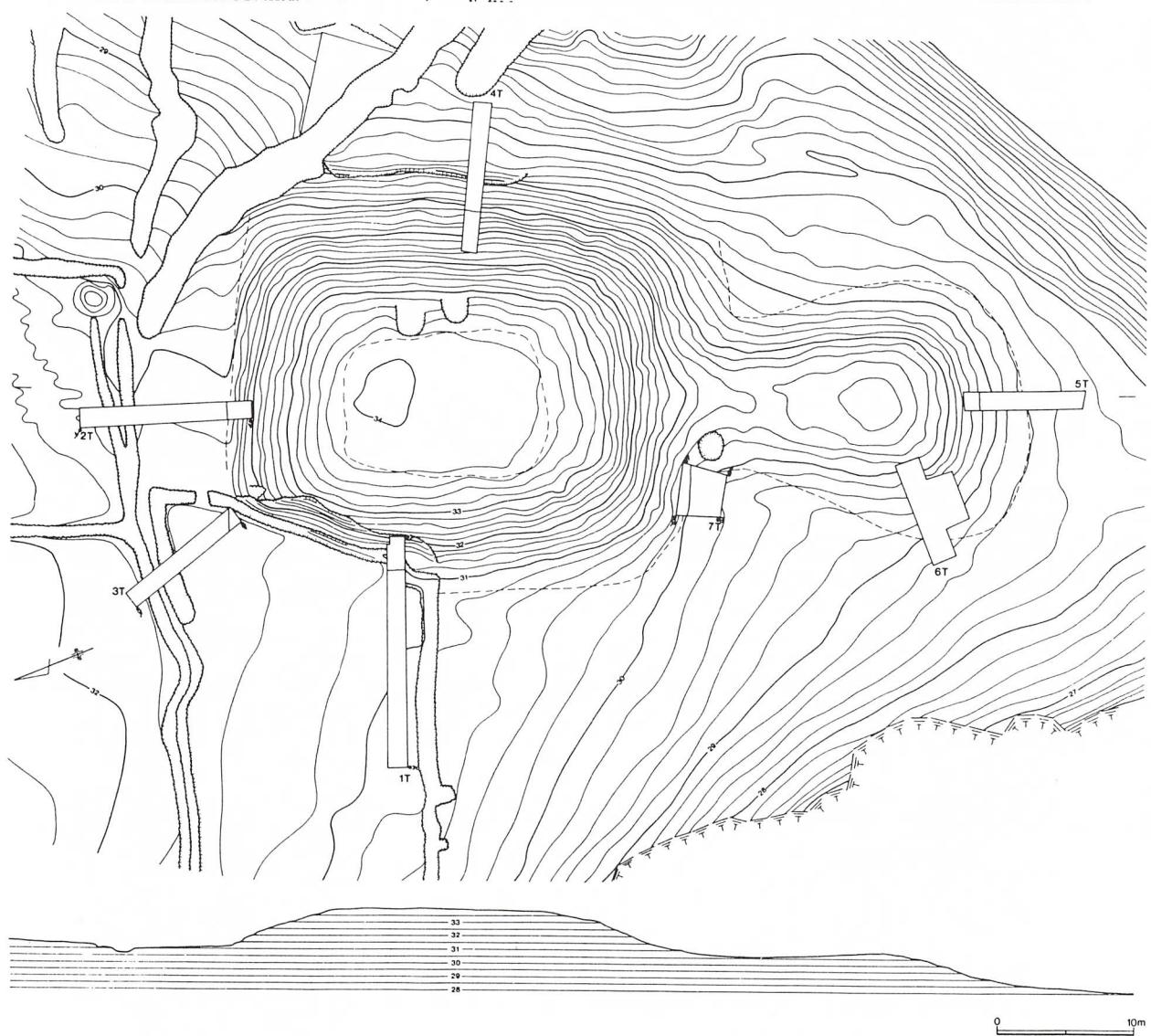
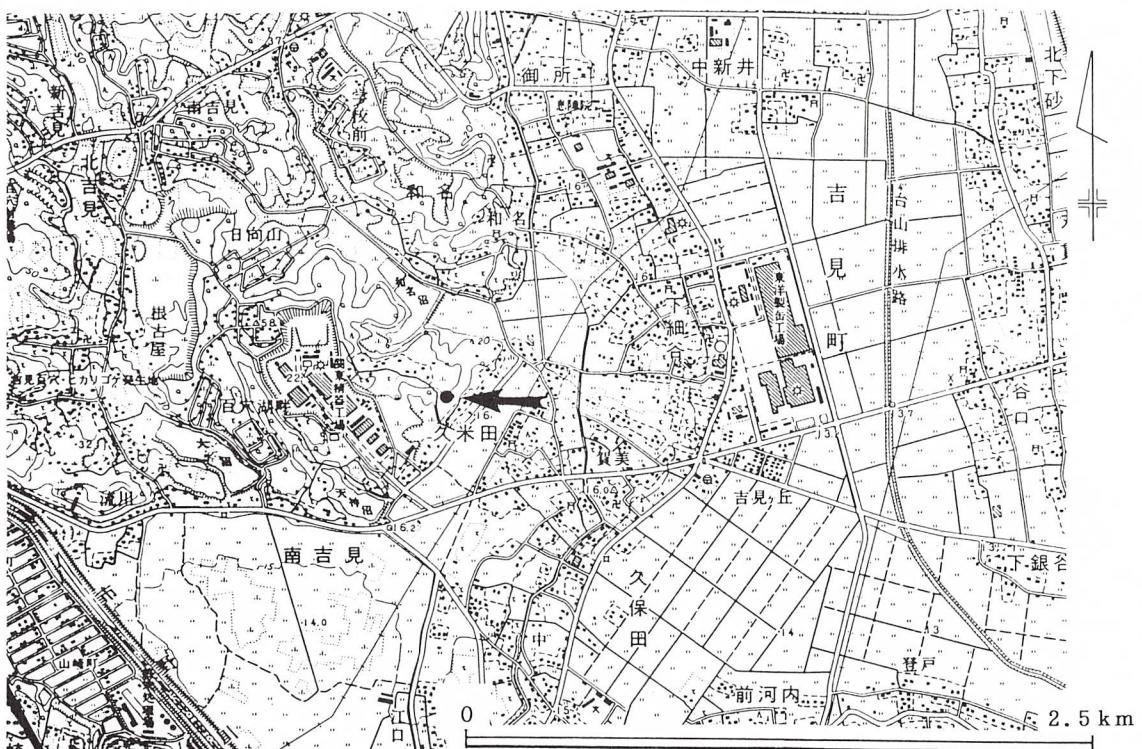
そこで、小稿においては、この古墳の位置付けを再度明確にするために出土土器を中心に古墳の検討を試みるものである。

2 古墳の概要

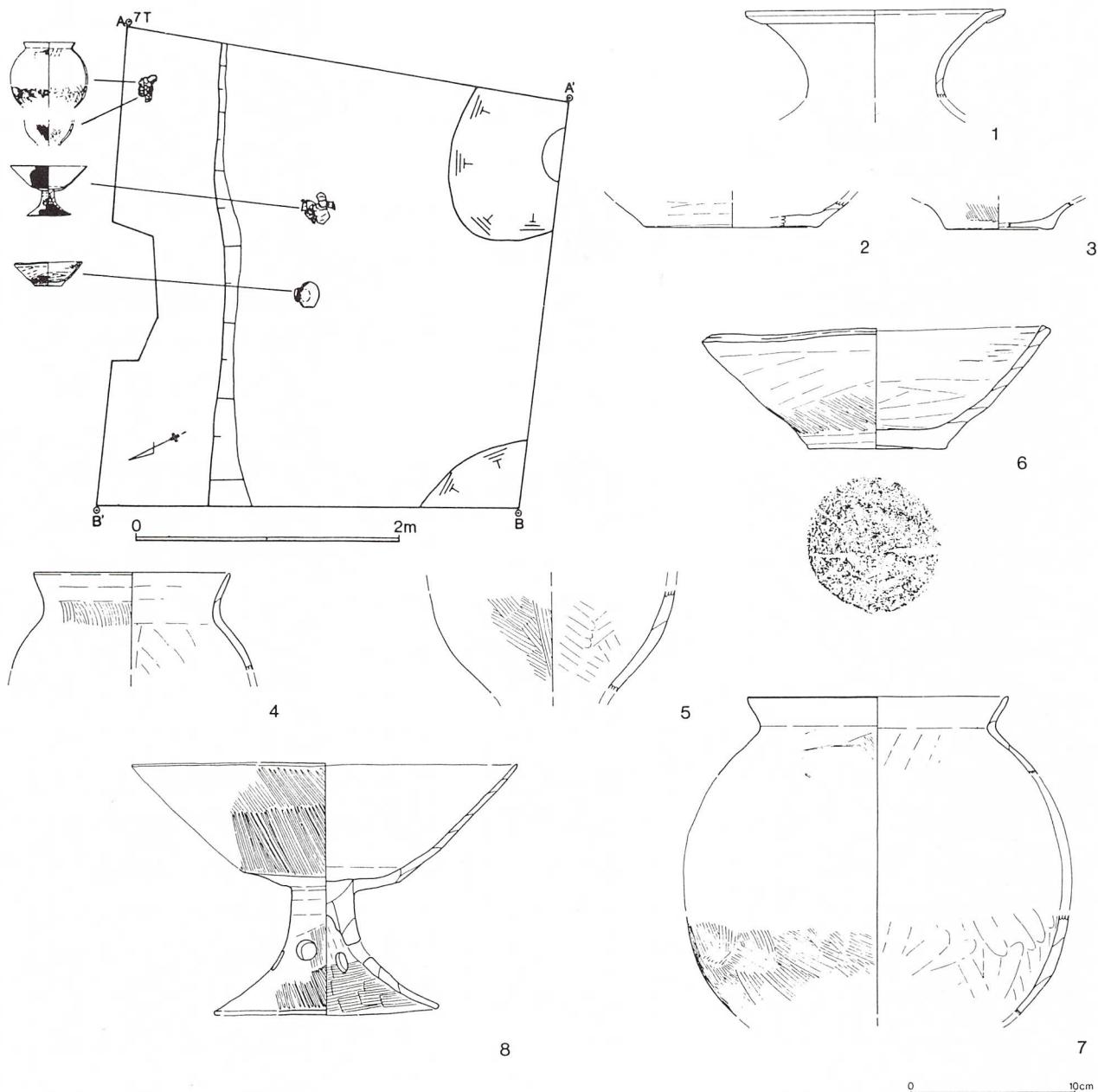
山の根古墳は、比企丘陵の最東端である吉見丘陵から派生する標高30m程の尾根上に所在する。所在地は埼玉県比企郡吉見町久米田五の耕地 746番地である（第1図）。この古墳は、尾根の先端部、南南西の方位に前方部を向けて築造されており、北西35mの位置には一辺25mの方墳である山の上2号墳がある。さらに2号墳の北西40m程にある円墳の3号墳とともに3基で、「山の上古墳群（山の根古墳群）」を構成している。

墳丘の保存状態は良好で、前方後方形をよく留めている。谷側にあたる後方部東墳丘部は自然の傾斜面を削り出しているほか、前方部も尾根先端の地形を利用して築造されている。墳丘測量は当館の調査以前に森達也氏（当時早稲田大学大学院、現愛知県陶磁資料館）らが行なっていたので、調査報告書掲載を含めて利用させていただいている。記して深謝申し上げたい。

当館の調査は、墳丘各部に合計7本のトレンチを設定して、墳形を確認した。調査の実施期間は平成2年1月29日から2月13日まで、8日間を費した。調査の結果、墳丘の周囲には周堀が所在しないことが明らかになった。古墳の東側は丘陵斜面であるため、調査着手前に周堀が確認されないことは容易に予想されたが、墳丘西側の平坦面においても周堀は確認されず、墳丘盛り土を得るために白色粘土層まで削り出した地山整形面が確認されたのみであった。



第1図 山の根古墳位置図及び測量図



第2図 山の根古墳出土土器と第7トレンチ平面図

墳丘裾部は、前方部前端の西側コーナーの部分では検出されなかったが、その他の6本のトレンチにおいては確認することができた。これによって、古墳の規模を計測すると、墳丘主軸方向の全長54.8m、後方部長33.6m、後方部幅26.2m、前方部長21.2m、前方部幅19.2m、墳丘の基底部からの高さは後方部側3m、前方部側1.9mとなる。ただし、墳丘は傾斜地にあるため、前方部と後方部の比高差は約3mということになる。したがって、前方部側からの見かけの墳丘の高さは5m程度ということになり、自然地形を利用して実際の盛り土量に比べて墳丘を高く見せようと工夫して築造されていることが判明した。平面形は、後方部の形態が縦長になるものであり、埼玉県内の前方後方墳・前方後方形周溝墓（註2）ではむしろ多い形態と考えられる。

出土遺物は決して多くはなかったが、土師器8点を図示することができた。器種の内訳は壺1・甕5・鉢1・高坏1である。このうち、甕4・鉢1・高坏1の6点は西側くびれ部に設定した第7トレンチから出土したものである。後方部のくびれ部付近の墳丘裾部平坦面に並べられていたもの

であろう。次章でこれらについて分析する。

3 山の根古墳出土土器の検討

山の根古墳から出土した土器は大半が甕であったが、完全に復原できたもの・完形品として出土したものは、鉢と高坏のみであった。個別に見ていくことにする。

壺（第2図1）は口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部の外反度が大きく、口唇部は外側に薄く折り返される。いわゆる「折り返し口縁」の壺である。折り返しの幅は狭く、口唇部内面に稜があり、端部に向って細めて作る特徴がある。これはこの種の壺の中では新しい特徴であり、弥生時代の範疇に入らないことを示す。

甕は、4・5のように中・小型であまり胴が張らないタイプと、7のように球形胴を持つ大形甕のタイプがある。底部は3が前者、2が後者であろう。4は頸部のくびれが弱く、口縁部がやや長めで、ゆるく外反する。7は口縁部自体は短いが、強く「く」の字に折れるのが特徴である。4の形態はやや古いものの残存であり、7が普遍的と考えられる。器外面がハケ目、内面がヘラケズリ後ナデで調整される点など、古墳時代初頭の土器の特徴を示すものと言える。

鉢は、甕の底部から胴部下半までマキアゲで粘土を積み上げていき、そこで止めて上端をヘラ状工具で強くナデて面取りし、口唇部とする。底面は周縁部に薄く粘土を貼り付け、わずかな上げ底風になる。かつて都出比呂志氏が発案した「底部輪台技法」（註3）か、森岡秀人氏が検討した「ドーナツ状上げ底」（註4）にあたる。この技法も弥生時代末期頃関西から伝播すると思われる。

最後に高坏。坏部はやや深めで、外面下端に稜があり、口縁部は大きく外に広がる。脚部は、上半部が直立気味で、中位から下はゆるく「く」の字に折れて大きく開く。坏部の深さと脚の長さが拮抗しており、坏部径が脚裾径より幾分大きい。東海地域の元屋敷式土器の範疇に入る大型の有稜高坏である。五領式の（古）段階に対応するものである。

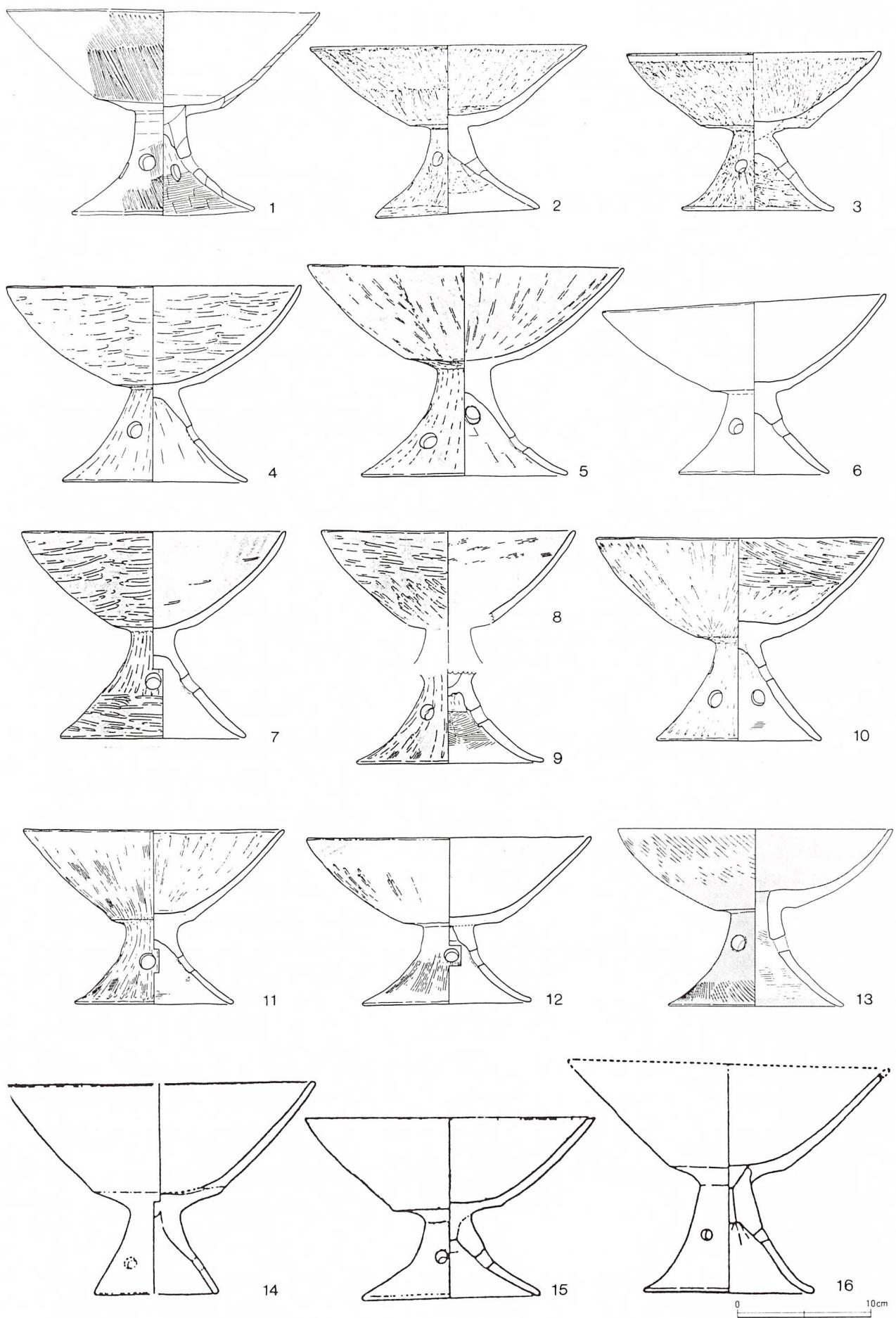
以上、古墳時代初頭の時期にあたるのは間違いないところであるが、より厳密にはどういう時期にあたるのか、もう少し考えてみたい。

4 年代の考定

前章で触れたように、山の根古墳出土土器は、五領式（古）段階に属することは確実であるが、広域的に各地の古式の古墳と比較するために重要な土器は、東海系の高坏（第1図8）である。ここでは各地の東海系高坏の出土例と比較検討してみよう。

山の根古墳の高坏の顕著な特徴は、大きな坏部と外開きになる脚部である。脚部に小孔が6個千鳥式に穿孔されることもこの器形の高坏には珍しい。むしろ千鳥式穿孔は、小型の坏部を持ち、脚裾部にパレススタイル系統の横線文・鋸歯文（ないし連弧文）を有する高坏に通常見られる。

第3図には、県内出土の東海系高坏のうち、山の根例に近似するものを集成してみた。ただし、実際にすべてを集成するならば、この十数倍の数は優に存在するとみてよい。ここでは、方形周溝墓（前方後方形を含む）等に限って取り上げた。また、比較のために千葉県東葛飾郡沼南町北ノ作1号墳（註5）、市原市神門5・4・3号墳（註6）の高坏も図示している。もちろん、関東の他地域



第3図 東海系高環の諸例

1. 山の根古墳 2・3. 東松山市下道添遺跡9号墓 4. 坂戸市中耕遺跡10号墓
 5・6. 中耕遺跡13号墓 7~9. 中耕遺跡26号墓 10・11. 中耕遺跡32号墓
 12. 中耕遺跡42号墓 13. 千葉県沼南町北ノ作1号墳 14. 市原市神門5号墳 15. 神門4号墳 16. 神門3号墳

においても、群馬県高崎市元島名將軍塚古墳（註7）、高崎市鈴ノ宮遺跡7号墓（註8）、栃木県佐野市馬門愛宕塚古墳（註9）、河内郡南河内町三王山南塚2号墳（註10）、那須郡小川町駒形大塚古墳（註11）など、山の根例に関連する資料は多数存在する。ここでは、必要最小限の資料しか取り上げないので、結論に偏りがあるというそしりを逃れられるものではないが、定量的分析は機会を改めることにして、先に進みたい。

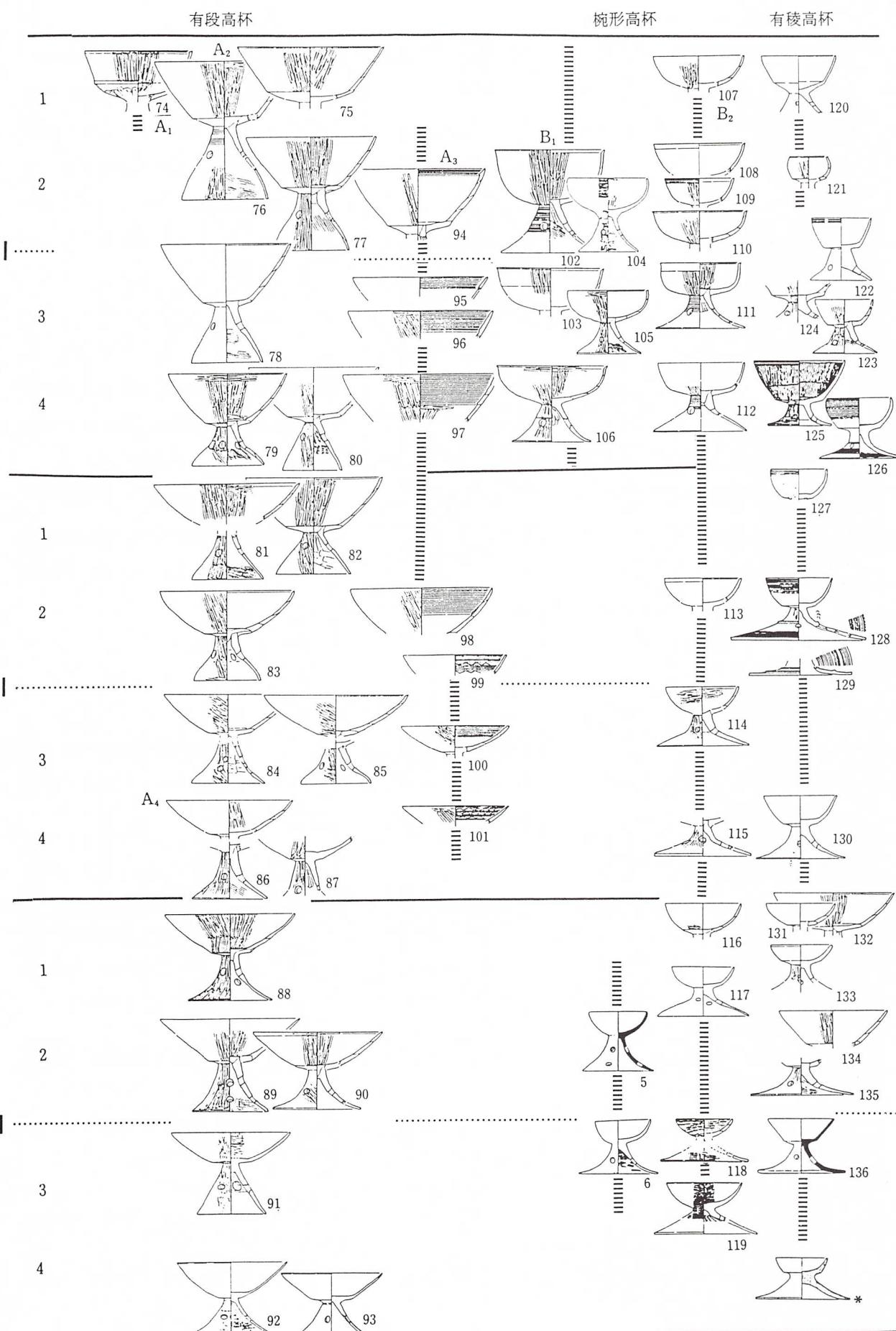
山の根例に最も近い形態を示すのは坂戸市中耕遺跡13号墓（註12）の例（第3図5）である。脚部の天井を中実気味に埋めていること、坏部・脚部の高さ・径の比率、脚部の千鳥式穿孔とどれをとっても、山の根例同様の作りを示している。穿孔が通常形態になったものでは東松山市下道添遺跡9号墓（註13）の例をあげることができ。いずれも脚部が中位でゆるやかに外に屈曲し大きく「ハ」の字に開く形態をとる。これに対して、山の根例よりやや古く位置付けられそうな中耕遺跡32号墓例（第3図10・11）は脚部の開きが小さく、新しくなる中耕遺跡42号墓例（第3図12）の場合は脚が寸詰まりになっている。この点から考えると、北ノ作1号墳例（第3図13）は山の根例とはほぼ同じ時期になる可能性がある。また、神門古墳群の3基はいずれも坏部が深過ぎて比較が困難であるが、唯一3号墳例のみが山の根例の時期に相当し、5号墳・4号墳は先行する時期になるであろう。特に、5号墳は欠山式相当の時期に繰り上がるのが確実である。

さらに、東海地方の編年案等と比較してみよう。

近年では、愛知県西春日井郡清洲町廻間遺跡の調査報告を中心としたいわゆる「廻間編年」の優位の状況で研究が展開している。これは従来の欠山式・元屋敷式・石塚式（註14）を整理し直して、近畿地方との対応を正確に把握しようとしたものにはかならない（註15）。また、1993年秋の日本考古学協会新潟大会のシンポジウムにおいても、大会関係者・パネラーらによって北陸の加賀・能登地域を中心とした漆町遺跡の土器編年案（いわゆる「漆町編年」）と「廻間編年」の調整を取りながら、東日本全体の古墳時代初頭土器編年を確立しようという努力が重ねられたが、概ね対応関係は取ることができたと考えてよからう（註16）。

山の根例は、「廻間編年」の高坏の部分（第4図）に比較すると、脚裾部が大きく開く形態が定着し始める廻間Ⅱ式3段階以降の時期に相当するが、脚部千鳥式穿孔が増加する廻間Ⅲ式1段階に併行するとみたい。これは、布留式（古）段階の最初期（寺沢薰氏の布留0式）であるから、庄内式と布留式の境界にA.D. 300年を置く見解（註17）ならば、山の根古墳の年代は4世紀初頭あたりに置くことが許されよう。しかしながら、最近の弥生時代から古墳時代に関する九州年代（註18）を参考にする限り、この年代さえも3世紀代に繰り入れることが可能になってしまう。仮にもう1段階上げて、廻間Ⅱ式4段階にするならば、庄内式（新）段階の終末期（寺沢編年布留0式の範疇）として3世紀後半から末あたり、九州年代採用ならば確実に3世紀後半である。

最後に蛇足ながら、同様に神門古墳群も考えたい。5号墳は廻間Ⅱ式2段階よりは古くなりそうであり、廻間Ⅰ式4段階の可能性もある。坏部高が脚部高を上回ることからⅡ式1段階とみたい。4号墳は廻間Ⅱ式2～3段階である。3号墳は山の根古墳・北ノ作1号墳と同じ時期となろう。したがって、神門古墳群は3世紀後半（中葉の可能性もある）～4世紀初頭頃に展開した古墳群ということになる。



第4図 尾張地方の高杯の変遷（赤塚 1990による）

また、従来年代的位置付けが新旧に二分されていた長野県松本市弘法山古墳にも出土品再整理によって東海系高坏を含む未報告の外来系土器が出土していることが判明した（註19）。これによって早晚年代は確定するかもしれないが、筆者の見るところ廻間Ⅱ式の2～4段階に相当する高坏が描っていることや、手焙形土器・小型高坏の特徴などから廻間Ⅲ式1段階に下る可能性も残されている。パレススタイル壺や庄内式系装飾壺などの位置付けから総合的に判断すべきであろう。私見では、庄内式系装飾壺が布留式（古）段階いっぱいに存続することを重視し、庄内式併行期に繰り上げるのは困難と判断しておきたい。

5 おわりに

少量の土器を根拠に、山の根古墳の年代を4世紀のごく初期、場合によっては3世紀代に繰り入れることも可能性の範囲であることを述べてきた。埼玉県最古の古墳という位置付けは不動のものになった感もあるが、何か重大な間違いを冒しているかもしれないという不安もよぎっている。

埼玉県県民部県史編さん室が調査した数基の古式古墳や「埼玉県古墳詳細分布調査」で調査した前期古墳の土器の出土例、さらに、江南町塩古墳群などでも古墳時代前期の壺などの出土例があり、埼玉県の前期段階の古墳を考える材料は、筆者が考古学に手を染めた20年前に比較すれば、飛躍的に増加したと言ってよい状況にある。

今後も、小稿の補足をすべく肝に銘じて、擱筆することにしたい。

（註1）埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』

なお、報告書の遺物の個別的考察は日高慎氏（筑波大学大学院）が行った。筆者の見解とは大きく異なる点はないが、年代に関する細かい記述については報告書全体の記述のバランスを損ないかねないため、あえて行っていない。

（註2）「前方後方墳」と「前方後方形周溝墓」の概念については、相容れないものとして、すべて「前方後方墳」としてしまう研究者も存在する（代表としては杉山晋作氏）。しかし低墳丘墓も確実に存在する上、方形周溝墓群の内部に同時存在しているため、小稿では「前方後方形周溝墓」概念も使用しておくことにする。主丘部（後方部）が3m以上に達する山の根古墳の場合は「前方後方墳」とすることは大方の研究者の見解が一致を見ると思うが、筆者がかつて調査した、児玉郡美里町村後遺跡方形周溝墓などの場合は発掘区の断面に残った盛り土痕跡から考えても本来の墳丘高が2m以上に達するものではなかった可能性が高く、「方形周溝墓」の延長線上にある遺構であることは確実である。

細田勝・利根川章彦 1984 『向田・権現塚・村後』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

（註3）都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会

（註4）森岡秀人 1977 『河内長野大師山』 関西大学文学部考古学研究室

（註5）糸川道行 1994 『沼南町北ノ作1・2号墳発掘調査報告書』 千葉県文化財保護協会

北ノ作1・2号墳は1959・1960年にも「北作I号墳」・「II号墳」の名称により早稲田大学考古学研究室が調査しており、下記の報文も発行されている。

金子浩昌・中村恵次・市毛勲 1959 「千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査」『古代』第33号 早稲田大学考古学会

中村恵次・市毛 勲他 1961 『印旛手賀』 早稲田大学考古学研究室

- (註6) 田中新史 1977 「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会
田中新史 1984 「出現期古墳の理解と展望－東国神門五号墳の調査と関連して－」『古代』第77号 早稲田大学考古学会
浅利幸一 1989 「神門3号墳」『市原市文化財センター年報』昭和62年度 市原市文化財センター
- (註7) 田口一郎 1981 『高崎市元島名將軍塚古墳』 高崎市教育委員会
- (註8) 飯塚恵子他 1978 『鈴ノ宮遺跡』 高崎市教育委員会
- (註9) 佐野市教育委員会・飯田土地改良区 1992 『馬門南遺跡・馬門愛宕塚古墳』
- (註10) 斎藤光利 1993 「三王山南塚1・2号墳」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
日本考古学協会新潟大会実行委員会
- (註11) 三木文雄編 1990 『那須駒形大塚』(吉川弘文館・刊)
- (註12) 杉崎茂樹他 1994 『中耕遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集 埼玉県埋蔵文化調査事業団
- (註13) 坂野和信 1987 『下道添遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集 埼玉県埋蔵文化調査事業団
- (註14) 大参義一氏は「欠山期」・「元屋敷期」・「石塚期」と呼称していた。
- 大参義一 1968 「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』X L VII
- (註15) 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター報告書第10集 愛知県埋蔵文化財センター
- (註16) 甘粕健・春日真実編 1994 『東日本の古墳の出現』(山川出版社・刊)
- (註17) 都出比呂志 1982 「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』第67巻第4号 日本考古学会
- (註18) 柳田康雄 1982 「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻
- (註19) 直井雅尚 1993 『弘法山古墳出土遺物の再整理』 松本市教育委員会

この報文の18~21ページに示された各地の編年の対応関係のうち畿内のものとして「纏向編年」と「矢部編年」の対応が示されているが、「纏向編年」の関川尚功氏と「矢部編年」の寺沢薰氏の庄内式・布留式の認定の問題には深刻な対立があるためか、小稿32ページに引いた(註16)文献所収の対応表では庄内式・布留式とも両氏の編年以前のものにもどしている。筆者も寺沢氏の「布留0式」には懷疑的なので、小稿本文中には旧来の庄内式・布留式の理解を採用している。

新潟 シンポ 編年	東北	関東北部	関東南部	東海	中部高地	北陸北東部	北陸南西部	畿内	
		東京湾 西岸	東京	赤塚 (1990)	信濃	甲斐	坂井・川村 (1993)	漆町編年 田嶋 (1986)	
					千野 (1993)				
1	I 32	I期	II期(古) II期(新) III期(古) III期(新) IV期	山中式後期 廻間 I 廻間 II 廻間 III 松河戸式前期	V-3	1期 2a 2b 3期 II-1 II-2 II-3 III 5期	I最新 II-1 II-2 II-3 III IV	1群 2群 (+) 3群 4群 5群 6群 7群 8群 9群 10群	
2					V-4				
3					V-5				
4					御屋敷				
5									
6									
7			III期(古)						
8									
9			III-2						
10			III-3						

第1表 弥生時代から古墳時代の土器編年の広域比較 (甘粕・春日編 1994による)

埼玉古墳群関連文献目録 I

宮 昌 之

(凡例)

- 本目録は埼玉古墳群に関する平成4年度までの論文を中心に収録したが、直接古墳群を研究対象にしていない論文であっても、重要な指摘がなされているものは収録し、引用や紹介だけのものは除いた。また、論文に準ずるもの・年報・報告書・図録・県市町村史・史跡案内・紀行文については必要と判断したものに限った。なお、新聞・週刊誌・古文書・古記録・辞典・写真集等は除いた。
- 定期刊行物の巻数・号数等は数字で表し、第○巻第○号は「○—○」と表記した。
- 再刊・採録(改題・加筆を含む)されている場合は初出の方にその旨を記し、採録の方は改めて記さなかった。

<1905(明治38)年>

- 柴田常惠「武藏北埼玉郡埼玉村將軍塚」『東京人類學會雑誌』231 pp.375~379 (1982第一書房で復刊)

<1912(大正元)年>

- 埼玉縣『埼玉縣誌』上巻 (1977歴史図書社で復刊 p.172、p.175)

<1923(大正12)年>

- 埼玉縣北埼玉郡役所『北埼玉郡史』 pp.52~53 (1974名著出版、1987臨川書店で復刊)

<1926(大正15)年>

- 大場磐雄「八月十九日の部分」『樂石雜筆』第六 (1975『記録—考古学史 樂石雜筆(上)』大場磐雄著作集6 雄山閣 pp.217~220に採録)

<1936(昭和11)年>

- 高木豊三郎『史蹟埼玉』埼玉村教育會

<1951(昭和26)年>

- 「北埼玉郡の古墳」『埼玉縣史』1 先史原始時代 埼玉縣 pp.333~361

<1958(昭和33)年>

- 甘粕健「武藏の争乱と屯倉の設置」『横浜市史』1 横浜市 pp.112~130

<1961(昭和36)年>

- 栗原文蔵「蛇行状鉄器出土の武藏將軍塚古墳」『埼玉研究』5 埼玉県地域研究会 pp.34~37 (1982国書刊行会で復刊)

<1963(昭和38)年>

- 栗原文蔵『古代の行田』行田市郷土文化会 pp.21~27

- 『古墳調査報告書』第六編 埼玉県教育委員会

- 『行田市史』上巻 行田市役所 pp.63~170

<1966(昭和41)年>

- 甘粕健・久保哲三「古墳文化の地域的特色 関東」『日本の考古学』IV 古墳時代(上) 河出書房新社 pp.428~498

<1967(昭和42)年>

- 大村進「武藏国造に関する一考察」『埼玉研究』13 pp.15~31

<1969(昭和44)年>

- 『稻荷山古墳調査概報』埼玉県教育委員会

- 栗原文蔵「さきたま風土記の丘」『月刊考古学ジャーナル』39 ニュー・サイエンス社 pp.9~11

<1970(昭和45)年>

- 柳田敏司「埼玉古墳群について」『埼玉風景』5~5 埼玉風景同人会 pp.2~4 (1987『杖刀人のふる里に生まれて—埼玉の歴史と文化財—』柳田敏司先生還暦記念「杖刀人のふる里に生まれて」刊行会 pp.94~97に採録)

- 甘粕健「武藏国造の反乱」『古代の日本』7 関東 角川書店 pp.134~153

- 町田章「古代帶金具考」『考古学雑誌』56~1 日本考古学会 pp.33~60

<1971(昭和46)年>

- 原島礼二「関東地方と「帰化人」」『台地研究』19 pp.1~16 (1977「関東地方の屯倉と渡来氏族」に改題し『日本古代王権の形成』校倉書房 pp.369~389に加筆採録)

- 栗原文蔵「埼玉古墳群の古航空写真」『埼玉考古』9 埼玉考古学会 pp.13~14

<1973(昭和48)年>

- 坂本雄誠『さきたま古墳』さかもと (1979鉄剣関係追加)

- 柳田敏司「埼玉古墳群」『埼玉歴史点描』 pp.14~15

<1974(昭和49)年>

- 柳田敏司「さきたま風土記の丘の建設」『歴史と旅』1-4 秋田書店 (1987『杖刀人のふる里に生まれて — 埼玉の歴史と文化財—』 pp.44~55に採録)
- 栗原文藏・田部井功「稻荷山古墳・丸墓山古墳周堀発掘調査概要」『資料館報』No5 pp.3~6

<1975(昭和50)年>

- 栗原文藏・田部井功「天王山古墳・梅塚古墳周堀発掘調査概要」『資料館報』No6 pp.7~10
- 栗原文藏「埼玉古墳群の問題点」『月刊考古学ジャーナル』112 pp.2~5
- 甘粕健「古墳が語る地域政権」『古代日本の権力者』朝日新聞社 pp.225~265
- 小泉功「風土記の丘構想について」『地方史マニュアル』4 郷土資料の活用 柏書房 pp.73~76

<1976(昭和51)年>

- 『埼玉古墳群とその周辺』埼玉県立さきたま資料館
- 原島礼二「古代の武蔵 — 屯倉の設置 —」『埼玉考古』15 pp.1~22
- 原島礼二「八世紀の武蔵国造」『北武蔵考古資料図鑑』校倉書房 pp.131~138

<1977(昭和52)年>

- 『地方史マニュアル』9 地方史と考古学
 - ・原島礼二「考古資料と文献資料」 pp.149~182
 - ・春成秀爾「史跡公園・資料館の役割」 pp.206~214
- 塙野博「天王山塚古墳について」『埼玉考古』16 pp.1~10
- 今井亮「古墳の副葬遺物」『地方史マニュアル』6 考古資料の見方〈遺物編〉 pp.246~282

<1978(昭和53)年>

- 原島礼二「関東地方の渡来文化」『日本文化と朝鮮』3 新人物往来社 pp.131~141
- 原島礼二「東松山市と周辺の古代」東松山市史編纂調査報告書13 pp.57~70
- 毛利光俊彦「古墳出土銅鏡の系譜」『考古学雑誌』64-1 pp.1~27
- 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 pp.1~70 (1988『古墳時代政治史序説』 塙書房 pp.225~360 に加筆採録)
- 田中卓「稻荷山古墳出土の大刀の銘文について」『史料』5 皇學館大学資料編纂所報
- 稻田晃「応神期前後の埴輪を見る — 稲荷山古墳の金石文の背景—」『歴史手帖』6-11 名著出版 pp.48~56
- 『芸術新潮』11月号 新潮社
 - ・松本清張「鉄劍銘解釈への疑問」 pp.162~166
 - ・森浩一「稻荷山古墳の考古学メモ」 pp.167~168
 - ・百目鬼恭三郎「古代文字解説のむずかしさ」 p.169
- 有坂隆道「埼玉稻荷山古墳出土鉄劍銘試論」『古代史の研究』創刊号 関西大学古代史研究会 pp.1~25
- 鈴木靖民「倭政権の確立過程」『歴史研究』214 新人往来社 pp.28~35
- 斎藤国夫「稻荷山古墳出土鉄劍について」『追補行田史譚』行田市郷土文化会 pp.付1~6
- 関和彦「稻荷山古墳出土鉄劍と縦体・欽明朝の内乱」『共立女子第二高校研究論集』1
- 『稻荷山古墳出土関係資料 — 鉄劍銘文発見記念 —』埼玉県教育委員会
- 井上光貞「鉄劍の銘文 — 一五世紀の日本を読む — (百十五文字は古代史学の通説を覆したか)」『諸君!』12月号 文藝春秋 (1986『井上光貞著作集』5 岩波書店 pp.405~433 に採録)
- 黛弘道「稻荷山古墳の鉄劍と日本古代史」『波』12月号 新潮社
- 『稻荷山古墳』埼玉新聞社
 - ・斎藤忠・黛弘道・原島礼二・金井塚良一・柳田敏司「東国文化の夜明け (座談会)」 pp.5~19
 - ・門脇禎二・大野晋・水野祐「鉄劍銘文を読む」 pp.31~33
 - ・直木孝次郎「三つの銘文と日本古代史」 pp.34~35 (1987『日本古代国家の成立』社会思想社 pp.213~218 に採録)
 - ・金井塚良一「武蔵国造の争乱伝承と埼玉古墳群」 pp.36~37
 - ・原島礼二「古代武蔵の王者と大王」 pp.38~39
 - ・甘粕健「武蔵と毛野との関係」 pp.40~41
 - ・大野晋「鉄劍銘文百十五文字からみた日本語の源流」 pp.42~43
- 『歴史研究』215
 - ・鈴木靖民「古代国家形成の端緒」 pp.28~35
 - ・石崎景三「稻荷山鉄劍と魏志倭人伝」 pp.42~45
- 大沢俊吉「写真と解説 埼玉古墳群と稻荷山古墳の鉄劍」川崎書店
- 『辛亥銘鉄劍と埼玉の古墳群』読売新聞社浦和支局編
 - ・直木孝次郎「百十五の金文字」 pp.104~110 (9.28、9.29『読売新聞』を採録)
 - ・大野晋「天皇家へ献上の刀か」 pp.111~116
 - ・井上光貞「辛亥はやはり四七年」 pp.117~122
 - ・上田正昭「銘文解説をめぐる課題」 pp.123~127 (10.11『読売新聞』を採録)
 - ・大野晋「鉄劍銘文で再論」 pp.128~131
- 『武蔵野』57-1 武蔵野文化協会
 - ・山田英二「鉄劍銘文発見に寄せて」 pp.44~45
 - ・山本謙清「鉄劍銘文百十五字をめぐって」 pp.45~48
- 渡辺貞幸「辛亥銘鉄劍を出土した稻荷山古墳をめぐって」『考古学研究』99 考古学研究会 pp.27~34

<1979(昭和54)年>

- 『歴史と人物』1月号 中央公論社

- ・末永雅雄「古代刀剣身の銘文と装飾」 pp. 46~61 (1991『日本の武器〈太刀と外装〉』末永雅雄著作集4 雄山山閣 pp. 61~78に採録)
 - ・直木孝次郎「古代ヤマト政権と鉄劍銘」 pp. 62~69
 - ・門脇禎二「まず地域史から考える」 pp. 70~77
 - ・井上秀雄「朝鮮金石文との関係から」 pp. 78~81
 - ・斎藤忠「発見者報告 稲荷山古墳と鉄劍」 pp. 82~87
 - ・金井塚良一「稻荷山古墳の築造時期」 pp. 88~89 (1980『古代東国史の研究』 pp. 115~119に採録)
 - ・大塚初重「東国古墳文化のなかの稻荷山古墳」 pp. 90~97 (1986『埼玉稻荷山』に改題し『東国古墳文化』人間史叢書5 六興出版 pp. 239~254に採録)
 - ・古田武彦「銘文通釈に挑戦する」 pp. 98~101
 - ・李進熙「『世紀の大発見』の異様さ」 pp. 108~111
 - ・坂元義種「倭の五王の時代」 pp. 112~119
 - ・川崎真治「キュロス大王とワカタケル大王」 pp. 122~125
 - ・藤間生大「宣誓とつかえ奉る—船山古墳と稻荷山古墳と」 pp. 126~133
 - ・佐伯有清「臣か直か—銘文と武藏の豪族」 pp. 134~139 (1985『武藏の古代豪族と稻荷山古墳鉄劍銘』に改題し『日本古代氏族の研究』吉川弘文館 pp. 79~90に採録)
 - ・原島礼二「銘文の語る武藏」 pp. 140~148
- 鬼頭清明「古代国家の成立をめぐって」『歴史地理教育』287 歴史教育協議会 pp. 14~21 (1993『日本古代史研究と国家論—その批判と視座』新日本出版社 pp. 126~140に採録)
- 黛弘道「古代史の争点① 稲荷山古墳出土の鉄劍銘」『歴史手帖』7-1
- 斎藤忠「埼玉県稻荷山古墳と出土した鉄劍について」『学士会会報』742 学士会 pp. 10~13
- 『月刊ペン』12-1 月刊ペン社
- ・井上赳夫「古代東国を刻む鉄劍の金文字」 pp. 52~74
 - ・西岡秀雄「古墳時代の関東地方と気候」 pp. 76~89
 - ・賴惟勤「日本古代の漢字音=稻荷山鉄劍文字への手引」 pp. 90~105
- 鬼頭清明「鉄劍が語る古代史の真実 埼玉稻荷山から江田船山まで五、六世紀日本の国家像は」『文化評論』213 新日本出版社 pp. 111~121 (1994『稻荷山古墳の意味』に改題し『大和朝廷と東アジア』吉川弘文館 pp. 54~73に採録)
- 『シンポジウム鉄劍の謎と古代日本』新潮社
- ・直木孝次郎・岸俊男・井上光貞・斎藤忠・大野晋・西嶋定生「シンポジウム鉄劍の謎と古代日本」 pp. 17~195
 - ・甘粕健「ヤマト政権と東国の古墳」 pp. 196~209
 - ・佐伯有清「鉄劍銘文にみえる称号—とくに「獲居」をめぐって—」 pp. 210~222
 - ・川口勝康「五世紀史と金石文—ワカタケル大王の時代—」 pp. 223~234
 - ・木下礼仁「鉄劍銘文字に見る朝鮮との関係」 pp. 235~248 (1993『稻荷山鉄劍銘文にみる朝鮮との関係』に改題し『日本書紀と古代朝鮮』堺書房 pp. 135~151に採録)
 - ・東野治之「稻荷山古墳鉄劍銘を中心とする字音仮名表 付 鉄劍銘の書と仮名の発音をめぐって」 pp. 250~257 (1983『日本古代木簡の研究』堺書房 pp. 316~326に採録)
- 大塚初重・原島礼二・李進熙・金井塚良一「特別シンポジウム—五文字は何を語るか—稻荷山古墳出土の鉄劍銘文をめぐって—」『歴史読本』1月号 新人物往来社 pp. 232~253 (1989『金井塚良一対談集 古代東国の大原像』新人物往来社 pp. 101~132に採録)
- 栗原文蔵・川上葵・乙益重隆・鈴木靖民「シンポジウム稻荷山古墳出土の鉄劍をめぐって」『国学院大学学報』234 pp. 2~4
- 村山七郎「稻荷山古墳出土・鉄劍金石文を読む」『えとのす』11 新日本教育図書株式会社 pp. 19~22
- 『東アジアの古代文化』18 大和書房
- ・白崎昭一郎「稻荷山古墳出土刀劍の問題点」 pp. 98~104
 - ・李進熙「稻荷山鉄劍の銘文は慎重に」 pp. 105~107 (1978. 10. 24『毎日新聞』を補筆採録)
- 齊藤忠「〈辛亥銘鉄劍〉の発見に関連して」『月刊考古学ジャーナル』157 p. 1
- 原島礼二「埼玉稻荷山古墳出土の鉄劍銘文について」『歴史評論』346 校倉書房 pp. 3~19
- 黛弘道「古代史の争点② 獲加多支歎大王は欽明天皇か」『歴史手帖』7-2 p. 45
- 金井塚良一「稻荷山古墳出土辛亥銘鉄劍をめぐって」『高校通信東書国語』182 pp. 1~4 東京書籍 (1980『古代東国史の研究』 pp. 106~114に採録)
- 『言語生活』326 筑摩書房
- ・杉本つむ「鉄劍銘文一覧」 pp. 30~32
 - ・藤堂明保「稻荷山古墳の劍銘の解説」 pp. 33~36
 - ・古田武彦「時流を排す“読めた”とは何か」 pp. 37~39
 - ・西宮一民「古代日本文字資料発見に寄せて」 pp. 40~47
- 大野晋「鉄劍の銘文・私はこう読む』『諸君!』2月号 (1989『稻荷山古墳出土鉄劍の銘文』に改題し『日本語と世界』講談社 pp. 173~199に採録)
- 『鉄劍文字は語る—115文字が明かす古代史の謎—』ごま書房
- ・黛弘道「鉄劍文字はどう読まれ、なぜ問題になったのか」 pp. 11~66
 - ・斎藤忠「鉄劍はどのように発掘されたか」 pp. 67~104
 - ・森浩一「鉄劍文字は古墳文化のどこに位置するか」 pp. 105~156 (1984『埼玉稻荷山古墳と鉄劍文字』に改題し『蘇る古代への道』徳間書店 pp. 236~279に採録)
 - ・井上秀雄「鉄劍銘文と朝鮮金石文を比較する」 pp. 157~198
 - ・原島礼二「鉄劍文字で古代史の何がわかったのか」 pp. 199~224 (1993『東国の争乱と大和王権』に改題し『古代東国の風景』吉川弘文館 pp. 22~44に採録)
- 栗原文蔵・川上葵・乙益重隆・鈴木靖民「シンポジウム稻荷山古墳出土の鉄劍をめぐって その2」『国学院大学学報』236 pp. 4~7

- 『古代研究』16 元興寺文化財研究所考古学研究室
 - ・元興寺文化財研究所文化財保存処理センター「稻荷山古墳鉄劍銘文の発見と出土鉄製品の保存処理」pp.60~62
 - ・直木孝次郎「稻荷山古墳出土鉄劍銘の問題点」pp.63~67
 - ・藤澤一夫「埼玉の古代墳墓 稲荷山鉄劍の金象嵌銘 —その読みと解と—」pp.68~97
- 田中卓『古代天皇家の秘密』太陽企画出版（1985『邪馬台国と稻荷山刀銘』田中卓著作集3 国書刊行会 pp.217~416に採録）
- 村山七郎「稻荷山金石文について」『原始日本語と民族文化』（国分直一氏と共に著）三一書房 pp.249~264
- 『稻荷山古墳出土鉄劍金象嵌銘概報』埼玉県教育委員会
- 黛弘道「古代史の争点③ 鉄劍に見える『斯鬼宮』について」『歴史手帖』7~3 p.47
- 岸俊男「稻荷山古墳鉄劍銘との出会い」『史恋余話』1（国史大辞典付録）吉川弘文館 pp.1~3（1980『遺跡・遺物と古代史学』吉川弘文館 pp.13~17に採録）
- 原島礼二『古代の王者と国造』教育社
- 『埼玉民衆史研究』5 埼玉民衆史研究会
 - ・金井塙良一「辛亥銘鉄劍をめぐって」pp.16~25
 - ・原島礼二「稻荷山古墳出土鉄劍銘文について」pp.26~32
- 斎藤忠「稻荷山古墳と出土の金象嵌銘鉄劍」『歴史と地理』104 山川出版社
- 稻田晃「稻荷山古墳の年代をめぐって（上）—岩戸山古墳から稻荷山古墳を見る—」『歴史手帖』7~4 pp.41~47
- 金思輝「鉄劍文字を朝鮮語で読めば —日本の学者が説くように、雄略天皇など出て来ない—」『文芸春秋』57~4 pp.376~381
- 小田富士雄「日本の古墳出土銅鏡について —韓國・武寧王陵副葬遺物に寄せて—」『九州考古学研究』古墳時代篇 学生社 pp.642~675（1975『百済研究』6 を増補採録、1987『日本考古学論集』10 吉川弘文館 pp.149~186に採録）
- 坂名井深三『稻荷山古墳 鉄劍銘百十五文字の謎 鉄劍の主は聖徳太子の実兄』権書房
- 岸俊男「稻荷山古墳鉄劍“辛亥年金錯銘”的解説」『考古学の謎解き』講談社 pp.8~42
- 原島礼二「稻荷山古墳の鉄劍銘文について」『ハイスクールニュース』2~1 学校図書 p.3
- 中堂觀恵『埼玉・稻荷山古墳』原書房
- 『国学院大学日本文化研究所報』Vol.16 No1（稻荷山古墳出土鉄劍銘検討会要旨）
 - ・中村啓信「鉄劍銘と金石文」pp.12~13
 - ・桜井満「万葉集の立場から」pp.13~15
 - ・嵐義人「法制史料としての銘文」pp.15~16
- 『東アジアの古代文化』19 大和書房
 - ・井上辰雄「関東と北九州の古代豪族 —稻荷山古墳と江田船山古墳の銘文に関連して—」pp.2~15
 - ・佐伯有清「鉄劍銘と武藏国の古代氏族」pp.16~28
 - ・荒竹清光「稻荷山古墳と鉄劍をめぐる疑問 —その歴史地理的背景—」pp.29~35
 - ・大和書房編集部「稻荷山古墳出土の鉄劍銘文をめぐって」pp.36~61
 - ・大和書房編集部「稻荷山古墳出土の画文帶神獸鏡をめぐって」pp.62~71
 - ・島辻義徳「稻荷山鉄劍は何を証明したか」pp.72~83
 - ・原島礼二・金井塙良一「鉄劍銘文と北武藏の古代氏族」pp.84~99（1989『金井塙良一対談集 古代東国原像』pp.133~156に採録）
 - ・池上巖「獲加多支歯大王=雄略天皇説への疑問」pp.100~119
 - ・古田武彦「九州王朝の証言〈三〉—埼玉稻荷山古墳の「鉄劍」銘文について—」pp.120~133（1983『多元的古代の成立』下巻 邪馬台壹国展開 駿々堂 pp.112~130に採録）
- 石崎敬三「稻荷山鉄劍銘の大王は倭王讚である」『歴史研究』219
- 井本英一「杖刀人」『えとのす』12 pp.90~99
- 吉田晶「稻荷山古墳出土鉄劍銘について」『歴史評論』349 pp.108~109
- 『歴史公論』5~5 雄山閣
 - ・甘粕健・神田秀夫・佐伯有清・黛弘道「座談会 五・六世紀の日本と稻荷山古墳」pp.17~46
 - ・柳田敏司「稻荷山古墳発掘調査のいきさつ」pp.48~49（1987『杖刀人のふる里に生まれて』pp.58~62に採録）
 - ・岸俊男「稻荷山古墳鉄劍銘の読みについて」pp.50~55（1980『遺跡・遺物と古代史学』吉川弘文館 pp.13~17に採録）
 - ・坂元義種「倭王武とその時代 —武の上表文を中心として—」pp.57~68
 - ・佐伯有清「古代氏族の系譜」pp.69~77
 - ・前川明久「鉄劍銘文にみえる称号と姓」pp.78~88（1986『稻荷山古墳出土鉄劍銘にみえる称号と姓』に改題し『日本古代氏族と王權の研究』法政大学出版局 pp.53~67に採録）
 - ・新野直吉「武藏国造について」pp.91~98
 - ・原島礼二「稻荷山古墳以後の北武藏」pp.99~105
 - ・斎藤忠「稻荷山古墳の被葬者について」pp.115~120
 - ・乙益重隆「江田船山古墳と銀象嵌大刀」pp.121~129
 - ・前之園亮一「四~七世紀の金石文を解説する」pp.131~135
 - ・稻田晃「稻荷山古墳の年代をめぐる考古学的概見」pp.141~146
- 『歴史読本』5月号
 - ・八木充「ヤマト政権と古代国家の形成」pp.46~55
 - ・金井塙良一「野本將軍塚古墳の謎 —武藏国造の争乱と北武藏最大の前方後円墳の築造時期—」pp.64~71（1980『北武藏最大の前方後円墳 —野本將軍塚古墳の謎—』に改題し『鉄劍を出した国』pp.71~86に補筆採録）
 - ・小林三郎「画文帶神獸鏡と稻荷山古墳」pp.232~235

- 小島憲之「文字の揺れ — 飛鳥朝「新字」の周辺」『文学』47-5 岩波書店 pp.1~20
- 宮原武夫「稻荷山古墳の鉄劍の教材化」『歴史地理教育』291 歴史教育者協議会 pp.80~83
- 大村進「稻荷山古墳と辛亥鉄劍銘文」『歴史教育』2 歴史教育研究会
- 小林三郎・新野直吉「1978年の歴史学界回顧と展望」『史学雑誌』88-5 pp.26~29、pp.35~40 (1987『回顧と展望』3 山川出版社 pp.136~138、5 pp.254~256に採録)
- 『日本歴史』373 吉川弘文館
- ・宮田俊彦「稻荷山古墳の辛亥年は五九一年ではどうであろうか」p.50
 - ・武井睦雄「『杖刀』考 — 稲荷山古墳出土の鉄劍銘から—」pp.78~84
- 金井塚良一「稻荷山古墳と武藏国造の争乱」『歴史と人物』6月号 pp.60~69 (1980『古代東国史の研究』埼玉新聞社 pp.137~153に採録)
- 稻田晃「稻荷山古墳の年代をめぐって(下) — 岩戸山古墳から稻荷山古墳を見る」『歴史手帖』7-6 pp.52~56
- 小野山節「鐘形装飾付馬具とその分布」『MUSEUM』339 pp.4~15
- 桜井満「埼玉古墳群」『伝説のふるさと』日本書籍 pp.157~162
- 岡本健一「金文字と銀文字」「杖刀人と典曹人」「獲加多支國大王」「古事記の証明」毎日新聞社 pp.145~237
- 『国学院大学日本文化研究所報』Vol.16 No2 (稻荷山古墳出土鉄劍銘検討会要旨)
 - ・梶山林継「系譜伝承銘について」pp.10~11
 - ・野口武司「鉄劍銘と『書紀』」pp.11~12
- 亀井正道「船山古墳と銀象嵌大刀」『MUSEUM』340 ミュージアム出版 pp.4~16
- 角林文雄「『大王』号説批判 — 稲荷山古墳出土鉄劍銘に関連して—」『続日本紀研究』203 続日本紀研究会 pp.49~52
- 関和彦「稻荷山古墳出土鉄劍原文考」『歴史手帖』7-7 pp.43~45
- 川崎真治「稻荷山鉄劍銘文は語る 白鳥と騎士の王」新國民社
- 『東アジアの古代文化』20
 - ・大谷光男「古代の暦と太安萬侖墓誌銘の暦日」pp.2~9
 - ・白崎昭一郎「斯鬼宮考 — 「シ」の甲乙別存在の可能性—」pp.133~149
- 山尾幸久「稻荷山古墳出土鉄劍銘の一試考」『日本史研究』204 日本史研究会 pp.55~67
- 大和岩雄「稻荷山古墳鉄劍銘文への疑問」『古事記と天武天皇の謎』六興出版 pp.223~248
- 小川良祐「埼玉県行田市稻荷山古墳出土辛亥年銘金象嵌鉄劍の象嵌について」『考古学雑誌』65-2 pp.103~107
- 古田武彦「九州王朝の証言(五) — 「定説」の崩壊—」『東アジアの古代文化』21 pp.102~112 (1983『多元的古代の成立 下巻』— 邪馬台壹国の展開— pp.145~157に採録)
- 黛弘道「古代史の争点⑪ 鉄劍銘にみえる「杖刀人」について」『歴史手帖』7-11 p.48
- 古田武彦「関東に大王あり 稲荷山鉄劍の密室」創世記 (1987に新泉社から復刊)
- 甘粕健「古墳の展開と関東の地域政権」『新潟史学』12 新潟史学会 pp.1~13
- 鈴木靖民「稻荷山古墳鉄劍銘乎獲居臣の研究史的検討」『国学院雑誌』80-11 国学院大学 pp.9~22
- 角林文雄「武烈～欽明期の再検討」『史学雑誌』88-11 史學會 pp.46~60
- 黛弘道「古代史の争点⑫ 武烈天皇は雄略天皇の子・孫か」『歴史手帖』7-12 p.47
- 『歴史と人物』12月号 創刊百号特集
 - ・直木孝二郎「古代王權の争奪」pp.5~18
 - ・金井塚良一「推古朝と北武藏の銅鏡」pp.208~215 (1980『古代東国史の研究』pp.298~314に採録)
- 『古代吉備国論争』(下) 山陽新聞社
 - ・岸俊男「最新の古代史料と吉備」pp.34~59
 - ・林屋辰三郎・井上光貞・直木孝次郎他「討論および補足講演」pp.135~183
- 井上光貞「稻荷山鉄劍と古代史学」(公開講演要旨)『史学雑誌』88-12 pp.90~92 (1986『井上光貞著作集』5 pp.434~438に採録)
- 井上光貞「稻荷山鉄劍の銘文について」(講演要旨)『東方学会報』37 pp.5~6
- 水野祐「稻荷山古墳出土鉄劍銘文と古代東国史への一試論」『新鐘』27 早稲田大学 p.43
- 藤間生大「「倭の五王」時代の肥後」『新熊本の歴史2』古代下 熊本日々新聞 (1982『東アジア世界研究への模索 — 研究主体の形成に関連して—』校倉書房 pp.94~117に採録)
- 岸俊男「稻荷山古墳出土鉄劍銘のもつ意味」『時事教養』特集3 (1980『遺跡・遺物と古代史学』吉川弘文館 pp.31~38に採録)
- <1980 (昭和55) 年>**
- 『ゼミナール日本古代史』下 倭の五王を中心に 光文社
 - ・坂元義種「文字のある考古学史料の諸問題」pp.29~83
 - ・大塚初重「東国の古墳 — 毛野・武藏・上総・下総・下総—」pp.247~258
 - ・新野直吉「県・県主制から国造制へ」「氏姓制度」pp.335~363
 - ・井出至「黎明期の漢字使用」pp.422~431
 - ・岡田精司「古事記・日本書紀」の史料批判—初期大王の説話と系譜」pp.484~496
 - ・西嶋定生「四～六世紀の東アジアと日本」pp.593~614 (1985『日本歴史の国際環境』東京大学出版会 pp.46~80に訂正加筆採録)
- 上田正昭「最近の古代学の成果をめぐって I」『図書』366 岩波書店 pp.2~17
- 小川良祐・金子真土「稻荷山古墳出土鉄製品保存処理の概要」『資料館報』No10 pp.10~11
- 井上光貞・大塚初重・杉山二郎・直木孝次郎・西嶋定生・森浩一・松本清張「国家成立の謎」平凡社
- 『文学』48-4
 - ・東野治之「護身劍銘文考」pp.127~136 (1983『日本古代木簡の研究』pp.327~344に採録)
 - ・金井塚良一「埼玉古墳群の形成」pp.137~148 (1980『古代東国史の研究』pp.154~173に採録)
 - ・井上光貞「古事記と稻荷山古墳」pp.124~126 (1986『井上光貞著作集』5 pp.439~444に採録)
- 森浩一「埼玉稻荷山古墳を考える」『歴史と人物』5月号 pp.254~255 (1986『日本の古代国家と東アジア』古

代史選書6 雄山閣 pp.55~64に採録)

□『歴史読本』5月号

- ・佐伯有清「古代国家形成の問題点」pp.46~54
- ・甘粕健・今井堯・菊地康明・原島礼二・金井塚良一対談「古代東国と大和政権」pp.114~137
- ・栗原文蔵「稻荷山古墳の鉄劍銘文」pp.150~151

□川口勝康「国際関係からみた古事記」『文学』48~5 pp.74~86

□岸俊男「万葉歌からみた新しい遺物・遺跡—稻荷山鉄劍と太安万侖墓—」『日本古代の国家と宗教』上 pp.61~100 (1988『稻荷山鉄劍と丈部一万葉歌からみた新しい遺物・遺跡(一)』に改題し『日本古代文物の研究』塙書房 pp.43~66に採録)

□吉田晶「稻荷山古墳出土鉄劍銘に関する一考察」『日本古代の国家と宗教』下 吉川弘文館 pp.1~25

□東野治之「漢字の伝来と受容」『歴史教育』14 (1983『日本古代木簡の研究』pp.308~315に加筆採録)

□中村啓信「稻荷山古墳鉄劍銘から記紀へ」『国学院雑誌』81~6 pp.1~18

□斎藤忠・大塚初重「稻荷山古墳と埼玉古墳群」三一書房

□上田正昭・森浩一・山田宗睦「倭の五王」『日本古代史』筑摩書房 pp.171~195

□鈴木靖民「稻荷山古墳鉄劍銘」「古代国家史研究の歩み—邪馬台国から大和政権まで—」新人物往来社 pp.177~212 (1983に増補版を発行)

□井上光貞「稻荷山鉄劍の問題」『テレビ大学講座 日本古代史』國家の成立と文化をさぐる 旺文社 pp.52~61

□『歴史公論』58

- ・佐伯有清・平野邦雄・黛弘道「古代日本国家と氏姓」pp.6~27
- ・原島礼二「大臣と大連」pp.43~44

□井上光貞「雄略朝における王権と東アジア—五世紀末葉・六世紀前半における倭国とその王権」第一部—『東アジア世界における日本古代史講座』4 学生社 pp.72~117 (1986『井上光貞著作集』5 pp.3~51に採録)

□佐藤文生「稻荷山古墳鉄劍銘は太(多)氏のものか」『神道学』107 pp.59~67

□『埼玉稻荷山古墳』埼玉県教育委員会

□原島礼二「鉄劍銘研究の問題点」『辛亥銘鉄劍と埼玉の古墳群 = 増補版』 読売新聞社浦和支局編 pp.78~103 (1993『稻荷山古墳鉄劍銘の解説』に改題し『古代東国風景』 pp.45~74に採録)

□『鉄劍を出した国』学生社

- ・柳田敏司「百十五文字の発見—鉄劍銘文発見のいきさつ」pp.7~14
- ・塙野博「埼玉古墳群とその周辺」pp.15~70
- ・菅谷浩之「北武藏と上毛野の古墳」pp.87~128
- ・沼野勉「武藏国造の争乱」pp.177~185
- ・宮内正勝「日本古代史と銘文」pp.186~209
- ・原島礼二「鉄劍銘文の問題点」pp.210~235

□本位田菊士「『大王』から『天皇』へ—古代君主号の成立をめぐって—」ヒストリア』89 大阪歴史学会 pp.1~20

□岸俊男『遺跡・遺物と古代史学』吉川弘文館

- ・「稻荷山古墳出土鉄劍銘の解説」pp.2~12 (1978.10.28『毎日新聞』を採録)
- ・「稻荷山鉄劍銘発見から一年」pp.39~43 (1979.9.21『毎日新聞』を採録)

〈1981(昭和56)年〉

□大村進「辛亥銘鉄劍をめぐる諸問題—銘文発見後の動向を中心に」『八潮市史研究』3 pp.219~288

□藤間生大「鉄劍の銘文と倭王武」『季刊邪馬台国』7 桦書房 pp.76~93 (1982『東アジア世界研究への模索—研究主体の形成に関連して—』校倉書房 pp.69~93に採録)

□金井塚良一「前方後円墳の消滅—北武藏を中心として」『歴史公論』63 pp.68~78

□柵国男「武藏の古墳と争乱」『歴史への招待』12 日本放送出版協会 pp.157~159 (1989『NHK歴史への招待古代史の謎に挑む』I pp.39~47に採録)

□石崎景三『鉄劍と鏡が語る弥馬台国』新人物往来社

□石部正志「畿内の巨大古墳と倭の五王の世紀」『ヒストリア』90 大阪歴史学会 pp.1~16

□前川明久「足尾(宿禰)小考—埼玉県稻荷山古墳出土鉄劍銘文系譜に関連して—」『法政史学』33 pp.17~28 (1986『日本古代氏族と王権の研究』pp.68~84に採録)

□『日本歴史展望』1 埋もれた邪馬台国の謎 旺文社

- ・木下礼仁「稻荷山鉄劍銘と古代朝鮮文字」pp.101~112 (1993「上代三金石文の字音 仮名字」とその性格に改題し『日本書紀と古代朝鮮』pp.151~171に採録)

- ・田辺昭三「倭の五王」「『記』・『紀』の前提」pp.246~255、264~272

□小川良祐他「瓦塚古墳東南部・鉄砲山古墳前方部西側周堀発掘調査概要」『資料館報』No11 pp.6~9

□直木孝次郎「稻荷山古墳鉄劍銘に関する一試論—斯鬼宮と磐余宮」『人文研究』32~9 大阪市立大学文学部 pp.1~16 (1987『日本古代国家の成立』社会思想社 pp.219~236に採録)

□『古代を考える』25 東国古墳群の検討 古代を考える会

- ・柵国男「武藏国の古墳」及び討論 pp.1~24

- ・原島礼二「古代の武藏と上野」及び討論 pp.25~52

□佐伯有清「江田船山古墳出土の大刀銘文」『東アジア世界における日本古代史講座』3 学生社 pp.247~272 (1986『日本の古代国家と東アジア』古代史選書6 雄山閣 pp.217~239に採録)

□有坂隆道「古代史を解くカギ—暦の觀点から—」『飛鳥の歴史と文学』2 駿々堂 (1982『埼玉稻荷山古墳出土鉄劍銘の「七月中」』に改題し『古代史を解くカギ』毎日選書11 每日新聞社 pp.208~231に採録)

□坂本和俊「埼玉の前方後円墳」『歴史手帖』5 pp.17~23

□樋口隆康「埼玉稻荷山古墳出土鏡をめぐって」『考古学メモワール』19 学生社 pp.1~16

□佐伯有清「1980年の歴史学界回顧と展望」『史学雑誌』90~5 pp.35~41 (1987『日本歴史学界の回顧展望』5 pp.324~330に採録)

- 林屋辰三郎「原日本文化の生成」『新潮古代美術館』12 日本文化の創世紀 新潮社 pp.81~96 (1988『古代の環境』日本史論聚2 岩波書店 pp.3~26に採録)
- 森浩一「埼玉県稻荷山古墳を考える」『考古学西から東から』中央公論社 pp.204~208
- 安本美典「稻荷山古墳出土鉄刀銘文の閃光—五世紀の謎を解く115文字』『季刊邪馬台国』9 pp.8~35 (1981『倭の五王の謎』講談社現代新書に加筆採録 pp.59~112)
- 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 p.45
- 西嶋定生「序説・七世紀の東アジアと日本」『東アジア世界における日本古代史講座』5 学生社 pp.7~45 (1985『七~八世紀の東アジアと日本』に改題し『日本歴史の国際環境』東京大学出版会 pp.81~151に訂正加筆採録)
- 土田直鎮「武藏野の統治」『武藏野』59~2 武藏野文化協会 pp.97~102
- 佐々木稔「銘文鉄剣の材質と製法」『月刊百科』229 平凡社 pp.20~26
- 川口勝康「五世紀の大王と王統譜を探る」『巨大古墳と倭の五王』青木書店 pp.111~159
- 齊藤国夫「埼玉県における榛名山二ヶ岳噴火火山灰を堆積する遺跡について』『埼玉考古』20 pp.25~39
- 安本美典「『獲加多支齒大王』にせまる」『倭の五王の謎』講談社現代新書 pp.96~112
- 小川良祐他「二子山古墳外堀範囲確認調査概要」『資料館報』No12 pp.6~9

<1982(昭和57)年>

- 安本美典「21代雄略天皇倭王武の国内平定」『歴史と旅』1月号 pp.62~65
- 佐々克明「高松塚10年に想う 七世紀までは「日本國以前」—」『季刊三千里』三千里社 pp.78~83
- 甘粕健・金井塚良一・大塚初重・今井亮・菊地康明・原島礼二『シンポジウム古代東国と大和政権』新人物往来社
- 金井塚良一「鉄劍めぐる古代の豪族辛亥銘鉄劍と乎獲居臣」『日本史の舞台』1 古代びと野望のあと 集英社 pp.124~121
- 辻本直男「杖刀と杖刀人」『歴史読本』2月号 pp.27~29
- 「埼玉(さきたま)古墳群」『新編埼玉県史』資料編2 埼玉県 pp.830~874
- 溝口睦子『日本古代氏族系譜の成立』学習院 pp.364~394
- 『埼玉稻荷山古墳辛亥銘鉄劍修理報告書』埼玉県教育委員会
- 『月刊考古学ジャーナル』201 特集・稻荷山古墳の鉄劍
・福山敏男「東大寺山大刀と稻荷山鉄劍の銘文」pp.2~4
・増田精一「つるぎのたち」pp.5~8
・藤澤一夫「埼玉県稻荷山墓鉄劍の金錯銘~追考~」pp.9~13
・増田逸朗「辛亥銘鉄劍出土古墳の概要と埼玉古墳群」pp.13~20
・杉山正美「乎獲居の呼び声 —115の金象嵌—」pp.21~23
- 若松良一「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析 ——古墳における複数回の埴輪樹立について—」『法政考古学』第7集 法政考古学会 pp.13~30
- 駒宮史朗「埼玉古墳群」「埼玉の文化財 —史跡編—」埼玉の文化財シリーズ4 埼玉県教育委員会 pp.14~15
- 都出比呂志「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』67~4 pp.119~122
- 渡辺貞幸「武藏国造の争乱と古代東国」『別冊歴史読本』古代謎の王朝と天皇 pp.182~188
- 武光誠『古代史演習 部民制』吉川弘文館 p.6
- 鈴木靖民「1981年の歴史学界回顧と展望」『史学雑誌』91~5 pp.38~45 (1987『日本歴史学界の回顧と展望』5 pp.324~330に採録)
- 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』1 pp.79~100
- 宮崎市定「七支刀銘文試釈」『東方学』64 (1988『古代大和朝廷』筑摩書房 pp.100~120 に採録)
- 前川明久「盟神探湯とトモ」『東アジアの古代文化』32 pp.55~67
- 瀧川政次郎「津田史学の終焉と津田学徒の責任 —稻荷山古墳発見の鉄劍銘の解説—」『古代文化』34~8 古代学協会 pp.14~26 (1984『季刊邪馬台国』21 pp.72~93 に採録)
- 新日鉄製鉄基礎研究所製鉄史研究会「『稻荷山鉄劍』表面鍛の解析」『MUSEUM』378 pp.4~10
- 井上光貞「序論にかえて —カバネ・位階・官職—」『東アジア世界の古代史講座』6 pp.7~71 (1986「カバネ・位階・官職」に改題し『井上光貞著作集』5 pp.157~224に採録)
- 黛弘道・大塚初重・井上秀雄他『辛亥銘鉄劍と金石文 シンポジウム』埼玉県
- 今泉泰之「愛宕山古墳周堀範囲確認調査概要」『資料館報』No13 pp.8~13
- 『東アジアの古代文化』33
・江上波夫「騎馬民族と日本の統一国家」pp.2~63
・荒竹清光「新「常世」考 —常世神の分布と考古学的知見を通して—」pp.122~148
- 江上波夫「江上波夫大いに語る 騎馬民族征服王朝のすべて」『歴史と旅』11月号 pp.36~55
- 岸俊男「稻荷山鉄劍銘補考」『歴史と人物』12月号 pp.24~25 (1984『古代宮都の探求』塙書房 pp.54~57に再録)

<1983(昭和58)年>

- 井上光貞「稻荷山鉄劍銘文考 銘文との出会い」『歴史と人物』1月号 pp.200~203 (1986『井上光貞著作集』5 pp.445~450 に採録)
- 『歴史と人物』2月号
・原島礼二「東国巨大古墳の王者たち」pp.84~90
・井上光貞「稻荷山鉄劍銘文考2 辛亥年と大王」pp.162~165 (1986『井上光貞著作集』5 pp.450~455に採録)
- 重松明久「稻荷山古墳出土鉄劍銘文をめぐる推理」『谷口澄夫博士古稀記念論集』福武書店 (1986『古代国家と宗教文化』吉川弘文館 pp.145~167 に採録)
- 井上光貞「稻荷山鉄劍銘文考3」『歴史と人物』3月号 pp.206~210 (1986『井上光貞著作集』5 pp.455~462 に採録)
- 『シンポジウム 辛亥銘鉄劍と金石文』新編埼玉県史別冊
・柳田敏司「報告 辛亥銘鉄劍の発見」pp.33~56
・江上波夫「記念講演 金石文としての鉄劍銘」pp.57~77

- ・松本清張「記念講演 辛亥銘鉄剣の一仮説」 pp. 79～102
- ・岸俊男「基調報告 古代刀剣と辛亥銘鉄剣」 pp. 103～107
- ・黛弘道「基調報告 杖刀人首の性格」 pp. 109～113
- ・林炳泰「基調報告 韓国における五・六世紀の金石文」 pp. 115～118
- ・井上秀雄「基調報告 朝鮮・中国金石文と辛亥銘鉄剣」 pp. 119～124
- ・大塚初重「基調報告 稲荷山古墳をめぐる考古学上の問題点」 pp. 125～128
- ・江上波夫・松本清張・岸俊男・黛弘道・林炳泰・井上秀雄・大塚初重「シンポジウム 辛亥銘鉄剣と金石文」 pp. 129～231
- 塙野博「武藏埼玉稻荷山古墳出土品」「水鳥埴輪」『埼玉の文化財 —書跡典籍古文書・考古資料・歴史資料編—』埼玉の文化財シリーズ5 pp. 82～84
- 井上秀雄「埼玉稻荷山古墳出土鉄剣の金象嵌銘文の字形に関する一考察」『日本文化研究所研究報告』19 東北大学文学部日本文化研究施設 pp. 183～210
- 山尾幸久「雄略大王期の史的位置」『日本古代王権形成史論』岩波書店 pp. 330～400
- 近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店 p. 316
- 溝口睦子「カバネ制度と氏祖伝承（下）」『文学』51～5〔「カバネ制度と氏祖伝承（上）」は51～4〕 pp. 49～65
- 水野祐「古代史と古文書学」『日本古代史研究法』古代史選書4 雄山閣 pp. 227～240
- 奥村邦彦『まぼろし紀行』毎日新聞社（昭和57年の毎日新聞連載に加筆採録）
- 『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
 - ・原島礼二「倭の五王の在位年代と名」 pp. 161～180
 - ・本位田菊士「大臣」制と七世紀 前半の貴族政治 —律令官制成立の前提— pp. 425～443
- 黛弘道・大塚初重・白石太一郎「最近出土の遺跡と遺物 —主に東日本を中心に—」『東アジアの古代文化』36 pp. 2～32
- 岸俊男「万葉集に解かせる謎」『日本古代史の謎再考』エコール・ド・ロイヤル古代日本を考える1 学生社 pp. 171～204
- 林屋辰三郎「古代王権の諸段階」『日本史探訪』2 古代王国の謎 解説 角川書店（1988『古代の環境』日本史論 聚2 岩波書店 pp. 131～141 に採録）
- 『資料館報』No14 埼玉県立さきたま資料館
 - ・梅沢太久夫「埼玉古墳群保存修理事業について —稻荷山古墳の保存修理—」 pp. 3～8
 - ・杉崎茂樹「瓦塚古墳周囲範囲確認調査及び出土遺物整理概要報告」 pp. 9～13
 - ・杉崎茂樹「二子山古墳の埴輪および須恵器」 pp. 23～30
- 宮崎市定『謎の七支刀』中公新書703 中央公論社 pp. 120～155
- 直木孝次郎『古代日本の争乱』エコール・ド・ロイヤル古代日本を考える2 pp. 106～111
- 梅沢太久夫「よみがえる古代史」『ひろがり』10 石油化学工業協会 pp. 31～32
- 鶴岡男『古代の土木設計』六興出版 pp. 200～243
- 吉田孝「氏」の構造 —氏上と天皇—『律令国家と古代の社会』岩波書店 pp. 123～131
- 大塚初重「辛亥銘鉄剣を出土した稻荷山古墳の年代について」『日本古代史論苑』国書刊行会 pp. 17～39
- 古田武彦『邪馬一国の挑戦』徳間書店（1991『日本古代新史 —増補・邪馬一国の挑戦』新泉社で増補復刊）

<1984(昭和59)年>

- 坪内章年「稻荷山古墳出土鉄剣銘『獲居』をめぐる諸問題（上）」『東アジアの古代文化』38 pp. 118～131
- 『日本古代文化研究』創刊号 P H A L A N X —古墳文化研究会
 - ・臼杵歎「古墳時代の鉄刀について」 pp. 49～70
 - ・斎藤弘「鈴杏葉の分類と編年について」 pp. 71～83
- 塙野博「埼玉県の古式古墳 —稻荷山古墳以前の北武藏—」『埼玉県史研究』13 埼玉県 pp. 1～26
- 『武藏埼玉稻荷山古墳出土品』国宝指定記念講演会の記録』埼玉県立さきたま資料館
 - ・井上辰雄「金錯銘鉄剣と古代氏族」 pp. 10～23
 - ・古田武彦「関東の大王と稻荷山古墳の鉄剣 —多元的王権の成立—」 pp. 24～49
- 飯塚武司「北武藏における埴輪生産の展開」『法政考古』9 pp. 1～33
- 坪内章年「稻荷山古墳出土鉄剣銘『獲居』をめぐる諸問題（下）」『東アジアの古代文化』39 pp. 168～183
- 『歴史と旅』5月号 特集 銘文鉄剣の謎
 - ・岸俊男「稻荷山古墳の鉄剣」 pp. 50～57
 - ・西山要一「古代史の謎を解く X線考古学—稻荷山鉄剣における方法と成果」 pp. 100～105
 - ・井上秀夫「東アジアの金石文から見た 古代の日本」 pp. 112～121
- 長山泰孝「前期大和政権の支配体制」『日本歴史』432 pp. 17～39 (1992『古代国家と王権』吉川弘文館 pp. 58～88に採録)
- 岸俊男「画期としての雄略朝 —稻荷山鉄剣銘付考—」『日本政治社会史研究』上 埼玉県立図書館 pp. 11～49 (1988『日本古代文物の研究』埼玉県立図書館 pp. 67～97 に採録)
- 高橋徹『出雲の鉄刀20のナゾ?』朝日ブックレット28 朝日新聞社 pp. 10～13
- 『歴史読本』6月臨時増刊
 - ・武光誠「雄略天皇は日本統一の覇者か」 pp. 152～160 (1993『別冊歴史読本特別増刊 古代天皇家の謎』 pp. 86～95に採録)
 - ・井上辰雄「大和政権はいつ東国を服属させたか」 pp. 200～208 (同上 pp. 50～58に採録)
- 『杖刀人とその時代』埼玉県立博物館
- 斎藤国夫「埼玉古墳群をめぐる諸問題」『原始古代社会研究』6 校倉書房 pp. 127～190
- 『季刊考古学』8
 - ・佐々木稔「古代日本における製鉄の起源と発展——自然科学的研究の立場からのアプローチ」 pp. 14～21
 - ・佐々木稔・村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」 pp. 27～33
- 『歴史への招待』31 (1989『NHK歴史への招待3 古代史の謎に挑むII 高松塚と稻荷山鉄剣』 pp. 9～89に採録)

- ・松本清張・岡田秀彌「推理・稻荷山鉄剣1 — サビが語る謎の古代」pp. 89~113
- ・金井塚良一「稻荷山古墳出現前の古墳形成」pp. 100~101
- ・佐々木稔「鉄剣のさびの中の銅とカルシウム」pp. 108~109
- ・原島礼二「古墳時代の東西日本」pp. 114~116
- ・松本清張・石井昌国「推理・稻荷山鉄剣2 — 北方からの征服者」pp. 117~141
- ・石井昌国「古代刀のうつりかわり」pp. 132~133
- ・松島榮治「毛野国一六世紀その変容の時代」pp. 142~144
- 『日本古代史と遺跡の謎 総解説』自由国民社
 - ・原島礼二「大和王権の核をつくった豪族はだれか — 臣姓・連姓の意味するものは何か —」pp. 61~65
 - ・鈴木靖民「雄略=ワカタケルと鉄剣をめぐる謎 — 大和朝廷と地方豪族はどんな関係か —」pp. 103~108
- 門脇禎二「葛城首長家の滅亡」『葛城と古代国家』 教育社 pp. 95~137
- 吉田孝「祖名について」『奈良平安時代史論集』上巻 吉川弘文館 pp. 3~19
- 『季刊邪馬台国』21
 - ・田中卓「日本古代史の復権 — 特に井上光貞氏の学説を評す —」pp. 52~70
 - ・岡田芳朗「干支と金石文」pp. 130~139
- 『資料館報』No15
 - ・小久保徹「昭和58年度 埼玉古墳群保存修理事業 — 稲荷山古墳の保存修理 —」pp. 3~7
 - ・杉崎茂樹「鉄砲山古墳周囲範囲確認調査及び整理概要報告」pp. 8~13
- 『講座日本歴史』1 原始・古代1 東京大学出版会
 - ・白石太一郎「日本古墳文化論」pp. 159~191
 - ・鎌田元一「王権と部民制」pp. 233~268
- 岩崎卓也「後期古墳が築かれるころ」『土曜考古』9 土曜考古学研究会 pp. 1~16
- 田中正夫・小川良祐「埼玉県 — 埼玉古墳群周辺地域 —」『古代学研究』106 古代学研究会 pp. 8~11
- 門脇禎二「ヤマト朝廷論からヤマト国家論へ」『歴史と人物』12月号 pp. 60~65(1986)『古代をどう学ぶか — 研究視角と歴史像の再構成 —』校倉書房 pp. 165~176 に採録)
- 岸俊男「古代刀劍銘と稻荷山鉄劍銘」『檀原考古学研究所論集』第六 吉川弘文館 pp. 1~33 (1988『日本古代文物の研究』壇書房 pp. 9~42に採録)
- 東潮「蛇行状鉄器考」『檀原考古学研究所論集』第七 pp. 33~59 (1993「馬の文化叢書」1 古代 — 埋もれた馬文化 財団法人馬事文化財団 pp. 246~269 に再録)
- 加藤晃「日本の姓氏」『東アジア世界における日本古代史講座』10 学生社 pp. 86~129

〈1985(昭和60)年〉

- 『季刊考古学』10
 - ・石野博信「古墳編年の展望」pp. 14~15 (1990『古墳時代史』雄山閣考古学選書31 pp. 3~6 に採録)
 - ・中村浩「須恵器による編年」pp. 30~33
 - ・横川好富「武藏」pp. 70~71
 - ・菅谷文則「古墳の実年代」pp. 87~90
- 古田武彦「関東の大王」『古代は輝いていたII 日本列島の大王たち』朝日新聞社 pp. 289~340
- 原島礼二「地方豪族の争乱と大和王権」『歴史読本』2月号 pp. 86~94
- 西山克己「関東地方における須恵器出現期の様相」『駿台史学』駿台史学会 pp. 59~94
- 小久保徹・杉崎茂樹「史跡埼玉古墳群保存修理事業報告書 稲荷山古墳」埼玉県教育委員会
- 杉崎茂樹他「埼玉古墳群発掘調査報告書 第2集 鉄砲山古墳」埼玉県教育委員会
- 杉崎茂樹他「埼玉古墳群発掘調査報告書 第3集 愛宕山古墳」
- 篠川賢「国造制の成立」『国造制の成立と展開』吉川弘文館 pp. 1~90
- 古田武彦「稻荷山古墳をめぐって」『古代は輝いていた』II 日本列島の大王たち 朝日新聞社 pp. 290~322
- 平野邦雄「『稻荷山古墳鉄劍銘』の解釈」『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館 pp. 98~122
- 西郷信綱「アズマとは何か」『古代の声 うた・踊り・市・ことば・神話』朝日新聞社 pp. 37~74
- 泉森皎「刀剣の出土状態の検討 — 刀剣の呪術的性格の理解のために」『末永先生米壽記念獻呈論文集』乾 pp. 393~3~435
- 松本清張「稻荷山・船山両鉄刀の製作地」『図書』431 pp. 46~51
- 矢部良明「古墳時代後期の器皿にみる中国六朝時代器皿の影響」『M U S E U M』412 pp. 4~15
- 白石太一郎『古墳の知識』1 墳丘と内部構造 東京美術 p. 34、p. 86
- 増田逸朗「埼玉古墳群と円筒埴輪」『三県シンポジウム 埋輪の変遷 — 普遍性と地域性 —』pp. 95~100
- 石野博信「古墳時代史 11. 反乱伝承と古墳(2)」『季刊考古学』12 pp. 87~92 (1990『古墳時代史』pp. 123~133 に採録)
- 前澤輝政「埼玉古墳群」『東国の古墳 古代史の宝庫』そして pp. 37~40
- 市毛勲「稻荷山古墳出土の人物埴輪について」『研究紀要』19 早稲田実業学校
- 江上波夫「日本における騎馬民族征服王朝説の展開」『学問の探究』俊成出版社 (1992「騎馬民族征服王朝説」の展開) に改題し『江上波夫の日本古代史 騎馬民族説四十五年』大巧社 pp. 3~39に加筆採録)
- 白石太一郎「年代決定論(二) — 弥生時代以降の年代決定 —」『日本考古学』1 研究の方法 岩波書店 pp. 217~242
- 鈴木靖民「倭の五王の外交と内政 — 府官制的秩序の形成 —」『日本古代の政治と制度』続群書類從完成会 pp. 5~41
- 義江明子「古代の氏と共同体および家族」『歴史評論』pp. 21~39
- 岸俊男「古代学序説 — 稲荷山鉄剣をめぐって」『古代学への招待』I 朝日カルチャーブックス53 大阪書籍 pp. 1~36
- 上田正昭「四・五世紀の日朝関係 — 七支刀と好太王碑をめぐって」『シンポジウム好太王碑』四・五世紀の東アジアと日本] 東方書店 pp. 141~153

〈1986（昭和61）年〉

- 直木孝次郎「『記・紀』批判と津田史学」『季刊明日香風』17 飛鳥保存財団 pp. 57～81（1990『日本神話と古代国家』講談社学術文庫 pp. 257～272に採録）
- 山中敏史「律令国家の成立」『日本考古学』6 岩波書店 pp. 227～294
- 笛川進二郎「部民制についての覚書」『北山茂夫追悼日本史学論集』歴史における政治と民衆 日本史論叢会 pp. 431～454
- 白崎昭一郎「稻荷山刀銘の再検討」『東アジアの古代文化』46 p. p. 162～176
- 『資料館報』No16
・「將軍山古墳及び二子山古墳周堀範囲確認調査及び整理概要報告」pp. 9～19
・「行田市埼玉出土の人物埴輪」pp. 32～34
- 白石太一郎「ヤマト王権と東国豪族」『図説発掘が語る日本史』2 pp. 168～173
- 『大古墳が語る王権の争奪』日本古代史4 集英社
・直木孝次郎「古代王権の争奪」pp. 5～18、「永遠の謎か、邪馬台国と女王卑弥呼—女王国の地は畿内か九州か」pp. 19～56
・金井塙良一「東国の霸者『毛野国』と大王—辛亥銘鉄劍が語る畿内と地方との関係」pp. 197～230
- 井上秀雄「稻荷山鉄劍は大和朝廷の支配を立証しない」『歴史読本』臨時増刊号 pp. 278～285
- 徳光久也「五・六世紀の大刀銘と鏡銘—「わが国最古の文章」問題—」『文学』54 pp. 13～23
- 義江明子『日本古代の氏の構造』吉川弘文館
・「日本の氏と「家」」pp. 1～26
・「出自と系譜」pp. 317～351
・「氏族系譜の形成—高群逸枝『母系制の研究』批判—」pp. 352～374
・「系譜形式と同族関係—文章系譜～堅系図～横系図—」pp. 375～406
- 飯塙卓二「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『研究紀要』3 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp. 1～20
- 『埼玉古墳群 国宝・金錯銘鉄劍と古代埼玉』埼玉新聞社
・原島礼二「古代東国史への誘い」pp. 6～8
・塩野博「稻荷山古墳と金錯銘鉄劍」pp. 10～29
・金井塙良一「將軍山古墳の築造時期」pp. 32～34
・長谷川宏「丸墓山古墳と忍城水攻」pp. 36～39
・小久保徹「さきたま古墳群の概況」pp. 40～44
・増田逸朗「周辺古墳群の概況」pp. 46～56
・大村進「防人歌と東国」pp. 58～61
- 杉崎茂樹他『埼玉古墳群発掘調査報告書 第4集 瓦塚古墳』
- 『展示ガイド さきたま古墳群と北武藏の農具』埼玉県立さきたま資料館 pp. 1～36
- 小川良祐「鉄劍に浮かび出た古墳時代の日本—埼玉県稻荷山古墳の鉄劍と島根県岡田山古墳の鉄刀—」『歴史手帖』14～4 pp. 78～84
- 『邪馬台国と倭の五王』海外視点・日本の歴史2 ぎょうせい
・笠井倭人「倭王武の上表文」pp. 128～139
・黛弘道「漢字の伝来 渡来人の役割と活躍」pp. 164～175
- 河内祥輔「六世紀型の皇統形成原理」『古代政治史における天皇制の論理』吉川弘文館 pp. 29～66
- 大塚初重「関東地方に展開する古墳の実態的研究」『東アジアの古代文化』47 pp. 62～72
- 森田悌「北武藏と仏教」『日本古代の耕地と農民』第一書房 pp. 259～278
- 新納泉「ジャーナリズムと考古学」『日本考古学』7 pp. 209～232
- 荒井秀規「銘文大刀の歴史」『歴史手帖』14～6 pp. 52～58
- 東野治之「文字のはじまり—稻荷山鉄劍銘から仮名の発明まで」『日本古代史』2 繩文との対話 集英社 pp. 51～184（1994『書の古代史』岩波書店 pp. 187～215に「古代の文字世界」に改題し加筆採録）
- 『資料館報』No17
・小久保徹「史跡埼玉古墳群保存修理事業—丸墓山古墳の保存修理—」pp. 3～7
・若松良一「丸墓山古墳周堀範囲確認調査及び整理概要報告」pp. 8～13
- 義江明子「古墳時代の社会構造—家族・親族と氏」『季刊考古学』16 pp. 75～78
- 黒岩重吾「対談 大和岩雄 古代王権についての新視点—阿倍氏をめぐってのアプローチ—」『古代史の謎を探る』大和書房 pp. 65～95
- 森浩一「天皇陵考察の基礎」『前方後円墳の世紀』日本の古代5 中央公論社 pp. 189～224（1994『考古学と古代日本』中央公論社 pp. 439～474に採録）
- 熊谷公男「古代国家と氏族」『古代史研究の最前線』1 政治・経済編〔上〕 雄山閣 pp. 125～140
- 『季刊明日香風』20
・原島礼二「辛亥銘鉄劍以後の北武藏」pp. 12～19
・大塚初重「関東の後期古墳」pp. 20～25
- 原島礼二「毛野氏の変容と稻荷山古墳」『歴史読本』10月号 pp. 86～91
- 永岡治「稻荷山鉄劍の語るもの」『古代東国物語』角川選書170 pp. 114～122
- 『王権をめぐる戦い』中央公論社
・岸俊男「古代の画期雄略朝からの展望」pp. 9～40
・鎌田元一「大王による国土お統一」pp. 41～142
- 『日本古代文化研究』3
・関義則「古墳時代後期鉄鎌の分類と編年」pp. 5～20
・臼杵勲「古墳土鉄刀の多变量解析」pp. 21～32
・斎藤弘「古墳時代の壺鐘の分類と編年」pp. 47～53
・岡安光彦「週末期の前方後円墳と馬具」pp. 67～72
- 前之園亮一『古代王朝交替説批判』吉川弘文館 pp. 27～33

□井上光貞（発言部分）『シンポジウム高句麗と日本文化』講談社 pp. 101～102

＜1987（昭和62）年＞

□石上英一「古代東アジア地域と日本」『日本の社会史』1 列島内外の交通と国家 岩波書店 pp. 55～96

□柳田敏司『杖刀人のふる里に生まれて—埼玉の歴史と文化財—』

・「鉄劍銘文から思うこと」pp. 113～117（1979.9.18『埼玉新聞』を採録）

・「辛亥銘鉄劍から」pp. 117～119（1984.4.16『埼玉新聞』を採録）

□森浩一・森博達「漢字—倭人も使いこなしていた漢字」「森浩一対談集 古代技術の復権—技術から見た古代人の生活と知恵」pp. 72～91（1984.6.25『産経新聞』（大阪版）『対談シリーズ古代は語る』を増補加筆採録）

□『柳田敏司先生還暦記念論文集 埼玉の考古学』新人物往来社

・金井塚良一「埼玉將軍山古墳の性格をめぐって」pp. 381～400

・増田逸朗「埼玉政権と埴輪」pp. 401～421

・市毛勲「古代埼玉における顔面赤彩色—人物埴輪顔面の赤彩色についてV—」pp. 423～443

□塚口義信「初期大和政権とオホビコの伝承—稻荷山古墳出土鉄劍銘の「意富比境」私見—」『日本書紀研究』14 塙書房 pp. 163～190

□杉崎茂樹他『埼玉古墳群発掘調査報告書 第5集 二子山古墳』埼玉県教育委員会

□『新編埼玉県史』通史編1 原始・古代 埼玉県

・小久保徹「埼玉古墳群と金錯銘鉄劍」pp. 305～317

・原島礼二「大和王権と武藏国造」「大化革新と東国」pp. 404～444（1993『古代東国の風景』pp. 75～106に採録）

□利根川章彦「『やねや塚』と『新ヶ谷戸』—7世紀の北武藏における村落首長層に関する考古学的検討—」

『埼玉県立博物館研究紀要』13 pp. 3～32

□原島礼二「東国の大和政権とオホビコの伝承—稻荷山古墳出土鉄劍銘の「意富比境」私見—」『日本書紀研究』14 pp. 178～188に採録

□西嶋定生・平野邦雄・白石太一郎・山尾幸久・甘粕健・田辺昭三・門脇禎二『空白の四世紀とヤマト王権—邪馬台国以後—』角川選書179

□鳥養直樹「古代地域国家についての覚書—相武国造論を中心に—」『まげい』7 グループまげい pp. 11～17

□『季刊考古学』20

・伊藤純「古墳時代の黒面」pp. 38～42

・橋本博文「関東地方の埴輪」pp. 72～77

□『瓦塚古墳南東部周堀範囲確認調査及び整理概要報告』『資料館報』No18 pp. 8～12

□『日本の古代』11 ウジヒイエ 中央公論社

・前之園亮一「ウジヒカバネ」pp. 211～258

・八木充・原島礼二「東と西の豪族」pp. 349～428（原島氏執筆部分 1993『東国の豪族と文化』『古代東国の風景』pp. 109～143に採録）

□金井塚良一・梅沢重昭・増田逸朗・石塚久則・若松良一・熊倉浩靖『討論 群馬・埼玉の埴輪』あさを社

□金井塚良一「北武藏の埴輪の時代」『埴輪の時代』上毛新聞社 pp. 100～121

□坂本和俊「東国における古式須恵器研究の課題」『第8回 三県シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第I分冊—基調報告編—pp. 459～472

□川島達人・金井塚良一「対談・人物埴輪を語る」『埴輪の微笑』新人物往来社 pp. 23～146

□河名勉「歴史教育のなかの日本古代史—大和政権を中心にして—」『千葉史学』11 千葉歴史学会 pp. 79～99

□田中広明「終末期古墳の地域性—関東地方の加工石材使用石室の系譜—」『土曜考古』12 pp. 53～101

＜1988（昭和63）年＞

□和田萃「ワカタケルとその時代」『大系日本の歴史』2 古墳の時代 小学館 pp. 138～170（1992復刊 pp. 170～212）

□鄭早苗「朝鮮三国と古代日本の文字」『古代史論集』上 塙書房 pp. 45～66

□直木孝次郎「日本古代統一国家の形成—「建国記念日」問題を考えるために—」『歴史地理教育』423 pp. 10～19（1990『日本神話と古代国家』pp. 219～237に採録）

□佐伯有清編『古代を考える 雄略天皇とその時代』吉川弘文館

・篠川賢「鉄刀銘の世界」pp. 80～114

・前川明久「氏姓制への道」pp. 172～197

□高橋一夫「古代の河川交通」『草加市史研究』5 pp. 5～26

□杉崎茂樹他『埼玉古墳群発掘調査報告書 第6集 丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・将軍山古墳』

□『調査研究報告』1 埼玉県立さきたま資料館

・杉崎茂樹「県指定「農夫埴輪」について」pp. 23～27

・田中正夫「将軍山古墳出土遺物の資料調査報告(1) —鉄鏃—」pp. 28～32

□『日本の古代』14 ことばと文字

・和田萃「新発見の文字資料」pp. 9～34

・森博達「日本語と中国語の交流」pp. 111～174

・藤本幸夫「古代朝鮮の言語と文字文化」pp. 175～240

・岡崎晋明「文字と記号」pp. 373～422

□『図説検証 原像日本』3 地方と中央 古代を彩る地方文化 旺文社

・田辺昭三「列島の東と西」pp. 25～44

・原島礼二「毛野からみた大和」pp. 141～156

□関義則・宮代栄一「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館研究紀要』14 pp. 3～55

□塚田良道・中島洋一『瓦塚古墳・下埼玉通遺跡』行田市文化財調査報告書第19集 行田市教育委員会

□金井塚良一・吉田武彦対談「謎の五世紀は見えてきたか」『歴史読本』4月号 pp. 301～316

□石部正志「河内王統と大古墳」『古代天皇のすべて』新人物往来社 pp. 59～80

□『古代統一政権の成立』エコール・ド・ロイヤル古代日本を考える11

- ・和田萃「ワカタケル大王とその時代」pp. 55～95
 - ・直木孝次郎「継体・欽明朝の変革」pp. 96～136
 - 『いま、なぜ鉄剣か』記念講演会要旨 埼玉県教育委員会他
 - 森田悌『古代の武藏 稲荷山古墳の時代とその後』吉川弘文館 pp. 14～23
 - 『日本の社会史』6 社会的諸集団 岩波書店
 - ・鎌田元一「日本古代の『クニ』」pp. 17～35
 - ・吉田孝「古代社会における『ウジ』」pp. 38～72
 - 黒岩重吾「古代統一国家はいかにして形成されたか?」『歴史街道』7月号 P H P 研究所 pp. 90～99 (1993『古代日本への探検』pp. 9～40に採録)
 - 『東アジアの古代文化』56
 - ・岩崎卓也「古墳の変革 — 東国の場合 —」pp. 90～99
 - ・金井塚良一・原島礼二「『王賜』鉄剣銘文と古代東国」pp. 104～137 (1989『金井塚良一対談集 古代東国の原像』pp. 269～299に採録)
 - 中村浩「須恵器の編年」『季刊考古学』24 pp. 35～40
 - 水野祐「日本古代の東国における帰化人とその文化」『古代の日本と韓国』2 古代日本と渡来文化 pp. 47～95 学生社 (1994『歴史読本臨時増刊』渡来人は何をもたらしたか 新人物往来社 pp. 244～266 に採録)
 - 鶴岡静夫「大和王権と地方王権・在地首長層」『古代王権と氏族』古代史論集2 名著出版 pp. 1～63
 - 義江明子「古系譜の『児』(子)をめぐって」『日本歴史』484 吉川弘文館 pp. 1～20
 - 平川南「銘文の解説と意義」『『王賜』鉄剣概報 千葉県市原市稻荷台1号墳出土』吉川弘文館 pp. 18～26
 - 千賀久「日本出土初期馬具の系譜」『櫻原考古学研究所論集』第九 pp. 17～67 (1993『馬の文化史』1 pp. 108～149に採録)
 - 編集部「金石文再検討について」『市民の古代』10 特集金石文を問う 新泉社 pp. 74～79
 - 川西宏幸『古墳時代政治史序説』塙書房
 - ・「後期畿内政権論」pp. 163～224 (1986『考古学雑誌』71～2を改筆採録)
 - ・「円筒埴輪総論」pp. 225～360 (1978・1979『考古学雑誌』64～2・3を改筆採録)
 - 寺西貞弘『大化前代の皇位繼承について — 雄略天皇の即位をめぐって —』創元社 pp. 60～82
 - 小澤一雅『前方後円墳の数理』考古学選書29 雄山閣 pp. 10～14
 - 水野正好「古代刀劍にみる天皇家と道教世界」『臨時増刊歴史読本』特集古代天皇家と宗教の謎 pp. 196～203 (1993)『別冊歴史読本特別増刊』古代天皇家の謎 pp. 342～351 に彩録)
 - 古田武彦「P・G型古墳の史料批判 — 主従型の場合」『昭和薬科大学紀要』22 (1991『九州王朝の歴史学 多元的世界への出発』駿々堂 pp. 167～214 に採録)
 - 岡安光彦「心葉形鏡板付轡・杏葉の編年」『考古学研究』139 pp. 53～68
- 〈1989（平成元）年〉
- 『觀音塚古墳の時代 — 6世紀後半の東国古墳文化 —』高崎市教育委員会
 - 福本正夫『稲荷山古墳鉄刀銘文115文字をめぐる諸問題』（自費出版、1978～1985『五條古代文化』13～30号掲載を採録）
 - 菅谷文則「古墳の被葬者論争」『論争・学説 日本の考古学』別巻 雄山閣 pp. 106～125
 - 関義則「〈資料紹介〉埼玉將軍山古墳出土の蛇行状鉄器」『埼玉県立博物館紀要』16 pp. 32～41
 - 「史跡埼玉古墳群保存修理事業 — 丸墓山古墳の保存修理 —」『資料館報』No19 pp. 15～18
 - 若松良一他『埼玉古墳群発掘調査報告書 第7集 奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』
 - 『調査研究報告』2
 - ・田中正夫「史跡埼玉古墳群保存修理報告 — 丸墓山古墳保存修理事業の報告 —」pp. 1～40
 - ・駒宮史朗「県内主要古墳の調査（II）—戸場口山古墳範囲確調査—」pp. 41～64
 - 早川万年「東国古代史に関する二、三の覚書 — 三郷の古代を考えるために—」「葦のみち」創刊号 三郷市史研究 pp. 33～43
 - 田中広明「終末期古墳出現への動態I — 変容する在地首長層と造墓の展開 —」『研究紀要』5 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp. 139～178
 - 井上秀雄「稲荷山鉄剣銘考 — 通説への疑問 —」『書道研究』4月号 美術新聞社 pp. 20～41
 - 田中広明「緑泥片岩を運んだ道 — 変容する在地首長層と労働差発權 —」『土曜考古』14 pp. 83～112
 - 角林文雄「『帝紀』の成立と性格」『日本古代の政治と経済』pp. 279～289
 - 新内泉「王と王の交渉」『古代史復元』6 古墳時代の王と民衆 講談社 pp. 145～161
 - 遠藤元男編『関東の古代社会』古代史論集1 名著出版
 - ・水野祐「稲荷山古墳出土鉄剣の文化史的意義と、古代東国史への一考察」pp. 27～52
 - ・金井塚良一「北武藏の前方後円墳消滅期の問題 — 小見真觀寺古墳の出現をめぐって —」pp. 53～94
 - 福宿南嶋「江田船山・稲荷山古墳出土両刀剣銘の同時性」『書道研究』7月号 pp. 107～126
 - 金井塚良一「埼玉將軍山古墳の馬冑」『歴史手帖』17～9 pp. 4～9
 - 『千葉史学』15
 - ・伊藤循「『王賜』鉄剣をめぐる基礎的考察」pp. 15～31
 - ・吉村武彦「大和王権と古代東国」pp. 44～66
 - 岩崎卓也「古墳追求への一観角」『前方後円墳の時代 — しもつけにおけるその出現と展開』栃木県教育委員会 pp. 56～61
 - 甘柏健「地域性の展開と政治過程 — 古墳時代の毛野と武藏を中心として・討議」『考古学研究』36～2 pp. 52～70
 - 井上辰雄「古代王権と豪族 一部民制を介してのスケッチ」『古代史研究の課題と方法』国書刊行会 pp. 3～23
 - 『埼玉古墳群とその時代 — 古代東国の大武人たち —』埼玉県立さきたま資料館
 - 吉田晶「吉備の『国』」『岡山の自然と文化』8 岡山県郷土文化財団 pp. 2～40 (1995『吉備古代史の展開』塙書房 pp. 297～334 に採録)

〈1990（平成2）年〉

- 明石一紀「ウジの基本的性格—古代における父系出自—」『日本古代の親族構造』吉川弘文館 pp. 218～269
- 『古代史復元』7 古墳時代の工芸
- ・杉山普作「人物埴輪の背景」pp. 41～56
 - ・西山要一「稻荷山古墳鉄劍象嵌銘の発見」pp. 105～107
 - ・橋本博文「百練の利刀を賜う」pp. 108～120
 - ・早乙女雅博「政治的な装身具」pp. 129～140
 - ・東潮「六世紀前半の国際交流」pp. 183～184
- 沈仁安「倭国の政治・経済・文化」『倭国と東アジア』東アジアのなかの日本歴史1 六興出版 pp. 248～272
- 辰己和弘「居館の経営像」「人物埴輪と王權祭儀」『高殿の古代学—豪族の居館と王權祭儀』白水社 pp. 33～51、pp. 126～146
- 石渡信一郎『応神陵の被葬者はだれか』三一書房 pp. 92～103
- 黒田達也「オシサカノオホナカツヒメと雄略天皇についての系譜的考察」『日本書紀研究』17 塙書房 pp. 183～211
- 前田晴人「上宮王家を謹むる食饌氏族—膳臣」『臨時増刊歴史読本』古代豪族総覧 pp. 94～97
- 若松良一「—瓦塚古墳の調査から—造り出し出土の供獻土器について」『調査研究報告』3 pp. 1～24
- 中村浩「稻荷山古墳出土須恵器」『研究入門 須恵器』柏書房 pp. 85～87
- 水野正好「倭の五王と対外交流」『日本文明史』2 角川書店 pp. 218～248
- 森浩一『図説日本の古代』5 古墳から伽藍へ 中央公論社
- 山崎武「東日本最大の埴輪生産跡—鴻巣市生出塚埴輪窯跡群—」『埼玉自治』480 pp. 58～61
- 塚田良道・太田博之「埼玉県の円墳」『古代学研究』123 古代学研究会 pp. 122～125
- 坂本和俊「関東」『古墳時代の研究』11 地域の古墳II 東日本 雄山閣 pp. 79～98
- 「史跡埼玉古墳群保存修理事業—瓦塚古墳—」『資料館報』No20・21 pp. 19～22
- 黒田達也『古代の天皇と系譜』校倉書房 pp. 132～135
- 『古墳の年代をはかる』（展示解説）埼玉県立さきたま資料館
- 岩崎卓也『古墳の時代』教育社歴史新書〈日本史〉46
- 『季刊考古学』33
- ・若松良一「埼玉県將軍山古墳の馬冑」pp. 60～61
 - ・時雨彰「画文帶神獸鏡の系譜」pp. 66～67
 - ・中村潤子「日本と朝鮮半島の金工品」pp. 76～80
- 鎌田元一「天皇号・国号の成立」『別冊文藝・天皇制 歴史・王權・大嘗祭』河出書房新社 pp. 50～55
- 杉崎茂樹「北武藏域における前方後円墳の消滅について」『前方後円墳の消滅 畿内政権の東国支配を探る』新人物往来社 pp. 23～54
- 篠川賢「部民制とは何か」『争点日本の歴史』2 古代編I 新人物往来社 pp. 168～183
- 小野山節「古墳時代の馬具」『日本馬具大鑑』1 古代上 日本中央競馬会 pp. 1～32

〈1991（平成3）年〉

- 駒宮史朗「埼玉古墳群の終焉はいつか」『埼玉自治』487 埼玉県自治研究会 pp. 56～59
- 鬼頭清明「ヤマト王權と伽耶諸國」『伽耶はなぜほろんだか』日本古代国家形成史の再検討 大和書房 pp. 56～59
- 松中由美子・清水眞一・菅谷文則「〈シンポジウム 円墳〉の報告」『古代学研究』124 pp. 44～47
- 〈資料紹介〉若松良一「埼玉將軍山古墳出土の馬冑」『調査研究報告』4 pp. 1～12
- 上田正昭「倭の五王とその時代」『謎の五世紀』学生社 pp. 45～76
- 船山政志・塚田良道「小針鎧塚古墳の桂甲」『行田市郷土資料館研究報告』2 pp. 1～30
- 『関東の考古学』学生社
- ・若松良一「古墳文化と埴輪」pp. 151～205
 - ・村井嵩雄「古墳時代の武具と馬具」pp. 206～243
- 大平聰「古代の『皇位繼承』」『歴史評論』493 pp. 16～22
- 大塚初重「稻荷山鉄劍銘文から何が読みとれるか?」『驚異への旅 古代日本七つの謎』文藝春秋 pp. 106～113
- 『古代探叢』III 早稲田大学考古学会創立30周年記念考古学論集 早稲田大学出版部
- ・杉崎茂樹「古墳時代の北武藏における有力首長層の動態」pp. 379～405
 - ・吉川国男「中原高句麗碑と辛亥銘鉄劍」pp. 407～424
 - ・大久保奈奈「金銀装の簪」pp. 425～447
- 『古代の日本と東アジア』小学館
- ・上田正昭「古代史と辛亥銘鉄劍」『古代の日本と東アジア』小学館 pp. 11～24 (1988 日本考古学協会研究大会 記念講演「辛亥銘鉄劍と古代史」の要旨を補完)
- 石渡信一郎『蘇我馬子は天皇だった』三一書房 pp. 83～95
- 岸俊男「問題がひそむ『万葉集』の用事法」『古代史からみた万葉集』学生社 pp. 200～236
- 武光誠「日本誕生」古代國家「大和」とまつわぬ者たちの物語 文藝春秋 p. 173
- 『埼玉考古学論集—設立10周年記念論文集—』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- ・関義則「逆刺独立三角・柳葉形鉄鎌の象徴とその意義」pp. 683～709
 - ・大谷徹「北武藏出土の銅鏡」pp. 779～800
 - ・増田逸朗「埼玉政権の法量的分析」pp. 821～843
 - ・山本禎「埼玉県における後期古墳の様相」pp. 845～860
- 上田正昭「日本の神話を考える」小学館 pp. 28～31
- 黒岩重吾「畿内王權と倭の五王」『古代浪漫紀行 邪馬台国から大和王權への道』勁文社 pp. 153～192
- 吉村武彦「古代王權の展開」日本の歴史3 集英社 pp. 43～48
- 『資料館報』No22
- ・「埼玉古墳群に関する調査」p. 9
 - ・「史跡埼玉古墳群保存修理事業—瓦塚古墳—」pp. 14～16

- ・「二子山古墳の整備に伴う確認調査事業」 pp. 17~18
- 金井塚良一『人物埴輪を語る』さきたま出版会
- 塚田良道「海をわたってきた文化・解説」『朝鮮半島から武藏へ海をわたってきた文化』行田市郷土資料館 pp. 45~61
- 福宿孝夫「稻荷山古墳鉄劍銘と江田船山大刀銘」『日本古器銘と好太王碑文』中国書店 pp. 154~184
- 塚口義信「“原帝紀”成立の思想的背景——「帝紀」「旧辞」論序説——」「ヒストリア」133 大阪歴史学会 pp. 105~128

- <1992(平成4)年>**
- 若松良一「埴輪の種類と編年——人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』9 雄山閣 pp. 108~150
- 田中広明「武藏地域の鬼高式土器—古墳出土の食膳具の示す地域圈——」『月刊考古学ジャーナル』342 pp. 2~6
- 『さきたまの古墳』埼玉県立さきたま資料館展示ガイド』埼玉県立さきたま資料館
- 『調査研究報告』5
 - ・若松良一「〈資料紹介〉埼玉稻荷山古墳中堤発見の朝顔形円筒埴輪」pp. 1~2
 - ・若松良一・日高慎「形象埴輪の配置と復原される葬送儀礼(上)——埼玉瓦塚古墳の場合を中心に——」pp. 3~20
- 鬼頭清明「ワカタケル大王の斯鬼宮——宮の説話と金石文」『新版古代の日本』5 近畿Ⅰ pp. 295~296
- 市毛勲「人物埴輪顔面のヘラガキについて」『考古学雑誌』77~4 pp. 1~16
- 若松良一他『埼玉古墳群発掘調査報告書 第8集 二子山古墳・瓦塚古墳』
- 『国立立歴史民俗資料館研究報告』44 東国における古墳の終末
 - ・白石太一郎「関東の後期大型前方後円墳」pp. 21~51
 - ・杉崎茂樹「北武藏における古墳時代後・終末期の諸様相」pp. 285~327
- 『シンポジウム・東アジアの再発見 謎の五世紀を探る』読売新聞社
 - ・江上波夫「日本古代の騎馬民族国家」pp. 9~47 (1992『江上波夫の日本古代史』pp. 275~300に加筆採録)
 - ・王仲殊「倭の五王をめぐって」pp. 145~157
- 江上波夫・森浩一「特別対談「舟に乗った騎馬民族」が見えてきた」『月刊Asahi』4~3 pp. 128~135 (1992『江上波夫の日本古代史』に加筆採録)
- 森浩一・網野善彦『馬・船・常民 東西交流の日本列島史』河合出版 pp. 244~245
- 直木孝次郎・足利健亮・都出比呂志・中尾芳治・和田萃『河内政権論をめぐって』『大阪の歴史』大阪市史編纂所 pp. 1~59
- 水野祐監修「ワカタケルではない! 稲荷山鉄劍の贈与人」『逆説の日本古代史』KKベストセラーズ pp. 148~149
- 辰巳弘「日本古代の顔面装飾とその系譜」「冥界への旅——「人物の窟」壁画にみる古代精神」『埴輪と絵画の古代学』白水社 pp. 81~124、pp. 161~216
- 「史跡埼玉古墳群保存修理事業——將軍山古墳——」『資料館報』No23 pp. 14~18
- 『図説埼玉県の歴史』河出書房新社
 - ・塙野博「北武藏の古墳」pp. 63~76
 - ・柳田敏司「辛亥銘鉄劍が語るもの」pp. 77~81
 - ・原島礼二「伝承のなかの古代東国」pp. 83~87
- 本位田菊士「天皇号の成立とアジア」『アジアの中の日本史』II 外交と戦争 東京大学出版会 pp. 63~91
- 金元龍・李基白・韓炳三・大塚初重・井上秀雄・上田正昭・西谷正『シンポジウム 日韓古代史の謎』朝日新聞社 pp. 132~141
- 『月刊考古学ジャーナル』349
 - ・金井塚良一「東国と渡来文化」pp. 2~3
 - ・塚田良道・新井端「人物埴輪と大陸文化」pp. 15~19
 - ・若松良一「埼玉將軍山古墳と渡航文化 馬冑・蛇行状鉄器・銅鏡・横穴式石室をめぐって——」pp. 20~28
 - ・吉川國男「埼玉稻荷山古墳鉄劍銘と中原高句麗碑」pp. 29~31
- 若松良一「再生の祀りと人物埴輪——埴輪群像は殯を再現している——」『東アジアの古代文化』72 pp. 139~15
- 塚田良道「東国の伽耶文化」『月刊考古学ジャーナル』350 pp. 15~18
- 『月刊しにか』特集 漢字が入ってきたころ 大修館書店
 - ・和田萃・森博達・木田章義「鼎談『漢字が入ってきたころ』pp. 8~16
 - ・犬飼隆「漢字が入ってきたころの日本語と漢字の受容」pp. 31~36
 - ・毛利正守「漢字受容期の資料をめぐって」pp. 44~54
- 『新版古代の日本』8 関東 角川書店
 - ・小林三郎「関東の古墳と地域首長の成立」pp. 117~148
 - ・杉山普作「有銘鉄劍にみる東国豪族とヤマト王権」pp. 149~179
- 『さきたま將軍山古墳と銅鏡』(展示解説)埼玉県立さきたま資料館
- 森田悌「稻荷山鉄劍の世界」『古代東国と大和政権』新人物往来社 pp. 15~49
- 橋本博文「相武の古墳」『季刊考古学』別冊3 東国の古墳 pp. 68~80
- 東野治之「銘文から何がわかるか——稻荷山鉄劍を例に」『見る・読む・わかる 日本の歴史』1 原始・古代朝日新聞社 pp. 50~51
- 『古墳と地方王権』新人物往来社
 - ・小林三郎「古墳、その時代と文化」pp. 9~46
 - ・梅沢重昭「毛野国の形成と前方後方墳」pp. 85~126
- 大塚初重「古墳文化と渡来人の役割」『巨大古墳と伽耶文化——“空白”的四世紀・五世紀を探る——』角川選書 235 pp. 50~68

* 文献は可能な限り網羅したが、脱稿が少なからずあると思われる。IIにおいて今回除いた新聞・週刊誌・古文書・古記録等と併せて補完する予定である。目録作成にあたっては多くの方に御協力を賜った。特に利根川章彦氏には多数の文献を紹介していただいた。末筆ながら感謝いたします。

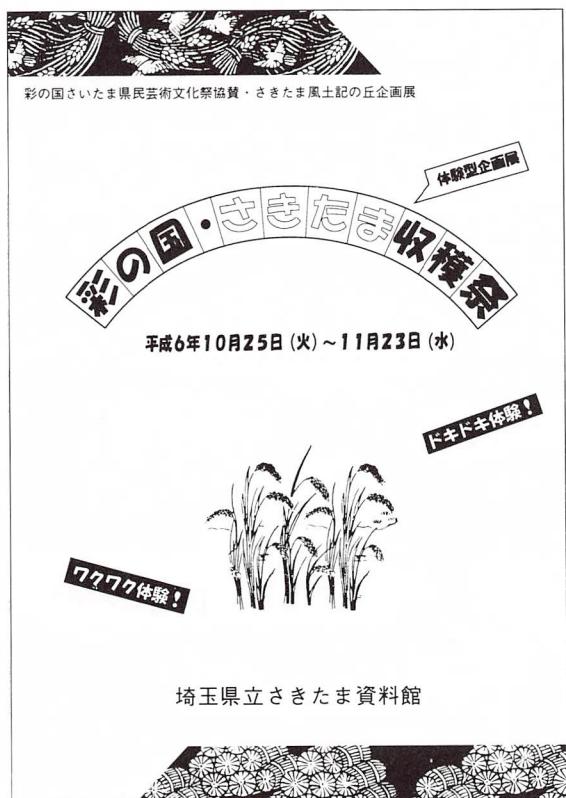
「体験型企画展」開催の試み

田 中 裕 子

1 開催にあたって

当館では、昨年の秋に企画展「彩の国・さきたま収穫祭」を開催した。これは、従来の展示によって構成する企画展ではなく、県民に積極的に参加してもらう体験学習中心の「体験型企画展」である。近年、「自分でなんでも経験してみたい」という一般県民からの希望が高まってきていることをうけて、これまででも、各博物館施設では体験学習を多く取り入れた事業を実施してきている。しかし、会期中毎日体験学習を連続して行う企画展というのは、おそらく今回が初めての試みであろう。テーマは、このところ何かと話題の「米」の収穫作業に関するものにした。米騒動に明け暮れた昨年とはうってかわって、今年は豊作となつたが、この2年間で米そのものに対する関心はかなり高まつたのではないだろうか。

現代の収穫作業を昔と比べれば、刈り取りから袋詰めまで機械の力を借りて手早くこなすことができる。かつては、稲刈り・穂すり・脱穀などの収穫作業で秋は忙しい毎日が続いたものだという。その当時使用されていた農具が、当館で所蔵している「北武藏の農具」である。



リーフレット表紙

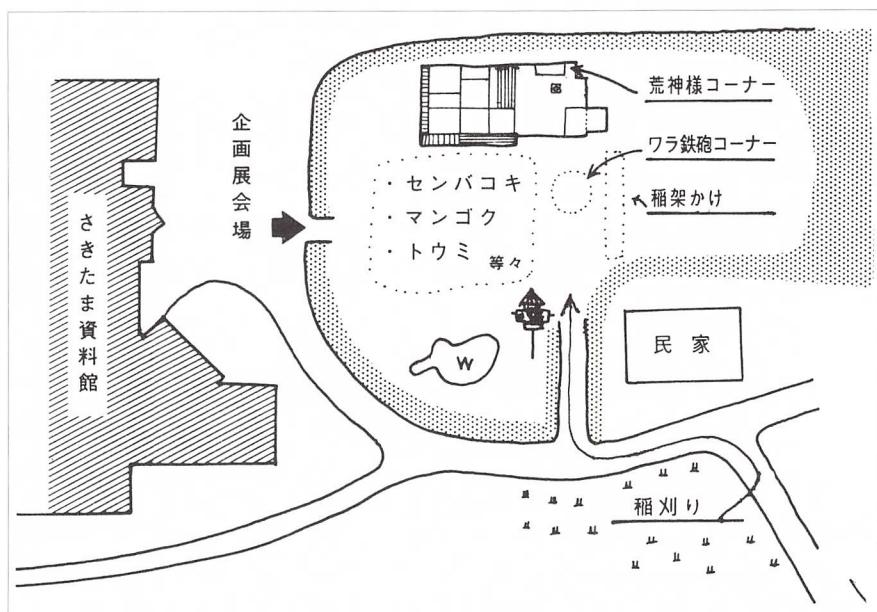
この「北武藏の農具」は、水田用具や畑作用具を体系的に収集したコレクションで、1640点で一括して国の重要有形民俗文化財に指定されているものである。こうした貴重な資料を長く保存し、後世に残していくことが博物館施設の大切な役割のひとつであるが、ただ保存するだけではなかなか文化財に対する理解は得られないものである。こんなときは、普及活動用に収集した登録外の資料を活用して「北武藏の農具」に対する理解をさらに深めてもらうことも有意義であろう。

そこで、今回の企画展では、機械化が進むにつれて消滅していった農作業を体験することによって、私たちの主食であり騒動の中心となった「米」がどのような作業を経て食卓に並ぶのか、実体験を通して理解してもらい、あわせて当館の収蔵資料についても理解を深めてもらおうという企画で開催を試みたわけである。

2 どのような体験学習を実施したのか

この企画展の会期は、平成6年10月25日（火）から11月23日（水）であった。この30日間で、休館日4日間を除く26日間すべてで、なんらかの体験学習を連日行い、稲刈りや小豆粥を食べる会は期日を決めて特定の日に実施した。雨天のため屋外の体験学習を終日中止にせざるをえなかったのは、2日間だけであった。

会場は、当館の敷地内にある移築民家旧遠藤家とした。同家屋は、傷みもあり座敷内に人を上がらせることができないので、デイは縁側からの利用とした。使用したのは、デイ、板の間、土間、シタザシキ、庭である。いわゆる展示室などを会場にするのとは違って、農具を並べた民家は、



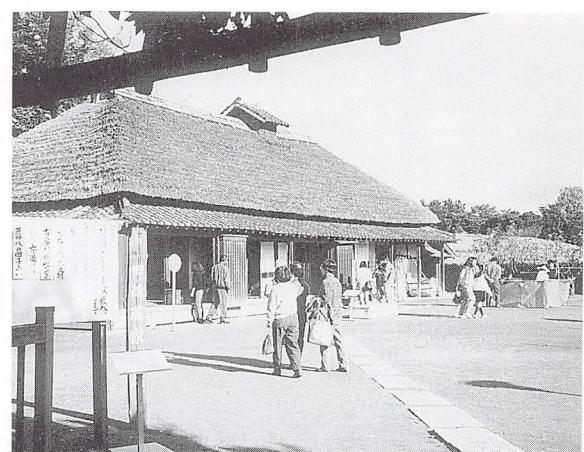
企画展会場略図

独特の雰囲気を醸し出し、本来の生活臭さを取り戻したようで生き生きとしてきた。

さらに、会場の入り口付近の垣根には開催を知らせる横断幕を張り、庭にデザイン化したディスプレイ用の案山子を立て、各コーナーを表示するパネル、稻架などを作った。稻架には、事前に刈り取った稲を架けておいたので、ディスプレイ効果はさらに高まった。屋内は暗がり部分が多いのでライティングをし、パネル等を多く展示することで、人が入りやすい空間となるように努めた。こうして、準備が整った民家は「収穫祭」らしい賑わいを感じさせるものがあった。



開催を知らせる横断幕



会場となった旧遠藤家

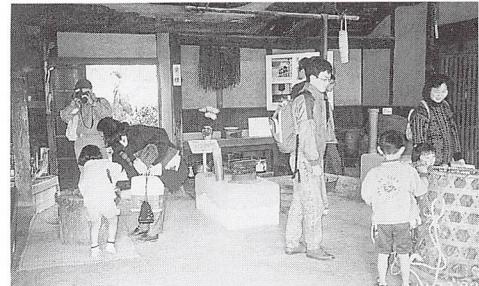


ディスプレイ用案山子



稻 架

民家内土間の様子



実施した作業は、以下のとおりである。日程は表1に示した。しかし、この日程はあくまで予定であり、その日の天候等によって実施項目が変更になるので、毎朝会場入り口に設置した掲示板に「今日の体験学習」を明示しておいた。

いろいろな農作業を体験しよう

- 1 鎌を使った稲刈り
- 2 千歯扱き・足踏み脱穀機を使った脱穀
- 3 粕干し
- 4 唐箕を使った選別
- 5 万石どおしを使った選別
- 6 大師講の小豆粥を食べる
- 7 一升瓶や一升枡・斗桶を使っての計量
- 8 ショイカゴを背負う
- 9 荒神様の団子占い
- 10 藁打ち・縄ない
- 11 野良着の着用
- 12 十日夜の藁鉄砲叩き
- 13 精穀にさわる
- 14 藤山で遊ぶ



会場入口の掲示板

*収穫のすべての工程が体験できればよかつたが、唐臼は使用できる資料の該当がなく、この工程はやむなく省くことにした。

農作業の大部分は、屋外で行うものだが、今回の企画展では、雨天時のことを考慮して屋内で行えるものも加えて充実させた。それらは、一升瓶などを使った計量コーナーや荒神様の団子占い・藁打ち・縄ないなどである。こうすることで、屋外での体験学習が中止になってしまっても、来館者が屋内でなんらかの作業を体験できるように配慮したのである。

体験学習への参加は自由で、事前申込みなどは行わなかった。というのも、もともと、特定の日に人数を制限して行う体験学習（例えば稻刈り）が少なかったことや、いつでも複数の体験項目を用意していたので、とくに申込みを受ける必要がなかったのである。事前申込みは、人の整理をしやすい反面、当日事業を知らずに会場に訪れた人を受け付けないという排除性も持ち合わせている。こういうことがないように、会場に来た人は、だれでも気軽に参加できるようにした。

基本的には、会館時間中会場を開放しているわけだが、平日の入館者の大部分は、遠足で訪れる小学生たちであるため、連日10:00から15:00くらいまでの間に集中して事業を行った。それ以降は、脱穀した粗米を藁などから選り分ける作業や農具類を土間に収納する作業等の時間にあてた。

〈体験学習の日程〉		文化の日	第二土曜	県民の日	勤労感謝の日
	10/25(火)	30(日) 11/1(火) 3(木)	6(日) 12(土)	13(日) 14(月)	20(日) 23(水)
期間限定の事業 (雨天延期あり)		稲刈り (第1回) 稲架かけ センバ コキ・足踏み脱穀機を使った脱穀作業 粗干し	稲刈り (第2回) 稲架かけ 粗干し		
毎日実施する事業 (休館日除く)	雨天も実施	斗柵や 野良着を着てみよう 荒神様の 団子占いコーナー	斗桶で計量してみよう ショイカゴを背負ってみる ワラウチ・繩ない		
	雨天中止	十日夜のワラデッポウ	叩き ワラ山で遊ぼう 粗穀で遊ぼう		

3 個々の学習の記録

1 〈鎌を使った稻刈り〉

鎌を使って稻を刈る感触を体験してもらい、小規模ながら収穫の苦勞と喜びを体験してもらう。稻刈りには、回ごとに30人ほどの参加者があった。ふつうのハガマと稻刈り専用のノコギリガマの切れ味の違いを試してもらう。本来の作業量は「1人で1日1反」である。その2/10の面積を30人でかかったのだから、計算上は、本来の1/150の作業量ということか。前日の雨で田がぬかっていたのでドロドロになりながら、お米はこうして刈り取るのかという感動も新たに、「面白い」「疲れた」という声が交互に聞かれた。刈り取りの後は、束ねる方法を学習する。刈り取りは、ザクッザクッと小気味良い音を立てて軽快だが、束ねるのには参加者一同てこづったようである。それでも藁でギュッと締め付けるコツを覚えると段々に手際が良くなってきた。稻束を満載したりヤカー

は、こどもたちが喜んで引いてくれた。会場へ戻り、稲架かけまでやってもらう。一段落して、米を収穫する苦労が少しあつたかと思つてゐるところに、稻束を振り回している子が現われる。本当の学習には、なかなかなりえないのである。

今回は、稻刈り自体の体験とは別に、普段入ったことの無い水田に足を踏み入れる感動、切り株を踏む感触もまた思いがけない良い経験だったようだ。また、こどもたちはそこかしこで跳ねるカエル捕りに興じた。



稻刈りを楽しむ家族連れ

2 〈千歯扱き・足踏み脱穀機を使った脱穀〉

稻からどうやって粒米の粒を取るのか、この脱穀作業を千歯扱きと足踏み脱穀機（ガーコン）を使って体験してもらう。

こどもたちは、稻に米がなる（？）ことは漠然と知っていても、实物を見たことが無いので脱穀に対する具体的な知識が無かったようだ。

ガーコンは、動き始めるとその音が人を引き付けてくれる。こどもたちは、最初戸惑いながら、働きかけると喜んで参加する。遠足の場合、クラスを代表して何人かに体験してもらう。ペダルを踏んで「ガーコン、ガーコン」という音がしだすまで、周囲はじっと見守り、脱穀が始まるとワーッと歓声が上がる。勢いよく飛んでくる粒米を帽子で受けとめたり大喜びである。

そこで、脱穀した粒米を渡して「その中にみんなが食べているお米が入っているんだよ。」と教え



ガーコンを使った脱穀

てあげると、驚いてその場で殻を剥いて中の米を確かめてみる子がたくさんいた。

センバコキは、ガーコンのように大きな音がないし、大束では脱穀しにくいので小束にするため迫力がないので、ガーコンほど人気がなかった。それでも、パラパラッと米粒が脱穀されると感嘆の声が上がり、使用方法は理解してもらえたものと思う。



センバコキを使った脱穀

3 〈糲干し〉

脱穀した後の糲米を^{ひらひ}に広げて、天日に当てて干す作業を体験してもらう。

糲干しは、糲を小判形に広げるのが難しくまた地味な作業なので、積極的に参加する人が少なかった。ホシモノヒロゲという道具自体も知られていないので関心の度合いも今ひとつであった。

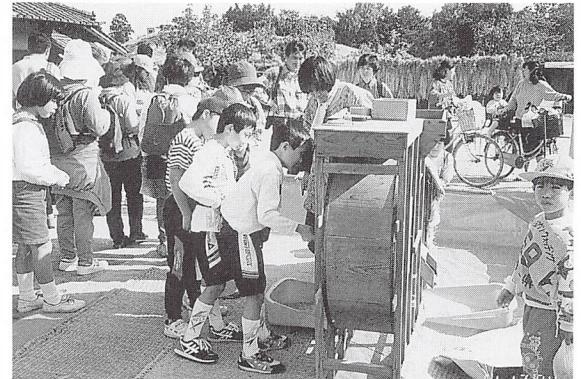
4 〈唐箕を使った選別〉

風力によって玄米と糲殼等を選別する作業を体験してもらう。

唐箕は、残存率も高くよく見かけるせいか「知られている農具」のひとつといえよう。だが、使用方法は、ほとんどの人が知らなかったようだ。

学習に際しては、まず風を起こす機構を紹介し、その後で玄米と糲殼の混ざった状態のものを見せ、この糲殼を風で吹き飛ばすことを説明した上で、実際に選別を行う。簡単な仕組みであるのにゴミ等などが選別できるのを見て、こどもたちは一様に驚いていた。「すごい」「面白い」「よく考えついたなあ」などの感想が聞かれた。

体験方法は把手を回すだけなので、多人数でも簡単に実施できるが、自分の目の届かないところに糲殼が飛んでいるので、その分自分で選別しているのだという実感が脱穀作業の時ほどなかったようだ。しかし、自分が手を休めてしまうと、選別が滞ることは実感し、白い米粒になるまでの苦労の一端を知つてもらえたようだ。唐箕を体験してから糲殼を触ると効果的であった。



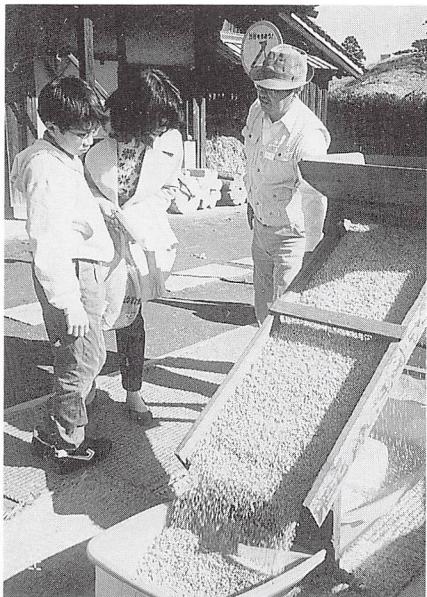
唐箕を使った選別

5 〈万石どおしを使った選別〉

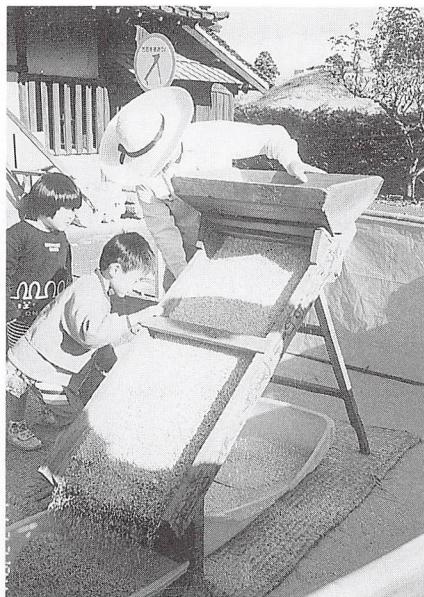
万石どおしの斜面を使って、玄米と糲米等を選別する作業を体験してもらう。

万石どおしも、滑り台のような形をしているので展示室等でも良く目につく農具といえよう。

玄米と糲米の混ざったものを漏斗状の口にいれて、止め木を外すと、茶色と白色の混濁した穀物が網目上をザーッと滑り落ちて、みるとみるうちに選別されていく。糲米は殻があって少し大きいた



万石どおしの選別



同 左 業は見るのは初めてだ

という人が大部分で、大きな反響があった。とくに、穀物が一気に滑り落ちる時に歓声が上がった。唐箕の場合と同様に、選別作業の大変さがその一端でも理解してもらえたのではないだろうか。

6 〈大師講の小豆粥を食べる〉

大師講の儀礼食である小豆粥を食べてもらう。

大師講は、旧暦の11月の4のつく日に行われる予祝行事である。現在の11月14日では暦が異なるので現密には期日が違うのだが、この日が埼玉県民の日にあたっていることもあって実施した。企画展全体の構成をみても、収穫を願った食を伴う行事を会期中に紹介したかったからである。

当日は悪天候もあって、11時頃まで会場にはほとんど来館者がいなかったのだが、お粥を配りはじめるとどこからともなく人が集まり、5合の粥は15分ほどで無くなってしまった。「食」に対する執着心をみる思いであった。結局、100人以上の人気が小豆粥を食した。

粥と一緒に「稻の花を吹き飛ばすことになるので、どんなに粥が熱くても吹いて食べてはいけない」との本来のいわれを記したリーフレットを配ったが、思いのほか気温が低く、お粥が冷めてしまった。熱々の粥が用意できなかったのは残念であった。(粥は担当者が炊いた)

「小豆が入っているのに塩味なのに驚いた。」



小豆粥をたべる

めに下まで滑り落ちるか網上に留まるかし、玄米だけが網の目をくぐりぬけて落下するからである。

この作業を体験してもらい、単純な仕組みで、当時としては効率良く選別が行われてきたことや、白い米粒になるまでの苦労を実感してもらった。この作

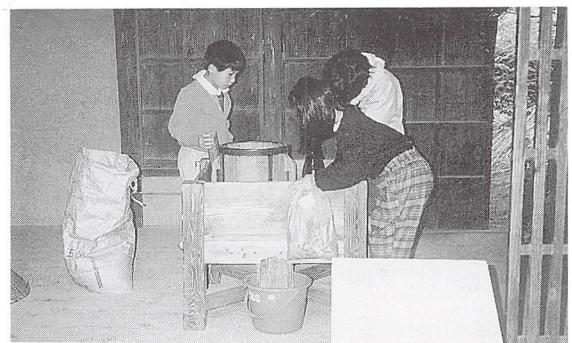
「昔、食べたことがあるので懐かしい。」「おいしい。」と好評であった。「小正月の小豆粥を思いだした。」という方もいて、懐かしい味覚の体験学習となつた。

7 〈一升瓶や一升枊・斗桶を使っての計量〉

一升の10倍が一斗であることや、「すりきりいっぱい」の計量方法を屑米を使って体験してもらつた。

瓶と枊は、容積が同じでも見た目に違いがあるようだ、1升瓶よりも1升枊の方がたくさん入るのではないかという意見が多かった。そこで、実際に計量を行つてみて同量であることを確認させた。地味ではあるが、実験気分で体験学習ができている。グループで取り組む場合が多かった。

屑米をさわってザーッと計ったりこぼしたりできるコーナーは、石臼の台を利用したので、下のバケツに溢して取ることもでき、砂遊び感覚で幼児に大人気であった。長時間、ここから離れずに飽きることなく楽しんでいた。その際、屑米とはいへ粗末に扱わないように留意した。



子どもに人気の計量コーナー

8 〈ショイカゴを背負う〉

桑の葉の運搬用に使用された大型のかごの背負い方を体験してもらつた。

土間の中央に置いたせいか、次々と気軽に背負う姿がみられた。中に、稻束をいれて重量感を持たせたので案外と重く、背負うのにこつが必要だったようだ。収穫物と運搬の必然性について話す機会とした。

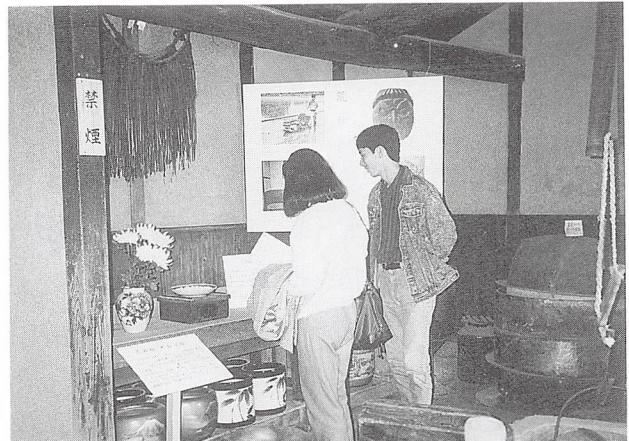
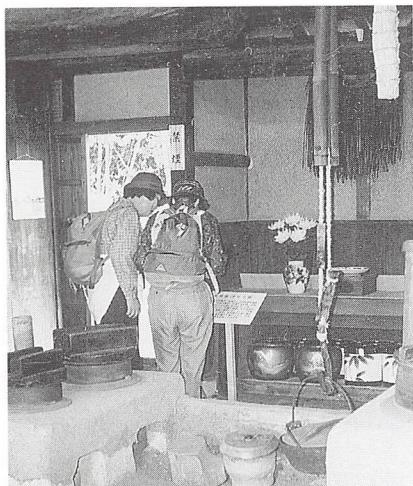


気軽にカゴを背負う

9 〈荒神様の団子占い〉

カマドの神様で作神としての性格を持つ荒神様を紹介した。

ちょうどこの時期に、荒神様が縁談話のため出雲に出かけることを紹介し、これが作物だけでなく子孫繁栄の願いを込めたものであることも示した。団子占いとは、実際の行事の際に団子が転がった方角に良縁があるという事例をもとにディスプレイ用の団子を用意したものである。会場では、実際に頭上に団子を載せて転がす人もみうけられた。「神無月に出雲に行くのは知らなかつた。」「縁談と関係があるのは知らなかつた。」等多くの人にかまどの神様に対する認識を広められた。



荒神様の団子占いコーナー

10 <藁打ち・縄ない>

藁を打ち、縄をなう作業を体験してもらいう。

藁は、さまざまな身の回りの用品を作り上げる素材であった。これは、冬の農閑期の作業であるが、縄をなうという基本的で単純な技術を多くの人に知ってもらおうと取り上げた。

藁打ちの体験学習では持続性がなく、叩いた藁で縄をなう人は少なかったが、家族連れなどがグループで楽しむ姿が多く見られた。晴天であれば、体験学習の主役は脱穀などであるが、雨天の場合も、縄ないや計量コーナーに人気が集まった。縄をなうということは、自分の手を擦りあわせるだけで、藁が縄に変わっていく。この時の感触とスピードが魅力なのかも知れない。



藁打ちに挑戦

11 <野良着の着用>

野良着を着て、農作業時の服装を体験してもらう。

予想では「野良着は古くさい」とこどもたちには敬遠されると思っていたが、意外と希望者が多かった。学校の中で1人の生徒が着てみると次々に手が伸びて可愛い支度ができあがった。初めのきっかけが大切で、時間をかけて着用すると楽しめるようだ。服の上から着ても良いという簡便さも功を奏した。記念写真を撮っている学校もあり、「あったかい」「その気になれる」「このまま学校に通いたい」等の感想が聞かれた。



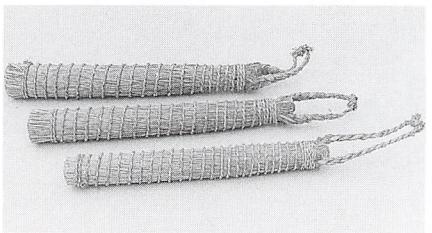
野良着姿でポーズ

大人で着てみる人は少なかったが、手に取って絹の味わいなどを手の感触で確かめていた。現代でも絹は斬新なデザインとして充分受け入れられるという感を強くした。

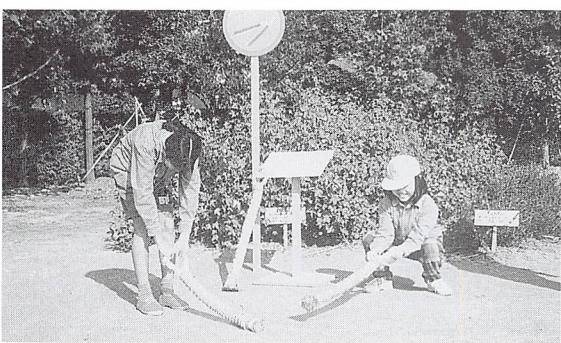
12 〈十日夜の藁鉄砲叩き〉

旧暦10月10日に行う十日夜の行事を紹介し、藁鉄砲で地面を叩く壮快さを体験してもらう。

予め、十日夜の囃子唄を新たに録音して準備し、会期中会場で流した。やはり、音が人を引き寄せる効果は大きいようである。



当初は、こどもたち5人ほどが輪になって藁鉄砲を叩いてくれることを期待していたが、叩き方が下手な上に扱いが乱暴なので、揃うより前に藁鉄砲自体が壊滅状態となってしまった。本来は一晩だけの行事なので壊れても仕方がないが、



自分たちで作ったものではないので愛着心がなく粗雑に扱うことになったのではないだろうか。反対に60~70才代の人は、藁鉄砲を懐かしそうに抱えて見る人が多かった。それだけに叩き方も堂にいったもので、何人かで昔を思い出して叩き合いを楽しんでいた。「懐かしい。」という声が圧倒的で「スカッとする。」という感想も聞かれた。

藁鉄砲とこどもたち

13 〈穀殻にさわる〉

玄米を包んでいた穀殼の感触を体験してもらう。

かつては梱包用の詰物材等として利用されていた穀殼も、今は知っている子がほとんどいない。そこで、大型の木箱に穀殼を入れてその感触を楽しんでもらった。穀殼はチクチクして気嫌いされると思ったが、意外と「柔らかくて気持ちいい。」「あたたかい。」という感想が多かった。持ち帰りたいという子もたくさんいた。こどもの興味をそぞろと穀殼の中にスーパー ボールをしのばせてみたが、団体の場合激しい争奪戦になるので、その後ボールをプレゼントする対象を幼児に絞った。そのためこのコーナーも幼児に大人気となった。近くに住むこどもは会期中何度も繰返し遊びに来



穀殼にさわってみる



同 左

てくれた。たとえスーパーボールが目当てであったとしても何度も来てくれることは主催者として嬉しいことである。当初、穀殻を触ることでアレルギーを起す子どもがいるのではないかと心配したが、注意を呼びかける掲示板を用意したためか、幸いにもそうした事態にはならなかった。

14 〈藁山で遊ぶ〉

今のこととは、藁を知らない。そこで藁束で山を作り自由な遊びを体験してもらう。

はじめは、小屋や山を作るなどの遊びを期待していたが、大体の子どもは藁で叩き合いをするだけであった。そんな中で、藁山に座りこんで縄ないを始める人がいて、その年配の人を中心に子どもが集まり、やがて自然発的に30人程が縄ない・草履作り・藁人形作りを始めた。藁山に恐々と寝転んでいた子どもたちも藁の感触を楽しんでいた。

「体験学習」も構えのないこうした「遊び」の空間も大切だと感じた。



藁山で遊ぶこどもたち

4 実施上の問題点と工夫点

今回の企画展では、収穫作業を作業ごとに分けて、会期を通していろいろな工程を体験できるようにした。これは、作業を指導する係員の不足から同時にいくつもの体験学習を組めなかつたことと、100人以上の団体が一斉に会場に入ることが多いので、その注意をなるべく集中させたかったからである。このような理由から、一連の収穫作業を1日のうちにすべて体験できるとか、各工程を連動させることができなかなかできなかつた。連動は唐箕と万石どおしの工程だけにとどまり、また唐臼の作業を実施できなかつたことも残念であった。

「どうやって穀殻をとるのか」「その時どんな農具を使うのか」疑問を持つ人が多数いたので、こうした場合、リーフレットを参照してもらい、さらに館内で唐臼の实物資料を見てもらうように勧

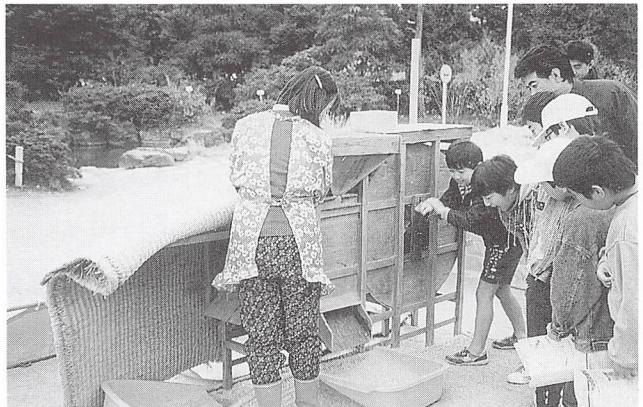
めた。こうすることで、図らずも民俗展示室と会場を結び付けることができたようだ。

つぎに、農具を動かすためには穀物（米）を用意しておく必要があった。そこで、当館近くの農家に協力してもらい、収穫できるまでになった稻を2畝分譲ってもらうことにした。この豊富な稻のおかげで、稻刈りも体験でき、その後の農作業も順調に実施することができたのである。ただし、稻刈り・稻架かけ・脱穀・糲干しまでは、工程通りであるが前述したように唐臼を使った工程が体験できなかったので、その後の唐箕や万石どおしの工程では半ば精米した米と糲殻を混ぜるなどして専用のブレンド米を用意して使用した。そのうえで、何十年も放置されていた農具を正しく動くように調整した。極力傷みの少ない資料を選んだが、長期間の使用に果して堪えられるかどうか。今回は未登録の資料を使用したが、保存していくべき博物館資料をどこまで活用して良いものか、今後の課題である。

また、体験学習中心ということで、事故のないように留意した。稻刈り用の鎌の刃の切っ先を予めテープで貼ったり、脱穀作業でガーコンに手を引き込まれることのないように特に注意を払った。かといって危険を理由に体験者を限定することではなく、能力に合わせて体験を楽しんでもらえるよう心掛けた。加減ができるというのも、手作業ならではの利点であろう。

さらに、親しみやすい雰囲気を作るために、担当の係員は自ら野良着姿で事業に臨んだ。「収穫祭」のコンパニオン（？）である。もんぺは活動しやすく保温力も優れているので快適であったが、学芸員らしさは欠如していたかもしれない。また、看板よりもアピール度の高い横断幕を張って会場を示したり、掲示板には毎日実施する事業を揭示するなどの工夫をした。無料配布したリーフレットには、稻刈りから精米までの工程をイラストをはじめて紹介し、なるべく平易な文章で読みやすい記述を心掛けた。

最後に、会場を屋外にしたことでは、天候が悪い場合には来館者が減少するだけではなく、事業そのものにも影響がでてしまうということがあった。例えば、晴天であっても強風の日には穀物が飛散するので、事業を中断せざるを得なかった。こういうことを考慮すると、屋内の方がコンスタントに事業を実施しやすいといえよう。しかし、今回の企画展にふさわしい雰囲気を整えたり、存分に穀物を広げられる等の点では屋外会場に利点がある。実際のところ、屋外の体験学習を終日中止にしたのは2日間だけであり、「天気まかせ」でもそれなりに楽しむことができたといえるかもしれない。



係員がついて指導をする

5 むすびとして

体験型企画展を終了して強く感じたことは、「百聞は一見に如かず」どころではなく、「見る」だけよりも「体験する」ことの学習効果が非常に大きいということである。このことを今さらながら改めて感じた。先生の中には、「体験は子どもたちにとっても楽しみであり、毎年このような事業があるといいのだが。」という意見の人もいたが、なによりも「資料館の中で、民家が一番楽しかった。」と屈託の無い笑顔で話してくれた小学生の言葉を嬉しく受けとめた。

一般の方々からも、一連の収穫作業・各工程の手順等についてたくさんの質問を受けた。そのときに近くに農業経験者がいれば、その経験談に耳を傾けて楽しんだ。こうしたことで、地域による作業の違いや伝承の違いが明らかになって驚く人も多く、「ウチのほうではこうだった。」「ウチのほうではこうしたもんだ。」と話が弾んで、有意義な空間を作ることができたようだ。当初は、まったく農作業の経験の無い人を対象として想定していた企画であったが、かつて農業に従事していた人も取り込んで、多くの人に良い体験をする機会を提供できたと思う。

私自身にとっても今回初めて体験する農作業がほとんどで、担当者として多くの貴重な体験をすることができた。各農具の仕組みに感心させられることはもとより、ことに稲刈りや選別作業の大変さは身にしみてわかったことである。やはり、学芸員にとっても「体験」は大切なことであった。農具の形だけを継承するのではなく、体験したことを活かして先人の工夫や知恵等を伝えていきたいものである。また、体験学習だからといって大上段に構える必要はないのだということも痛切に感じた。野良着を着たり、穀殻に触ったり、単純なものでも取組み方で充分な学習効果を上げることができるるのである。

つぎに強く感じたのは、民家や稻架・農具類を見て「懐かしい」という人が本当に大勢いるということである。「懐かしい思い出」があるのは、自らの作業体験で苦労をしたからこそであろう。長い年月を経ても憶えているのは、電子機械とは違う、人力による道具や機械仕掛けのなせる業であろうか。現在の農作業の飛躍的な進歩は望ましいものだが、果してコンバインの収穫作業を懐かしく思う時代が来るのだろうか。「辛い作業だったから、もうやりたくない。」という人もいたなかで、「懐かしい思い出」については考えさせられた。

博物館でも民俗部門には、生きた思い出がまだまだ封じ込められているのだ。でも、こういう民俗資料を懐かしいと感じない世代がどんどん増えていることも事実である。時が過ぎていくなかで、「人の想い」をどういう風に継承していったらよいのだろうか。

もうひとつ強く感じたのは学校対応からである。遠足で訪れた学校の中には、事前に情報を得て体験学習を楽しみに来てくれる人もあったが、なかには「体験学習」にまったく関心を示さない先生が少なからずいたことには驚かされた。反応がないのである。先生が興味を示すと生徒もそれにつられるように次々と体験学習を始めるものだ。また、参加することもたちも、多くは無言で農具の前に立ち、体験を済ませるとさっさと無言で去っていく。先生方にも同様の傾向は見られた。お礼を強要するつもりはないが、事業に参加する側にも最低限のマナーを求めても良いであろう。

こういうふうに、反応がなかったり無言で生活することは、日頃の習慣になっているのかもしれ

ない。今、学校ではパソコンを使った授業も行われていると聞く。博物館施設でもA V機器を取り入れて、ボタンひとつ操作するだけで自分の希望通りのビデオや資料を検索できるシステムもできつつある。何事も機械と向き合ってこなせるので、言葉は不要なのである。

が、私はこういった傾向に疑問を持つ。安易に機器に頼りすぎるのは誤りではないだろうか。仮に新館オープンの時に先端技術を導入しても、それは数年後には「時代遅れ」になる代物である。常に新しいシステムに代替していく用意があるのなら、また、それらの保守点検に充分な時間と予算をかけられるのならば、それもまた良いのかもしれないが、現状ではそこまでとても手が回らずに、やむなく「故障中」の札を下げて、手をこまねいている場合が多いのではないか。博物館に調べたいものがあつてきたのなら、学芸員に相談してアドバイスをうけたうえで自分で学習するとか、こうした人間的なやりとりが大切なではないだろうか。確かに、人員の問題や、窓口に立つトラブルもあって面倒な点も多いが、人が互いに話しをすることが何にもまして大切な学習なのではないだろうか。新しい技術を導入するばかりが進歩ではない。人が人として伸びていくことが進歩だと思うのである。無言で扱えるオートシステムを採用するかたわら「挨拶道路」を作っていることに矛盾は無いのか。こんな疑問を持つのである。

博物館は「古き良きもの」を残すだけでなく、「古き良き社会」というか、こうした「人としての営み」を残していく場所であっても良いと思う。目新しいシステムに振り回されること無く、博物館らしいシステムを継承していくことが、これから求められるのではないだろうか。

今回の企画展では、参加者の声を本当に身近に感じることができた。私自身、これまでに何度も企画展等を担当してきているが、大抵の場合、展示会がオープンしてしまうとその会場にはなかなかいられないものである。せいぜい展示解説や案内・見回りをする程度で、最終日を迎ってしまうことが多い。今回は会期中専ら会場にいられたので、それだけに来館者と関わることもでき、反応も良くわかった。これは、私にとって大きな「収穫」であった。

最後に、私が会期の直前に不覚にも骨折するというアクシデントに見舞われ、左手の固定を余儀なくされた。そのため担当者として作業を十分に実演することができず、口惜しいかぎりである。しかしその間、粉骨碎身惜しみ無い協力をしてくれた、金子保雄さん・香川清美さん・飯塚光生さんには、本当に心から深く感謝している。とくに金子さんには、農業経験者の立場から、農作業をひとつづつ丁寧に指導していただきたり、藁鉄砲を作っていただきたり本当に何から何までお世話になった。厚くお礼申し上げる次第である。

この他以下の方々からもあたたかい御協力をいただいた。ここに、感謝の意を表するものである。

〈協力者〉

大沢 久雄さん、大沢伊津子さん（行田市）

青木 清さん （騎西町）

吉田としえさん （川本町）

行田市埼玉の年中行事

— 1975年前後のこと八日から晦日払いまで —

大 友 務

小稿は、「行田市埼玉の年中行事 — 1975年前後の正月から初午まで —」(本誌 第6号所収)に続く後半部分である。

埼玉地区の概要等は既出稿で記述した。

前回の原稿作成時にはお元気だった横山正三氏は、1994年9月19日に御逝去された。この20年来、公私ともにと言う以上に、身内のようなお世話をいただいてきた。今は衷心から御冥福をお祈りするばかりである。

◆話 者

行田市埼玉5138 萩原 太郎氏 (大正6年9月7日生まれ)

同 萩原 シン氏 (大正11年7月11日生まれ)

行田市埼玉341 故・野口 四郎氏 (明治39年8月12日生まれ)

同 故・野口 トシ氏 (明治43年3月生まれ)

行田市渡柳516 故・加相 誠一氏 (明治32年4月11日生まれ)

行田市渡柳556 伊藤万五郎氏 (明治36年2月18日生まれ)

行田市埼玉344 故・横山 正三氏 (大正7年4月17日生まれ)

同 横山 マサ氏 (大正15年2月17日生まれ)

(A～E家と上記の順は、必ずしも対応していない。)

資 料

◇メカイ節供

現在（1975年前後）では、見かけることもなくなってしまったが、2月8日と12月8日にはメカイ節供という行事があった。家の庭や軒先に長い竿を立ててその先端に大きなメカイを伏せて乗せた。メカイとは、目の荒い籠のことである。この日は、オニが訪れる日であるが、目籠を見てこんなに大きな目の怪物がいると思って退散するのだと伝えられている。オニというのは、悪い病気を持ってくるものだと考えられている。2月と12月に行なったが、どちらも同じ行事内容で、どちらかのときにオニが来る、去っていくなどの区別はとくに聞いたことがない。

メカイを掲げるということは奇妙な行事だと思ってきたが、考えてみると目の病気のモノモライのこともこのあたりではメカイという。それと関係があるのかどうか、ふだんでもメカイ（目籠）を頭から破ると目が悪くなると子供のころは叱られたものである。とくに決まった料理などは作ることはなかった。（B家）

◇木綿坊主

木綿坊主という行事の名前を聞いたことがあるがはっきりとは分からぬ。(E家)

[参考] 久喜市内の聞き書き調査によると旧暦2月15日を木綿坊様とか木綿坊主といった。綿の豊作を祈る行事であったというが、行事の内容は不詳である。

◇彼岸の棚参り

春の彼岸は春分の日を中心に行なわれ、中日（新暦では3月21日前後）にはぼた餅を作り自分の家の仏壇に供えるほか、親戚や近所の仏壇にもお参りに行く。これを棚参りという。他所に棚参りに行くときには、酒、砂糖などを土産を持っていく。寺の墓にもお参りに行く。ぼた餅ではなく草餅を作る家もある。(A家) (B家)

◇雛節供

ヒナセック（雛節供）は、現在でも4月3日に行なっている。雛人形は、嫁の実家から贈られるのが普通で3日の前には飾りつけ、草餅を作る。(A家)

雛節供は、4月3日に行なう。この日は、草餅を食べ、うどんも食べる。(B家)

雛節供は、小さい女の子がいる家で行なうが、最近では3月3日に行なう家も多い。農家でも若い夫婦は勤めに出ている家が多いのでカレンダードおりに行なうようになった。(E家)

◇お日待ち

4月15日と10月15日は、浅間様（延喜式内社・前玉神社）のお日待ち（例大祭）である。この日は、アンビンモチを搗く。現在では行なわない家も多くなってきたが、年寄りのいる家では今でも搗いている家が多い。アンビンモチは、糯米を臼で普通に搗いた丸餅であるが、中には塩味の餡を入れる。大きさは、家によって多少の違いはあるが、だいたい10cm前後である。春と秋のお日待ちでは大きさを違えるものだということを聞いたこともあるが、どちらの方を大きくするものだということは知らないし、実際にはあまり気にしないで作っている。搗いた餅は、家で食べるほか埼玉地区以外の親戚などに届けた。届けるのは子供の役目で、届けられる方も塩餡の餅は珍しいので喜んでくれ、こづかいをくれたものだ。だから子供もそれを楽しみにお使い役を引き受けた。

現在ではアンビンモチを搗くのは、4月と10月のお日待ちだけとなつたが、かつては葬式にもアンビンモチを搗いた。親が死ぬと子供はもちろん近い親戚はアンビンモチを搗いて葬式の施主のところに届けた。1升の米から9個の餅を取る場合と10個を取る場合がある。大きめとそれより少し小さいものを作るのである。作った餅は、ハンダイ（盤台）に入れ、2個のハンダイを馬につけて施主のところに届けた。施主は、届けられたアンビンモチを焼香に来てくれた人達に悔やみ返しとして渡した。昭和の初めのころまでは行なっていたが、第2次世界大戦に入って餅どころではなくなり、行なわれなくなった。昭和20年代以降は、アンビンモチを搗くのはお日待ちのときだけになっている。

春のお日待ちは、養蚕の春蚕の始まる前であり、これがすむと10月末から11月初旬ころまでは養蚕、水田の仕事が続きよいよ忙しくなるという気持ちになったものだ。(B家)

お日待ちのアンビンモチは、たいがいは前日の14日の晩に搗いた。この10年ほどは搗いていない

い。年寄りも亡くなり子供も大きくなってだんだん昔からのことはやらなくなってきた。お日待ちのアンビンモチは秋はでかくて春は小さいとか言ったものだが、その逆であったかも知れない。(A家)

◇端午の節供

端午の節供は、かつては月後れの6月に行なっていたと聞くが、現在では5月5日に行なっている。長男が生まれて初めての節供には嫁の実家から鯉幟などが届けられる。現在はどこの家でも魚の鯉の形をしたものと吹き流しになっているが、かつては竿に武者絵などが描かれた幟旗であった。この日は、柏餅を作り親戚や近所に配る。6月の節供のころならば実際の柏の葉を使った柏餅が作れるが、5月ではまだ葉が出そろっていないので作るのは無理である。それに手間もかかるので、現在では餅屋に頼む家も多い。

また、現在ではあまり見られなくなってしまったが、この日は母屋の軒先に菖蒲や蓬を刺すことが行なわれた。魔除けになると信じられていた。風呂にも菖蒲を入れることが行なわれた。

雛節供は今でも4月の月後れで行なう家が結構あるのに、端午の節供は6月から5月に変わった時期ははっきりとした記憶はないが、相当に早くから5月になっていたと思う。なにせ自分の子供の節供をやっていたころから20年以上もたっているので、忘れてしまう。6月というのは水田も機械化前は5月中旬から苗代作り・種まき・苗取り・田植えと続き、昭和20年代まで行なっていた養蚕が盛んなころは6月上旬といえば春蚕のマユカキ(上簇)で忙しい時期であった。だから6月5日はとても子供の行事を行なっている暇はなかったから早い時期に5月5日行なうようになったのだと思う。(A家)

◇6月1日

6月1日の行事については知らない。月後れの7月1日は、団子と小麦饅頭を作ってオカマサマ(母屋の土間の竈の後ろに祀っている)に供える。(D家)

6月1日には、とくに行事はない。(B家)

◇サナブリ

水田も機械化前は田植えが大仕事であった。5月中旬の苗代作り・種まきのあと6月下旬から7月上旬にかけては苗取り・田植え作業が行なわれた。農家では同じ期間に一斉に行なうので猫の手も借りたい忙しさだった。スケット・テマッカワリといってお互いに手伝い合って行なった。このあたりには、ウマイイ・ウマユイ(馬結)といって何軒かで1頭の農耕馬を回り番で飼うやりかたがあり(参考、大友「行田市埼玉における馬とムギコナシ」『埼玉民俗第5号』所収。1975年)ウマイイの仲間でテマッカワリをしあうこともあった。馬を飼っている家から田焼きのときなどに馬を借り、そのお礼として田植えを手伝いにいく家もあった。

田植えは、株が曲がらないように縄を張ってそれに沿ってまず1株づつを植え、その株を目安に縄と直角に5株づつを植えた。なれた人は、縄だけを頼りに最初から6株づつを植えていった。田植が終わると、苗代の水口に苗を7株刺してから抜いて持ち帰り土間のオカマサマに供えた。これをサナブリといった。苗と一緒に神酒と小麦饅頭15個を供えた。饅頭は、馬にもやった。農具のマンガ(馬鍬)にも供えた。饅頭ではなく赤飯やぼた餅、餅を供える家もあった。サナブ

リのお供え物は、手伝いに来てくれた家にもお礼に届けた。(D家)

◇野上がり正月

大正時代には、地域全部の田植えが終わると触れ（知らせ）が回りみんなで仕事を休んだという。これをノアガリ（野上がり）正月といった。当時は、日曜日だから仕事が休みというわけではなかったので、このように仕事の区切りで一斉に休みを取った。ノアガリ正月や節供などの休み日に働く人のことは「物草者の節供働き」と陰口を言われたものだ。もっとも、最近は日曜日に休むどころか若い人は勤め人が多くなったので農家仕事は日曜日や勤めから帰ってきてからする家も多くなった。仕事も機械化が進んでそれでもすむようになった。(B家)

◇初 山

埼玉地区の鎮守・前玉神社のことは、浅間様といっているが、赤ん坊が生まれたときは浅間様の神主さんに頼んで名前をつけてもらった。3種類くらいの名前を書いてもらい、家で籤を引いてどの名前にするか決めた。誕生の祝いは、餅を搗き嫁の実家の親も呼んで行なった。

前玉神社は、6月30日と翌日の7月1日が浅間様の山開きで、生まれてから初めてこの日を迎える赤ん坊はお参りに行く。これを初山という。赤ん坊が生まれると初山以外にも男の子は生まれてから31日目、女の子の場合は21日目にお宮参りといって浅間様にお参りをする。

初山のときは、神主さんから赤ん坊の額に印を押してもらう。こうすると赤ん坊が元気に成長するといわれている。神社では、初山の団扇やふきん、お札を受けて（買って）きて生まれたときのお祝いを貰った親戚や隣組などに茶菓子などをつけて配る。これを初山土産といっている。配るのは1軒には団扇1本だが、少ない家でも5、6本だいたいは5、60本は神社から受けしていく。

赤ん坊が生まれて、初山を行なわない家はまずないだろうが、最近は若い夫婦は勤めている人がほとんどなので、だんだん山開きの日取りに限らなくなってきた。日曜日に行く人も多いという。(B家)

6月30日と翌日の7月1日は山開きで、7月14、15日は、浅間様の祭りである。祭りには昔は神輿が出たと聞くが自分が見た記憶はない。(A家)

山開きのころはちょうど田植えの時期で、「今日は初山だから赤ん坊を連れて行かなくては」と田植えを抜け出してお参りに行ったものだ。(E家)

◇お獅子様

埼玉地区に限らず行田地方には、春から夏にかけてオシシサマ（お獅子様）といわれる行事がある。北埼玉郡騎西町の延喜式内社・玉敷神社から獅子頭と猿田彦の面と木製の剣を借り受けて笛・太鼓の囃子の音に合わせながら各家を回る。玉敷神社に借りに行くときは走っていくのが本当のやり方だといわれているが、2、3里はあるからとても走っては大変なので、ずっと以前から自転車で行くようになり、現在は車で行く。神社の方では朝の5時ころには貸し出す用意をして待っているので、車になっても朝一番の仕事で行くことになる。神社側では、何日はどことどこという貸し出しの書き物があつてその分のお獅子様は用意しているのだが、万が一にも遅く行ったら借りる分がなかつたということにでもなれば耕地（小字）の人達に申し開きができないので、朝早くでかけていく。もっとも、若いころに年寄りに聞いた話では、本当に真夜中のう

ちに走って借りに行き、戻ってくるときにはさすがに疲れ、借り受けたものもあるのでそうそう走ることもできずに、さもさもずっと走ってきたように耕地が近づいてから走り出したものであるという笑い話のような苦労話もあった。

お獅子様のやり方は、以前は各家の座敷にも土足のまま上がり家の中を駆け抜けるのが習わしだった。このようにして魔除けになると信じられてきた。家によつては酒でもてなす場合もあり、つい酔つて元気が出過ぎてしまい座敷の中を暴れてしまうこともあった。もっとも、気の合わない家では酔つたふりをして暴れるということもあったようだが、ともかく、このような荒獅子ではしようがないということになってやり方を改めた。それまでは若い衆が猿田彦の面を破つて回つたが、以後は面を頭の上に掲げて家の入口で拝むようにした。

お獅子様は、埼玉地区の小字でもどこでも行なっている行事ではなく渡柳・富士山・野・百塚の小字で行なっている。玉敷神社が貸し出す都合もあるから行事のある日は同じ日ではない。渡柳は7月18日に行なっている。最近は、各家を回るのも大変だということで、耕地の鎮守で拝んだあとはトラックにお獅子様を乗せて耕地内を回っている。(D家)

◇百万遍

お獅子様と同じころの行事に百万遍がある。埼玉地区の上埼玉と下埼玉の行事である。埼玉地区の小字では、お獅子様か百万遍かどちらかの行事を行なっている。行事の内容は違うのに時期も同じだし、魔除けのためということも同じで、しかも同じ地区では両方はやらないというのだから、お獅子様と百万遍は何か関係があるのではないかと以前から思つている。

上埼玉では7月16日が百万遍の日で(平成6年現在は、それに近い土曜日か日曜日)で、百万遍は大きな数珠を子供たちがみんなで持つて「ナンマイダー」といいながら各家を回る。現在は、数珠は大人が盆に乗せて持ち、小学生は縄みたいなものを持って回る。各家では回つてゐる大人がその家の家族にお神酒を出し、来てもらつた家ではお賽錢を出す。百万遍は、回つてきた人に水をかけると縁起が良いといつて各家ではバケツに水を用意しておいて水をかけてやる。回る方はずぶぬれになつて回る。(E家)

◇盆の蓋あけ

8月1日は、地獄の蓋があく日だというが、とくに行事などは行なわない。(E家)

◇七夕

8月7日は、七夕で前日の6日に七夕の飾りを作る。短冊や色紙に願い事などを書き、裏山(母屋の北側にある竹林)から取つて来たシンコ(その年に出てきたばかりの竹)に下げる。竹は母屋の前の庭に立て、7、8mほど離れたところに杭棒を立ててその間に真菰で縄を渡す。縄には真菰で作った1m余りの馬を向かい合うように吊るし、馬と馬の間にはホウズキとうどんを下げる。馬は雌雄の2頭だという。うどんは馬の手綱だという。7日の朝にはうどんを食べる。(E家)

七夕の馬の真菰は、近くの小針沼から刈つてきた。ウチでは七夕はうどんではなく、赤飯を食べ馬にも皿に盛つた赤飯を供えた。(C家)

真菰を刈る日などはとくに決まっていない。刈つてからしばらくは干しておかなければならな

いので、天候の具合などを見て近くの用水から刈ってきた。8月の初旬は各家から1人づつ出て用水の真菰刈りをすることが多かった。用水の水の流れをよくするための作業だが、そのときに刈った真菰を使うこともあった。昔は、七夕の朝には水を浴びた。(B家)

七夕飾りは、8日の朝には取り外す。馬は洪水のときには家をまもってくれるといわれており、家のトボ口（大戸のある入口）の上や倉の柱などに吊るしておいた。屋根の上に放り上げる家もあった。その馬は1年間は、そのままにしておき、新しい馬を吊るすときに前年のものは取り外して七夕飾りに使ったシンコといっしょに用水や川に流した。最近は、幼稚園などでも七夕の短冊作りなどをするので竹飾りを立てる家はあるが、馬まで作る家はほとんどなくなってしまった。それに、昔と違って馬などを川に流すと環境を悪くするという声もあるので、やりずらくなってきた。(A家)

◇盆の期日

大正時代までは、9月1日が迎え盆の日だった。関東大震災のあとで現在と同じ8月13日に迎え盆をするようになった。(B家)

◇盆

盆には、盆棚を作る。盆棚は、縁側（母屋南側の廊下）に作る。シンコを廊下と座敷の柱に結わえて立て、障子2枚を左右に立ててコゼナワ（細縄）を巻いて固定させる。竹を2つに割ったものなどで棚を作りその上にボンゴザ（盆蓆）を被せる。普段は仏壇においてある位牌や香炉、花立てなどを盆棚に置き、仏さんの掛け軸も下げる。棚の下にはショウウリヨウサマ（精霊様）を祀る。ショウウリヨウサマとは、行き倒れになった人などや生まれたばかりに亡くなった子など棚の上で御先祖様として祀られない無縁仏のことであるという。水を上げ、灯明、線香もつけて棚の上に比べれば簡単な形だけれど、一応は棚と同じものを供える。

8月13日は迎え盆であるが、この日になる前に寺にいく用事がある。重箱に1升くらいの米を入れ、茄子、胡瓜などの野菜と一緒に持つて行く。これをボンブチという。寺ではヒキチャ（粉茶）を受けてくる。

13日の迎え盆は、夕方には花、花立て、オサゴ（洗米）、線香、水を持って寺に御先祖様を迎えていく。寺からは提灯に明かりをつけて戻ってくる。家では、入口に手桶に水を張って迎える。先祖様の足を洗うためだという。「お疲れ様でした。足を洗ってお入りください。」と手桶の水を撒くのである。我が家では、入口ではなく盆棚の棚とショウウリヨウサマに丼に水を入れておいておき、これで足を洗ってもらうのだといわれている。丼には、足を洗うためだといってミソハギ（溝萩）を入れておく。

盆棚の供えものは、13日の御先祖様を迎えてきた夜はボンブチを持っていって受けてきたヒキチャのお茶、14、15日は朝はぼた餅、昼うどん、夜は御飯ととうなす汁と決まっている。

盆の期間中は、タナマイリ（棚参り）といって親戚や隣組の人がお参りに来る。とくに新しい仏さんが初めて初めての新盆には提灯を贈られるので、そのすべてを盆棚の周りに吊るし、タナマイリに来る人も多い。来た人には、盆の決まり料理のぼた餅やうどんを御馳走する。盆の期間中に寺からお坊さんが来て読経を上げていく。

御先祖様をお送りする送り盆の前日の15日には2個の茄子に足をつけて2頭の馬を作り、盆棚に供えておく。馬の食べ物として茄子をサイの目に切ったものも供える。ショウリョウサマの方にはウチでは供えるが、簡略に棚の方だけ供える家もある。

16日は、いよいよ送り盆の日で、朝にはぼた餅の他に団子を供える。団子は地獄の閻魔様への土産だというので、土産団子という。昼はうどん、夕飯は小豆飯と決まっている。小豆飯の他にジオウサマに供えるといってヨゴシという茄子の胡麻味噌和えを作つて供える。

暗くなってから、提灯をつけて御先祖様を送り出す。行き先は、寺にいく家と自分の家の畠の昔から決まった場所、ケイド（母屋から表通りにつながる通路）の表まで送る家などがある。送り盆の棚を作るところは2尺四方ほどの草を刈って奇麗にし、真菰の小さな蓆（縦横4、50cm）の上に皿に盛った土産団子、2頭の茄子の馬、ホオズキ、野菜類を供え、竹を切つて作った花立てに金銀の造花を刺す。焼香を灯し、笛などを燃してその煙に乗つて御先祖様に帰つてもらう。（B家）

◇八 朔

9月1日は、ハッサク（八朔）といつて嫁の里帰りの日である。現在は、嫁も自分で車を運転できるし何か用があるとすぐに帰れる時代になったが、昔は近くの村から嫁いできたといつても歩きだから帰るのも大変だった。それに姑の目も気になるし。その点、八朔には大威張りで帰れたのだから楽しみであった。

実家に帰れるときは、生姜を土産に持つて帰る。実家では、饅頭、そば、うどん、赤飯などの変わり物を作ってくれた。だいたいは1泊してから戻ったが、そのときには実家で作ってくれた変わり物と箕を土産に戻った。生姜を持って帰り、箕を土産に戻るのは「しょうが（生姜）ない嫁だが見（箕）直してください。」という意味だといわれている。（A家）

◇十五夜

旧暦の8月15日は十五夜で月にお供えものを上げる。新暦では9月中旬になる。箕の上に月見団子の他、里芋、栗、柿などの農作物を供え、花瓶か空き瓶にススキ、十五夜花（シオン）を挿してかざる。団子は粳米の粉で作ったもので15個供える。まだ稻の収穫時期になっていないから前年の秋に穫れた米を使う。団子ではなく、以前はその年に穫れた小麦で蒸し饅頭を供える家も多かった。栗、柿などは5個供えるものだといふ人もいる。

供え物は、盗まれると縁起が良いと考えられており、子供たちが竹竿の先で刺して取つていつたものである。最近は、普段から御馳走を食べているので、わざわざ盗みに来る子供もいなくなってしまった。それに、箕を使わずにお膳に乗せるなど、供え方も少しづつ簡略化してきているし、供えない家も増えている。（B家）

十五夜のものを食べると、一生、国巡りをする（あちこち点々と暮らす。）といつて、子供のころも食べさせて貰えなかった。（C家）

十五夜の供え物を、女の子が食べるとお月様のようにいつも動いている（良縁に恵まれない。）といつて、娘には食べさせなかつた。（D家）

◇秋の彼岸

秋分の日を中心とする1週間。中日は、9月23、4日ころ。行事内容は、「彼岸の棚参り」の項参照。

◇クンチ

旧暦の9月9日はクンチといって家の神仏に供え物をする日だというが、現在は何も行なっていない。(C家)

◇十三夜

旧暦9月13日は十三夜で、8月の十五夜には蒸した団子を供えるが、十三夜には生の団子を供えるものだという。実際には十三夜の行事は行なっていない。(B家)

◇十日夜

旧暦10月10日は、トオカンヤ（十日夜）といって子供たちの行事があった。収穫したばかりの干した稲藁で両手で握ったくらいの太さの藁束を作り、ほどけないように藁でぐるぐる巻にする。藁束の芯には芋がら（里芋の茎を干したもの）を入れる。藁束の一方を握りやすいように輪に作る。これを藁鉄砲という。竹を二つに割った物を振って音を出す竹鉄砲というものもあった。10日の日には、それぞれ藁鉄砲を持った子供たちが寄り合って「トオカンヤ　トオカンヤ　忍の鉄砲に負けるな。」と掛け声をかけながら地面に打ち付けた。家の庭で輪を作つてやつたものだ。各家では、小遣いをやつた。忍の鉄砲というのは、行田の忍城に大砲があり、明治時代になつても正午の時間を知らせるのに空砲をならした。その音に負けないほど大きな音で藁鉄砲を打ちつけようという意味である。

トオカンヤは、ちょうど麦蒔きを終えた時期の行事で、麦畑を耕すのに蛙を切つてしまつたりして犠牲になるので、蛙の供養の行事だといわれている。

この行事も第2次世界大戦が始まったころには行なわれなくなつてしまつた。(B家)

◇神送り・神迎え

神様が出雲に行くとかいうことは知らない。そういうこととは別に、秋から暮れにかけて「出雲から来ました。」といって「出雲大社」と書いたお札を持ってくる。袴をはいた50歳くらいの女性である。「御苦労様」といってお札を受け、すぐに大神宮様に上げて手を合わせる。子供のころから（大正15年生まれ）来ている。（昭和60年代に入ってから来なくなつた。歳を取つて来られなくなつたのかと思う。）(E家)

◇恵比寿様

11月20日は秋の恵比寿講である。この日は、収穫、脱穀を終えたばかりの新米を炊いて恵比寿・大黒様に供える。山盛りに盛つて供える。新米は、屋敷鎮守（屋敷神）の稻荷様にも供える。恵比寿・大黒様には、新米の他に秋刀魚2尾づつとお神酒、ケンチョン汁を供える。ケンチョン汁には、里芋、人参、ごぼうを入れる。(D家)

11月20日になると「今日の恵比寿講だから新米を炊こう。」といって新米を炊いて恵比寿様に供え、家族も食べる。恵比寿様には新米とケンチョン汁、秋刀魚を供える。恵比寿講は、11月20日だけである。1月20日はハツカショウガツで雑煮を食べるが、恵比寿様の行事は行なわない。また、恵比寿様が出かけるとか帰つてくるとかいうことも知らない。(E家)

◇川浸り

12月1日には、とくに行事はない。(B家、E家)

◇メカイ節供

旧暦12月8日はメカイ節供の日である。これは旧暦2月8日と対になっている行事だが、実際には早くに行なわれなくなってしまった。(行事内容は、2月の「メカイ節供」の項参照。)

◇大師講

旧暦11月24日は大師講の日で、小豆粥を作った。現在は行なわれていない。(D家)

◇星祭り

地域全体の祭りではないが、冬至の日には前玉神社で星祭りが行なわれている。午前11時ころから湯立て神事を行ない、空に向かって矢をいる。神事に使った弓や矢は魔除けになるとして集まった人達が持ち帰り、家の入り口などに掲げておく。昔からの行事ではない。(B家)

◇大掃除

年末の大掃除は行なうが、日にちは決まっていない。(E家)

◇歳暮

年の暮れになると、分家から本家に歳暮シャケ(鮭)を持って来る。かつては、新巻き鮭と決まっていた。貰ったシャケは、土間の梁に下げて保存した。持ってきてもらうと本家では酒と食事を出し、品は決まっていないが有り合わせの土産を渡した。(B家)

◇餅搗き

正月の餅搗きには、年末28日に行なうことが多い。28日と決まっているわけではないが、翌日の29日は苦(9)餅、大晦日は一夜餅といってこれらの日は避ける。(E家)

◇晦日払い

大晦日にはミソカッパライ(晦日払い)といつて、浅間様から受けた御幣と新縄で屋敷鎮守の稻荷様に注連縄を張り、家の主人が御幣で「払いたまえ、清めたまえ」と唱えながらお払いをする。御幣は、稻荷様の側の地面に立てておく。(A家)

埼玉地区年中行事の特徴

[行事間の継承性]

本誌第6号と小稿で行田市埼玉の年中行事を記述したが、多くの行事が行なわれなくなっていく中で一つの行事から次の行事へと結び付けようとする「行事間の継承性」とでも言うべき意志を感じ取ることができる。その特徴は、正月を中心とする春の行事に顕著である。第6号に掲載した部分であるので内容を少し詳しく紹介すると

- 1 正月4日は棚さがしの日で、歳神棚に上げてあるうどん・雑煮を下げる日である。下げるものは、7日の七草オジヤに入れて食べる。
- 2 正月20日はハツカショウガツで、卯の日に歳神様から下ろしたお供え餅を入れて雑煮にした。
- 3 ハツカショウガツの雑煮には、もの作りの日(正月14日)に搗いた餅を入れた。
- 4 年越し(節分)の豆は少し残しておき、初午のスマツカリに入れることになっている。
- 5 雷のときに年越しの豆を庭に蒔けば(あるいは食べれば)雷が落ちないと言う。

以上の事例をみることができる。これらは、歳神への神供→七草、歳神への神供→二十日正月、小正月→二十日正月、節分→初午、節分→雷と儀礼食を媒介として行事の間に継承性を持たせようとする志向を認めることができる。

〔神去来観念の衰退〕

周辺地域の事例から埼玉地区にもかつては伝承されていたであろう行事がすでに記憶から消え去っている、あるいは行なわれなくなつて久しく遠い記憶となっている行事も多い。

メカイ節供は、12月8日と2月8日の2回、正月を挟んで行なわれてきた行事である。「鬼が訪れる日」であるが、すでに1975年当時でも「見かけることがなくなってしまった」行事である。

恵比寿講は、11月20日と1月20日に行なわれてきたが、正月20日の恵比寿講はハツカショウガツと同日であるためか恵比寿講としての影は薄い。その一方で11月20日（旧暦10月20日の月遅れ）の恵比寿講は、「収穫、脱穀を終えたばかりの新米を炊く」日としての意識が強く、収穫祭の色合いが濃い。埼玉県内でも神無月20日はイリエビスといって、（児玉郡神泉村下阿久原など。以下、県内の事例については主に埼玉県編刊『新編埼玉県史 別編2 民俗2』1986年の「第10章 年中行事」・八朔～年末は筆者稿・を参照とする。）恵比寿様が出稼ぎから帰って来る日と伝えるところは多いが、埼玉地区では恵比寿の去来伝承は耳にすることができなかつた。

神無月に神々が出雲に行くという信仰は全国に広く分布しているが、埼玉県は竈神のオカマサマとかコウジンサマだけが出雲に行き、中帰り・中通いと称して15日に1度戻つて来る（15日にはオカマサマに団子を供える。）という埼玉独特の形態を伝承している地域である。しかし、埼玉地区では神無月の神送り・神迎えの伝承は確認できなかつた。この伝承には収穫祭的な意味合いが認められるが、埼玉地区ではその性格は恵比寿講に顕著であることは記述のとおりである。

大師講も神去來と収穫祭的な意味合いを持つが、わずかに小豆粥を作つた記憶を残すだけである。

〔行事消滅の要因〕

- 筆者はかつて久喜市内の年中行事の資料に基づき、行事の衰退の傾向を抽出する試みを行なつた。（久喜市史編さん室編『久喜市史 民俗編』1991年。第1章「久喜の民俗の概要」、第4章第2節「年中行事」）。それによれば、正月の諸行事には衰退傾向が強いのに対して盆は調査時点でも盆棚など簡略化されたものもありながら盆行事全体としては盛んに行なわれている。そして他の行事としては
- A(1) 徒従よりも現在の方が盛んな儀礼=子供が主役の家単位で行なう儀礼→お年玉・雛祭り・五月節供・七五三
 - A(2) 現在も行なつてゐる儀礼= 同 上 →節分・豆まき・おしゃか様祭り
 - B 同 上 =寺社との関わりが深い儀礼→春彼岸・初山参り・天王様の祭り
 - C 消滅またはその傾向にある儀礼=子供集団による共同の儀礼→天神講・十日夜
 - D 同 上 =農耕との関わりが深い儀礼→木綿坊主・二百十日・二百二十日
 - E 同 上 =儀礼の対象がなくなったもの→恵比寿講・次郎の朔日・こと八日・儀礼の持つ意味が忘れられて 春ごと・八朔・三九日・神送り・しまつたもの 神迎え・大師講・川浸り朔日・奉公人の出替わり

年間の行事構成が若干異なるが、この傾向は埼玉地区でも同様に認められる。埼玉地区の資料から付け加えるべき点を読み取るとすれば、行事の衰退・消滅のきっかけとして期日の変化、あるいは他の行事との併合が上げられる。例えば小正月のもの作りは「2月に正月を行なっていたころは作ったが、1月に行なうようになってからはしていない。」し、ハツカショウガツも同様である。十日夜や大師講も旧暦期日で行なっていたわけで、これをあえて新暦月後の期日に変更してまで伝承する必然性を感じなかつたのであろう。

また、旧暦6月1日は室町時代以降近世までは「氷の朔日」といって凍った餅を献上することなどが武家などの儀礼とされた日で、民間年中行事でも北陸地方から山陰地方にかけては、この行事名で正月の餅を凍らせておいて6月1日に食べる行事が行なわれてきた。埼玉県内ではケツアブリと称して、麦藁を庭先や門のところで燃して、その煙で尻をあぶると風邪を引かない、腫物ができると言われてきた。そしてこの日は小麦饅頭を食べる。埼玉地区資料の「6月1日の行事については知らない。月後れの7月1日は、団子と小麦饅頭を作つてオカマサマに供える。」がまさにこれである。しかし、旧暦6月1日、月後れの新暦7月1日は埼玉地区の鎮守・前玉神社の山開き・初山である。小麦饅頭も山開きのお祝いのように思われ、ケツアブリの名称・行事は（行田市下中条では1975年当時も伝承していたが）埼玉地区では早くに忘れ去られたようである。

6月1日と期目的にも対置している12月1日の川浸りは、すでに忘れ去られている。久喜市内の事例を参考にすると大正時代の記録には「かびたり」の名称で「此の日、餅を作りて食す。之を度量定めの餅といふ。」とあるが、調査時点では「餅を食べた」という記憶を呼び戻してくれた古老がわずかにいただけで、行事名称などは忘れられていた。埼玉地区もほぼ同様であり、この期日は月後れにすると新暦の元旦にあたり、行事の本来の意味も早くに忘れ去られていたであろうから、遅かれ早かれ消滅する運命にあった行事である。

おわりに

行田市埼玉の年中行事を概観してきた。まず、春の行事間の継承性に注目したが、本来は継承性がもっとも強いのは神去來の觀念に基づく行事であった。（田中宣一「年中行事の構造」『日本民俗文化体系9』小学館刊、1984年。田中『年中行事の研究』桜楓社刊、1992年所収。参照）。埼玉地区においては、早くに衰退傾向を辿ったわけだが、春の行事間の継承性は伝承者にも強く意識されている。年中行事は、時代とともに、生活とともに変化と持続をしてきたわけだが、行事の多くは本来的には継承性を持ち、それが変化する中で継承性が希薄になり独立的な行事へと成長（あるいは衰退）していく傾向が認められるのではないかと思われる。恵比寿講も秋だけに行ない春は行なわない家の行事には、継承性は見られずに独立的な行事の形態を示しているのがその一例である。

一方で、独立的に伝承されてきた行事間に新たな継承性が生ずる場合もあり得よう。必ずしも残存状況が良いとはいえない埼玉地区の年中行事の中でも春の行事、しかも他の地域では独立的に伝承されている場合が多い節分と初午の間に強い継承性が認められるのは、「良いことは長続きしてほしい。」という伝承者意識によるりある時点で生じた継承性のように思われる。

埼 玉 地 区 生 产 曆

	水 稲 (機械化前)	同 左 (機械化後)	大 麦	陸 稲	養 蚕	年 中 行 事 (旧行)	年中行事 (1975年前後)
1月			麦踏み			・餅搗き (28日) ・正月・七草 (7日) ・小正月	
2月			ニバンザク、麦踏み			・正月・節分・七草 (7日) ・モノツクリ等 ・二十日正月・晦日正月	・節分
3月	ニボウナイ		追肥			・初午	・雛祭り (3日) ・初午
4月		箱苗の採土 (田植機導入後)	土入れ、麦踏み トメザク			・彼岸 ・雛祭り (3日) ・お日待ち (15日)	・彼岸 ・雛祭り ・お日待ち (15日)
5月	苗代つくり、播種 ミボシ	(苗代つくり、播種)		施肥、播種	春蚕		・端午の節供
6月		田植 (田植機導入後) 苗取り、田植え (耕耘機導入後)	麦刈り 脱穀、調整	除草 ・麦のカッパ抜き		・端午の節供	
7月	イチバンゴ ニバンゴ、追肥			カッパ返し イチバンザク		・山開き、サナブリ ・初山・お獅子様 ・百万遍 (渡柳)	・山開き ・初山・お獅子様
8月	サンバンゴ ・土用干し ・出穂水			除草、中耕 (3回程度)	初秋蚕	・七夕 (7日) ・盆 (13~16日)	・七夕 (7日) ・盆 (13~16日)
9月					晚秋蚕	・八朔 ・盆 (大正時代) ・十五夜	・(八朔) ・十五夜
10月	糯米、早稲刈り取り	刈り取り 脱穀 調整	施肥 耕起、碎土 麦播き	刈り取り 脱穀、調整	晚々秋蚕	・十日夜 (10日) ・お日待ち (15日)	・お日待ち (15日)
11月	刈り取り イチボウナイ					・恵比寿講 (20日) ・メカイ節供 (8日)	・恵比寿講 (20日)
12月	脱穀・調整		イチバンザク			・星まつり ・大師講	・星まつり ・餅搗き

(『さきたま民俗暦』1977年：筆者稿から加筆転載)

調査研究報告 第8号

印 刷 平成 7年 3月 21日

発 行 平成 7年 3月 28日

編集・発行 埼玉県立さきたま資料館
〒361 行田市埼玉4834

印 刷 関印刷株式会社
〒360 熊谷市宮町2丁目72